大清帝國欽差頭等全權大臣（太子太傅文華殿大學士一等肅毅伯直隸總督部堂）　李　鴻　章

（第四十六號）

大日本帝國全權辨理大臣ハ玆ニ大清帝國欽差頭等全權大臣閣下ニ向テ左ノコトヲ告知スルノ光榮ヲ有ス。

閣下ニ於テ若シ左ノ日時ニ御差支ナケレバ兩國全權大臣ハ本月二十日午後三時其ノ爲メ擇定セシ場所ニテ第一回ノ會晤ヲ爲スベシ、而シテ其ノ時ニ於テ互ニ帶有スル所ノ全權委任狀ヲ交換スベシ。

明治二十八年三月十九日

大日本帝國全權辨理大臣　伯爵　伊　藤　博　文

大日本帝國全權辨理大臣　子爵　陸　奥　宗　光

（第四十七號）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝（御名）此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス。

朕大清國トノ平和ヲ回復シ將來ノ友誼ヲ保維スル爲メ玆ニ信任スル所ノ內閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文、外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ノ材能敏達ニシテ忠誠公ニ奉ジ勤愼事ニ從フテ以テ特ニ全權辨理大臣ニ簡命シ委スルニ各別ニ又ハ共同シテ清國ヨリ特派スル所ノ全權大臣ト會同協議シ便宜事ヲ行ヒ媾和條約ヲ締結シ之ニ記名調印スルノ全權ヲ以テス、而シテ其ノ議定スル所ノ各條項ハ朕親シク檢閱ヲ加ヘ其ノ妥善ナルヲ認メタル後之ヲ批准スベシ。

神武天皇卽位紀元二千五百五十五年

明治二十八年三月十五日廣島行在所ニ於テ

親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名國璽

內閣總理大臣　伯爵　伊　藤　博　文　副署

（第四十八號）（譯文）

大清國大皇帝勅諭ス現ニ大日本國ト重ネテ睦誼ヲ敦フセムト欲スルニ因リ特ニ文華殿大學士直隸總督北洋大臣一等肅毅伯李鴻章ヲ頭等全權大臣ニ任ジ日本國派スル所ノ全權大臣ト會同商議シ便宜事ヲ行ヒ媾和條約ヲ締結セシメ予フルニ記名調印ノ全權ヲ以テス該大臣ハ公思國ヲ體シ夙ニ勳勞ヲ著ハセバ定メテ能ク詳愼事ヲ行ヒ邦交ヲ締結シ朕ノ委任ニ負カサルベシ。其ノ議定スル所ノ條欵ハ朕親ク查閱ヲ加ヘ果シテ妥善ナラバ之ヲ批准スベシ特ニ勅ス。

（第四十九號）（譯文）

大清欽差頭等全權大臣ハ現ニ媾和條約ヲ開議スルノ始メニ於テ兩國ノ陸海軍直チニ一律ニ休戰

シ、以テ和約條欵ヲ商議スルノ地歩ト爲サムコトヲ請フ此ノ議ハ已ニ數月以前ニ於テ北京駐劄米國公使ヨリ東京駐劄米國公使ニ電達シ貴國政府ヘ商議セシニ貴國政府ハ兩國全權大臣會合ノ時ニ俟テ如何ニ休戰シ和ヲ講ズベキヤヲ言明スベシト電答セラレタリ、今ヤ本大臣媾和條約ヲ締結シ之ニ記名調印スルノ全權ノ奉有スレバ切ニ我朝廷ヨリ委ネラル、所ノ重任ニ負カザラムコトヲ願ヘリ、因テ特ニ重ネテ前義ヲ提出ス思ニ請フ所ノ休戰ノ一事タルヤ媾和條約ヲ妥成スルノ第一要義ナリ、右茲ニ聲明シ且貴答ヲ乞フ。

（第五十號）

大日本帝國全權辨理大臣ニ於テハ戰地ヲ距ルコト遼遠ナル此地ニ在テ休戰ヲ約スルコトヲ以テ媾和談判ノ妥局ヲ結ブニ必須ノ要義ト視做スコト能ハズト雖モ、若シ兩國ニ向テ均等ノ利便ヲ擔保スルニ足ル條件ヲ附スルニ於テハ休戰ヲ肯諾スベシ。

大日本帝國全權辨理大臣ハ目下ノ軍事上ノ形狀ヲ察シ、併セテ彼此交戰ヲ中止スルニ因テ生ズル所ノ結果如何ヲ顧ミ左ノ條件ヲ附スベキコトヲ聲述ス。

日本國軍隊ハ大沽、天津、山海關、並該所ニ在ル城壘ヲ占領スルコト。

前記各所ニ在ル清國軍隊ハ一切ノ軍器、軍需品ヲ日本國軍隊ヘ引渡スベキコト。

日本國軍務官ニテ、天津、山海關間ノ鐵道ヲ支配スルコト。

休戰期限間清國ハ日本軍事ノ費用ヲ負擔スルコト。

若シ以上ノ條件ニシテ異議ナクムバ休戰ヲ實行スベキ期日、其ノ期限、日清兩軍ノ經界線及其ノ他ノ細目ヲ直チニ提出スベシ。

大日本帝國全權辨理大臣ハ今茲ニ此ノ回答ヲ爲シ、且將來ノ誤解ヲ防グガ爲メ曩キニ清國政府ガ休戰ノ事ヲ提議セラレシニ當リテ帝國政府ヨリ與ヘシ所ノ回答ハ大清國欽差頭等全權大臣閣下ガ稱セラル、ガ如キ意義ニ非ザリシコトヲ一言シ置クコト必要ナルベシト思惟ス、當時帝國政府ニテ用ヒシ所ノ語言ハ左ノ如シ。

又假令日本國政府ガ休戰ヲ許諾スル場合アリトスルモ兩國全權委員會合ノ上ニ非ザレバ日本國政府ハ右休戰ニ關スル條件ヲ明述セラルベシ。

（第五十一號）（譯文）

大清帝國大皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣ハ大日本帝國大皇帝陛下ノ欽差全權辨理大臣ヨリ回答セラレシ休戰ニ關スル覺書ヲ披閲スルニ所載ノ條件ハ萬之ヲ肯諾シ難ク殊ニ遺憾トナス。本大臣ハ此ニ來リ誠意ヲ以テ和ヲ議スルモノナレバ媾和條約ヲ商議スル間一時休戰ヲ行フハ實ニ兩國ノ體面權利上均シク有益ナリト信ジタルヲ以テ本月二十四日ノ覺書ヲ提出セリ、本大臣ニ於テハ請フ所ノ事ハ極メテ理アルノミナラズ各國普通ノ慣例ニモ適合セリト思惟セシモ貴大臣ニハ未ダ見テ以テ然リ

トセラレズ然レドモ本大臣ノ心ヲ盡クシテ和ヲ議セムトスル始メヨリノ類望ハ毫モ減ズル所ナケレバ兩國和局ノ速ニ成ルニ至ルコトヲ期望スルノミ。敬具

（第五十二號）（譯文）

大日本帝國皇帝陛下ノ欽差全權辨理大臣閣下本日午後本大臣會議處ヨリ歸途突然意外悼ムベキノ難ニ遭ヒタルヲ以テ甚ダ遺憾ナガラ面約セシ如ク明日午前十時親ラ會議スルコト能ハズ、因テ特ニ茲ニ貴大臣ニ通告スルハ明日約束ノ時刻ニ至リ本大臣ヨリ李經方ヲ差出スベケレバ已ニ提示スルコトヲ肯諾セラレタル所ノ大日本國提議ノ媾和條件ニ關スル覺書ヲ李經方ニ交附セラル、コトヲ望ム、而シテ本大臣ニ於テ之ヲ接受セシ上ハ速ニ詳細ニ之ヲ調査スベシ。本大臣ハ又多日ヲ待タズシテ更ニ貴大臣ト會議スルヲ得ルコトヲ希望ス。敬具

光緒二十一年二月二十八日（我三月二十四日）

大清帝國欽差頭等全權大臣 太子太傅文華殿大學士一等肅毅伯直隸總督部堂　李鴻章

（第五十三號）

以書翰致啓上候陳者昨日貴簡ヲ以テ閣下ニハ悼ムベキ出來事ノ爲メ約ニ從ヒ今朝會晤セラルヽコト能ハザルニ因リ帝國政府提求ノ媾和條件ヲ具載スル書面ヲ李參議ニ手交シ以テ之ヲ閣下ニ轉交スル樣御請求ノ趣致閲悉候。閣下ヨリ此ノ御請求アルニ至リタル所ノ驚痛スベキ凶變ヲ聞ニスルヤ本大臣等ハ直チニ閣下ノ旅館ニ至リテ御容體ヲ問ヒ且閣下ガ斯ル暴虐ナル難ニ遭ハレシハ痛悼ノ至リニ堪ヘザル旨ヲ申述置候。而シテ斯ル痛悼ノ情ハ日本帝國臣民一般ニ於テモ同感ナルベキコトハ本大臣等ノ保證スル所ニ有之候。

今日迄行懸リノ談判ニ付テハ本大臣等ハ御請求ニ從ヒ李參議ヲ經由シテ之ヲ爲スベシト雖モ先ヅ以テ閣下遭變ニ關スル情形ヲ我皇帝陛下ニ奏報スベキ必要等モ有之候得バ少ク遲緩ヲ招クハ是亦實ニ免レ難キ次第ニ有之候尤モ右ニ付本大臣等ヨリ何等申入ルヽコトヲ得ベキ時到來次第直チニ其旨李參議ヘ通告可致候本大臣等ハ茲ニ更ニ痛悼ノ意ヲ伸フルト同時ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候。敬具

明治二十八年三月二十五日下ノ關ニ於テ

大日本帝國全權辨理大臣 伯爵　伊藤博文

大日本帝國全權辨理大臣 子爵　陸奥宗光

（第五十四號）（譯文）

大清帝國欽差頭等全權大臣一等肅毅伯　李鴻章閣下

大日本帝國大皇帝陛下ノ欽差全權辨理大臣閣下昨日付貴翰接手セリ本大臣ガ悼ムベキノ難ニ遭ヒ親ラ會議スルコト能ハザルヲ以テ、二十八日付書簡ヲ送呈セシニ深ク遺憾ノ意ヲ表セラレ、且本大臣ノ前簡中ノ趣旨ヲ遵ビ措施セラルベキモ少ク遲緩ヲ招クコトヲ免レザル旨開示セラレ之ヲ領悉セ

リ。昨日ハ旅館ニ臨ミテ起居ヲ詢ハレ、且本大臣ノ負傷ニ付深ク痛惜セラレ本大臣甚ダ之ヲ感銘セリ。尙又貴國大皇帝陛下ヨリ慰問ヲ忝フシ大皇后陛下ヨリ厚キ慈慮ヲ蒙リ御製ノ繃帶ヲ恩賜セラレ又勅意ヲ以テ侍醫ヲ派シテ診察セシメラレ、本大臣感戴ノ至リニ勝ヘズ侍醫ノ技術精良ナルト貴大臣ノ僚誼周到ナルトニ因リ本大臣ヲシテ早ク快癒ニ赴キ體氣舊ニ復スルコトヲ得セシメ、其上ニテ更ニ貴國大皇帝大皇后兩陛下ニ向テ慰問扶助ノ盛意ヲ陳謝スベシ。貴簡中言フ所ノ已ニ提示スルコトヲ肯諾セラレシ媾和條件ニ關シ少ク遲延ヲ來スベシトノコトハ如何ニモ至當ト思惟スレバ本大臣ハ靜カニ其ノ提出ノ機ヲ俟ツベシ。此事タルヤ清國ニ向テ關係スル所甚ダ大ナレバ本大臣ハ深ク念慮ヲ勞シ居レリ、右謝意ヲ述ブルコト此ノ如シ。敬具

光緒二十一年三月初一日（我三月二十六日）

大清帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士一等肅毅伯直隸總督部堂　李鴻章

（第五十五號）

詔　勅

朕思フニ清國ハ我ト現ニ交戰中ニ在リ、然レドモ已ニ其ノ使臣ヲ簡派シ禮ヲ具フ式ニ依リ以テ和ヲ議セシメ朕亦全權辨理大臣ヲ命ジ之ヲ下ノ關ニ會同商議セシム。朕ハ固ヨリ國際ノ成例ヲ踐ミ國家ノ名譽ヲ以テ適當ノ待遇ト警衛トヲ清國使臣ニ與ヘザルベカラズ乃チ特ニ有司ニ命ジ怠弛スル所ナカラシム而シテ不幸危害ヲ使臣ニ加フルノ兇徒ヲ出ス、朕深ク之ヲ憾ミトス、其ノ犯人ノ如キハ有司固ヨリ法ヲ按ジ處罰シ假借スル所ナカルベシ百僚臣庶夫レ亦更ニ善ク朕カ意ヲ體シ嚴ニ不逮ヲ戒メ以テ國光ヲ損スル勿カラムコトヲ努メヨ。

御名御璽

明治二十八年三月二十五日

内閣總理大臣　伊藤博文副署

（第五十六號）

大日本帝國皇帝陛下ハ本月二十四日ノ變事ヲ聞召サレ深ク宸襟ヲ惱セ給ヒ前ニ允諾セザリシ所ノ無條件休戰ヲ茲ニ期限ヲ定メ或ル區域ノ内ニ於テ承諾スベキコトヲ其ノ全權辨理大臣ニ命セラレタリ、本大臣ノ同僚全權辨理大臣伊藤博文伯爵ニハ現ニ下ノ關ニ在ラザレドモ速ニ休戰條約ヲ訂結スル爲メ本大臣ハ何時ニテモ閣下ノ御都合次第右ニ關スル細目ヲ審査協定スルコトニ從事スベシ。

（第五十七號）

休戰條約案

大日本國皇帝陛下ハ今回不慮ノ變事ノ爲メ媾和談判ノ進行ヲ妨害セシヲ以テ茲ニ一時休戰ヲ承諾スベキコトヲ其ノ全權辨理大臣ニ命ゼラレタリ因テ大日本國皇帝陛下ノ全權辨理大臣……

……及大清國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣……ハ左ノ休戰定約ヲ訂結セリ。

第一條　大日本國政府ハ臺灣、澎湖列島及其ノ附近ニ於テ交戰ニ從事スル所ノ遠征軍ヲ除クノ外他ノ戰地ニ於テ休戰スルコトヲ承諾ス。

第二條　日清兩國政府ハ本定約ノ存スル間ハ攻守ノ孰レヲ問ハズ、各其ノ對陣ノ方面ニ於テ進擊ノ備ヲ加ヘ或ハ援兵ヲ派シ、其ノ他一切戰鬪力ヲ增加セザルベキコトヲ約ス。然レドモ現ニ戰地ニ於テ戰鬪ニ從事スベキ軍隊ヲ增加スルノ目的ニ非ザル以上ハ兩國政府ニ於テ新タニ兵員ヲ配置運送スルコトヲ妨ゲザルモノトス。

第三條　本定約ノ存スル間ハ盛京省ニ屯駐スル大日本國軍隊ハ田莊台、鞍山站、連山關、賽馬集、寬甸縣及長甸縣ニ亘ル折線以外ニ進出セザルベシ。又該省ニ屯駐スル大清國軍隊ハ前記ノ折線ヲ距ルコト日本里數十里ヲ踰ヘテ大日本國軍隊ニ接近スルコトナカルベシ。

第四條　海上ニ於ケル兵員、軍需及其ノ他一切戰時禁制品ノ運送ハ戰時常規ニ依リ捕獲セラルヽコトアルベキモノトス。

第五條　日清兩國政府ハ本完約調印後第……日ヨリ休戰ヲ實行スルモノトス。而シテ兩國政府ハ敏速ノ方法ヲ以テ各其ノ軍隊司令長官ニ休戰ノ命令ヲ發スベシ。

第六條　本定約ハ別ニ亙ニ通知ヲ要セズ、明治二十八年四月十六日卽チ光緒……年……月……日ノ夜半ニ於テ終了スベシ、而シテ若シ右期限內ニ於テ媾和談判不調ナルトキハ本定約ハ同時ニ終了スルモノトス。

右證據トシテ日清兩國全權大臣ハ玆ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年　月　日　卽光緒　年　月　日下ノ關ニ於テ作ル

（第五十八號）（譯文）

第一條　大清日本帝國政府ハ玆ニ清日兩國陸海軍ノ以下ニ定ムル所ニ遵ヒ一律ニ措施スルコトヲ約ス。

第三條　現ニ奉天省內ニ在ル日本國兵ハ休戰期限中ハ田莊台、鞍山站、連山關、賽馬縣、寬甸縣ニ亘ル經界線內ニ屯駐スベシ、兩國軍隊ハ各其ノ現在ノ場所ニ屯駐シ嚴令ヲ發シテ經界線以外ニ出デヽ侵擾スルコトナカラシムベシ。

第五條　兩國政府ハ本定約締結ノ日ヨリ二十一日間ヲ限リ本完約ニ從フテ措施スヘシ、但シ軍隊ノ所在地ニシテ電信ノ通ゼザル場所卽奉天省內ノ遼陽、瀋陽及澎湖、臺灣ノ各地ハ本定約締結ノ日ヨリ五日ヲ經テ休戰期限ヲ起算スベシ。

（第五十九號）

第一條ヲ左ノ如ク修正ス。

日清兩國政府ハ臺灣、澎湖列島及其ノ附近ニ於テ交戰ニ從事スル所ノ軍隊ヲ除クノ外他ノ戰地ニ

於テ休戰スルコトヲ約ス

第二條　本定約ノ効力ニ依テ休戰スヘキ軍隊ハ實際交戰ヲ停止スル時ニ當リテ各其ノ屯駐スル所ノ場處ヲ保持スルノ權利ヲ有スヘシ、但シ本定約ノ期限内ハ如何ナル場合タリトモ前記ノ場處以外ニ進出スルコトナカルベキモノトス。

原案第二條第三條ヲ改ム。

原案第三條ヲ削除ス。

（第六十號）

休戰條約

大日本國皇帝陛下ハ今回不慮ノ變事ノ爲メ媾和談判ノ進行ヲ妨碍セシヲ以テ玆ニ一時休戰ヲ承諾スベキコトヲ其ノ全權辨理大臣ニ命ゼラレタリ。因テ大日本國皇帝陛下ノ全權辨理大臣内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文、全權辨理大臣外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光及大清國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隷總督一等肅毅伯李鴻章ハ左ノ休戰定約ヲ訂結セリ。

第一條　日清兩帝國政府ハ奉天省、直隷省、山東省地方ニ在テ下ニ記スル所ノ條項ニ從ヒ兩國海陸軍ノ休戰ヲ約ス。

第二條　本定約ノ効力ニ依テ休戰スベキ軍隊ハ實際交戰ヲ停止スル時ニ當リテ各其ノ屯駐スル所ノ場處ヲ保持スルノ權利ヲ有スベシ。但シ本定約ノ期限内ハ如何ナル場合タリトモ前記ノ場處以外ニ進出スルコトナカルベキモノトス。

第三條　日清兩帝國政府ハ本定約ノ存スル間ハ攻守ノ孰レヲ問ハズ各其ノ對陣ノ方面ニ於テ進擊ノ備ヲ加ヘ或ハ援兵ヲ派シ、其ノ他一切戰鬪力ヲ增加セザルベキコトヲ約ス。然レドモ現ニ戰地ニ於テ戰鬪ニ從事スベキ軍隊ヲ增加スルノ目的ニ非ザル以上ハ兩帝國政府ニ於テ新タニ兵員ヲ配置運送スルコトヲ妨ゲザルモノトス。

第四條　海上ニ於ケル兵員、軍需及其ノ他一切戰時禁制品ノ運送ハ戰時常規ニ依リ捕獲セラルヽコトアルベキモノトス。

第五條　日清兩帝國政府ハ本定約調印ノ日ヨリ二十一日間ヲ限リ休戰ヲ實行スルモノトス。尤兩國軍隊ノ屯駐スル場處ニシテ電信ノ通ゼザル處ヘハ敏速ノ方法ヲ以テ休戰ノ命令ヲ發スベシ、而シテ兩國軍隊司令官ニテ右命令ヲ受ケタルトキハ互ニ相其ノ趣ヲ通知シ休戰ノ措置ヲ爲スベキモノトス。

第六條　本定約ハ別ニ互ニ通知ヲ要セズ明治二十八年四月二十日卽光緒二十一年三月二十六日ノ正午ニ於テ終了スベシ。而シテ若シ右期限内ニ於テ媾和談判不調ナルトキハ本定約ハ同時ニ終了ス

ルモノトス。

右證據トシテ日清兩帝國全權大臣ハ玆ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年三月三十日　卽光緒二十一年三月五日下ノ關ニ於テ作ル

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從二位勳一等　伯爵　伊藤博文

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從二位勳一等　子爵　陸奥宗光

大清帝國欽差頭等全權大臣（太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯）　李鴻章

（第六十一號）（譯文）

大日本帝國大皇帝陛下ノ全權辨理大臣閣下目下休戰條約已ニ調印濟トナリタレバ本大臣ハ兩國永遠平和ノコトニ付速ニ會議ヲ開キ休戰期限ノ終了セザルニ先チ一ノ成議ヲ見ルコトヲ希望シテ已マザルモ本大臣目下負傷療養ノ爲メ內外ノ名醫ヨリ輕シク外出スルコトヲ戒メラレ當分會議處ヘ出席スルコト能ハズ因テ右事情高察ノ上貴國提議ノ媾和條件ヲ覺書ニ製シテ本大臣ヘ送付セラレ以テ調査ニ便ゼラレタシ若又貴大臣ニ於テ之ニ不同意ナレバ本大臣旅館內ニ會議處ヲ設ケ本大臣ヲシテ負傷ヲ冒シテ外出シ外氣ヲ受クルコトナク貴大臣ト會議スルコトヲ得セシメラレタシ。右孰レニテモ貴答ヲ待チテ之ニ應ジ本日午後又ハ明日何時ニテモ一ニ貴大臣ノ便宜ニ任ズベシ此段申遞ス。敬具

光緒二十一年三月初五日（我三月三十日）

大清帝國欽差頭等全權大臣（太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣直隸總督一等肅毅伯）　李鴻章

（第六十二號）（譯文）

拜啓只今李參議等ノ復命ニ據レバ貴大臣ハ四日以內ニ本大臣ヨリ媾和條約案全體ヲ承允スルカ又ハ或ハ條項ニ付更ニ協議ヲ爲スベキカヲ回答スルコトヲ承諾セラレタリト本大臣ハ目下負傷療養中ナレドモ媾和ノコトタル關係重大ナレバ疾手ヲ力メテ熟慮セザルヲ得ズ、就テハ卽刻特使ヲ以テ條約案ヲ送付セラレ以テ本大臣ノ逐一查閱ヲ加フルニ便ゼラレタシ、而シテ其ノ全體ヲ承允スルカ又ハ或條項ニ付更ニ協議ヲ爲スカニ至テハ本日接收ノ時刻ヨリ四日以內ニ回答スベシ。敬具

光緒二十一年三月初七日（我四月一日）

大清帝國欽差頭等全權大臣（太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯爵）　李鴻章

（第六十三號）

媾和條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ媾和條約ヲ訂結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ……ヲ大清國皇帝陛下

ハ……ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ、因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條欵ヲ協議決定セリ。

第一條　清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス、因テ右獨立主ヲ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ヘ對スル貢献典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スベシ。

第二條　清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニアル保壘、兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。

一、左ノ經界內ニ在ル盛京省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ三叉子ニ至リ三叉子ヨリ北ノ方楡樹底下ニ亘リテ直線ヲ畫シ楡樹底下ヨリ正面ニ向テ直線ヲ畫シテ遼河ニ達シ、右直線ト遼河トノ交會點ヨリ該河流ニ沿フテ下リ北緯四十一度ノ線ニ達シ遼河上北緯四十一度ノ點ヨリ同緯度ニ沿フテ東經百二十二度ノ線ニ達シ北緯四十一度東經百二十二度ノ點ヨリ同經度ニ從ツテ遼東灣北岸ニ至ル。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島卽東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

第三條　前條ニ揭載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實地ニ就テ確定スル所アルベキモノトス、而シテ若本約ニ揭記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラザルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任ズベシ。

該境界劃定委員ハ成ルベク速ニ其ノ任務ニ從事シ、其ノ任命後一個年以內ニ之ヲ終了スベシ、但シ該境界劃定委員ニ於テ更正スル所アルニ當リテ其ノ更定シタル所ニ對シ、日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ揭記スル所ノ經界線ヲ維持スベシ。

第四條　清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀三億兩ヲ日本國ヘ支拂フヘキコトヲ約ス、右金額ハ五回ニ分チ、第一回ニハ一億兩殘リ四回ハ各五千萬兩ヲ支拂フベシ。而シテ第一回ノ拂込ハ本約批准交換後六ケ月以內ニ於テスヘク、殘リ四回ノ拂込ハ各其ノ前回ノ拂込ムベキ期日ト同時若クハ其ノ前ニ於テスベシ、又第一回拂込ノ期日ヨリ以後未ダ拂込ヲ了ラザル額ニ對シテハ每年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フベキモノトス。

第五條　日本國ヘ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其所有地ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベシ。其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二個年間猶豫スベシ。但シ右年限ノ滿チタルトキハ未ダ該地方ヲ去ラザル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ日本國臣民ト視做スコトアルヘシ。

第六條　日清兩國ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタレハ清國ハ本約批准交換後速ニ全權委員ヲ任命シ、日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スベキコトヲ約ス、而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎トナスベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏、商業航海、陸路交通、貿易、工業、船舶及住民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ、而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六個月ノ後有效ノモノトス。

第一、清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民ノ商業住居、工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開クヘシ。但シ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハルヽト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スベキモノトス。

一、北京
二、湖北省荆州府沙市
三、湖南省長沙府湘潭縣
四、四川省重慶府
五、廣西省梧州府
六、江蘇省蘇州府
七、浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス。

第二、旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニマデ擴張スベシ。

一、揚子江上流、湖北省宣昌ヨリ四川省重慶ニ至ル。
二、揚子江ヨリ洞庭湖ニ入リ湘江ヲ溯リテ湘潭ニ至ル。
三、西江ノ下流廣東ヨリ梧州ニ至ル。
四、上海ヨリ吳淞及運河ニ入リ蘇州杭州ニ至ル。

日清兩國ニ於テ新章程ヲ安定スル迄ハ前記航路ニ關シ、適用シ得ベキ限リハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スヘシ。

第三、日本國臣民ガ清國ヘ輸入スル總テノ貨品ニシテ其ノ輸入者又ハ貨主ノ都合ニ依リ輸入ノ際又ハ其ノ後ニテ該貨品原價百分ノ二ノ低代稅ヲ納メタル上ハ清國各地ニ於テ政府、官吏、公吏、一私人會社若クハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ、又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、一切ノ稅金賦課金、取立金ハ其ノ性質竝ニ名義ノ如何ニ拘ラズ總テ免除セラルベキモノトス、日本國臣民ガ清國ニ於テ購買シタル清國貨品及生產物ニシテ輸出ノ爲メナルコトヲ言明シタル上ハ總テ低代稅ヲモ納ムルコトナク前記ノ場合ト同樣ニ一切ノ稅金賦課金、取立金ヲ免除セラルベシ。而

シテ斯カル免除ハ右言明ヲ爲セシ時ヨリ實際輸出ノ時迄有効ナルモノトス、又清國ノ内地消費ニ供スベキ清國貨品及生産物ヲ日本國船舶ニテ清國開港間ニ運送スルニハ一タビ現行沿海貿易税ヲ納メタル上ハ前記ノ場合ト同樣右運送中輸出入税ハ勿論其ノ他一切ノ税金ヲ免除セラルベシ。但シ此ノ規定ハ輸入阿片ノ課税ニ關シ、其ノ時現ニ行ハル、所ノ取極ニ何等ノ影響ヲ及ボスコトナシ。

第四、日本國臣民ガ清國内地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ、又ハ其輸入シタル商品ヲ清國内地ニ運送スルニハ、右購買品又ハ運送品ヲ庫入スル爲メ何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク、又清國官吏ノ干渉ヲ受クルコトナク、一時倉庫ヲ借入ル、ノ權利ヲ有スベシ。

第五、日本國臣民ガ清國ニ於テ納ムル諸税及手數料ハ庫平銀ヲ以テスベシ、而シテ右諸税及手數料ハ日本國本位銀貨ヲ以テ其ノ代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

第六、日本國臣民ハ清國ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又所定ノ輸入税ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ベシ。

清國ニ於ケル日本國民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内國運送税、内地税、賦課金、取立金ニ關シ、又清國内地ニ於ケル倉入上ノ便宜ニ關シ日本國臣民ガ清國ヘ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ、且同一ノ特典、免除ヲ享有スベキモノトス。

第七、清國ハ速ニ專門家ノ說ヲ採用シ退潮ノ時タリトモ少クモ二十呎丈ノ差支ナキ通路ヲ絶ヘズ維持スル樣黃浦河口ニ在ル吳淞淺瀨ヲ取除クコトニ着手スルコトヲ約ス。

此等ノ讓與ニ關シ、更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スベキモノトス。

第七條　現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後三個月内ニ於テスベシ、但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フベキモノトス。

第八條　清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ日本國軍隊ガ左記ノ各地ヲ一時占領スルコトヲ承諾ス。

盛京省奉天府

山東省威海衞

日本國ハ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ第一第二ノ二回拂込ヲ了リタルトキニ於テ其ノ軍隊ヲ奉天府ヨリ撤回スベク、又該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタルトキニ於テ其ノ軍隊ヲ威海衞ヨリ撤回スベシ。然レドモ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非ザレバ軍隊ノ撤回ヲ行ハザルモノト承知スベシ。

第九條　本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ在ル所ノ俘虜ヲ還付スベシ、而シテ清國ハ日本國ヨ

リ斯ク還付セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若クハ處刑セザルベキコトヲ約ス。

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若クハ犯罪者ト認メラレタル者ハ清國ニ於テ直チニ解散スベキコトヲ約シ、清國ハ又交戰中日本軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サズ、又之ヲ爲サシメザルコトヲ約ス。

第十條　本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スベシ。

第十一條　本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルベク、而シテ右批准ハ明治二十八年　月　日卽光緒　年　月　日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル。

（第六十四號）

光緒二十一年三月七日卽明治二十八年四月一日午後二時二十分大日本帝國全權辨理大臣ヨリ特使ヲ以テ送付セラレタル媾和條約案日本文、漢文、英文各一部ヲ接受セリ。之ヲ證トス。

初七日（我四月一日）　大清帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣直隸總督一等肅毅伯　李鴻章

（第六十五號）（譯文）

大日本帝國大皇帝陛下ノ全權辨理大臣ヨリ提出ノ媾和條約案ニ對シ大清帝國大皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣ノ覺書

貴大臣ヨリ條約案ヲ提示シ、之ニ對スル回答ヲ四日以內ニ限ラレタルヲ以テ、疾ヲ力メテ詳細ニ査閱シ、其ノ關繫至重ナル條項ハ殊ニ力ヲ竭シテ考究セリト雖モ、到底負傷ノ後精神猶ホ未ダ回復セザル所アレバ、實ニ我朝廷付托ノ重キニ對スル能ハザラムコトヲ恐レタリ。若シ此ノ覺書中ノ答詞ニシテ周備ナラザル處アレバ、實ニ傷疾未ダ癒ヘズ、力ノ心ニ從ハザル爲メナレバ、一ニ貴大臣ノ諒恕セラルヽコトヲ乞フ。數日ノ後ニ至レバ必ズ一々詳答スルコトヲ得ベシ、今玆ニ條約案ノ要領ヲ擧ゲテ四大綱トナシ、逐條答辨ノ煩ヲ避クベシ。此ノ所謂四大綱トハ第一、朝鮮ノ獨立。第二、割地。第三、軍費。第四、通商上ノ權利。卽チ是ナリ。

『此ノ覺書ニ對シテハ始メ伊藤侯ハ彼ノ來節ヲ逐テ一々辯駁ヲ加ヘントノ意見ナリシガ、陸奥伯ヨリ余ニ諮詢セラレシヲ以テ、余ハ其ノ不可ナルコトヲ說キ、今若シ之ニ對シテ長文ノ辯論ヲ爲ストキハ、彼ヨリ復タ覆說ヲ提出スベク、此ノ如ク論ジ去リ論ジ來ル時ハ恰モ支那人ノ長技ナル優游延宕ノ術中ニ陷リ、猶ホ渦中ニ捲キ込マレテ急ニ出ズルコト能ハザルガ如クナルベシト論述シタリシニ、陸奥伯モ余ノ言ヲ是トシ、伊藤侯ニ反覆辯論シテ竟ニ其ノ意ヲ翻サシメ、次ニ載スル第六十六號ノ如キ覺書ヲ送ルコト、ナレリ』

第一、朝鮮ノ獨立

清國ハ已ニ數月以前ニ於テ朝鮮ノ完全無缺獨立自主局外國タルヲ認メムト欲スル旨ヲ言明セリ。

因テ今回媾和條約中ニ之ヲ載入スルコトニ論ナシト雖モ、日本國ニテモ同樣之ヲ認ムルコトヲ要ス。故ニ日本國提出ノ條文ハ修改スベキモノナリ。

第二、割　　地

日本國提出ノ媾和條約案ノ諸言ヲ見ルニ、媾和條約ヲ締結シテ以テ兩國及其ノ臣民ヲシテ將來紛議ノ端ヲ除カシムトアリ。就キテハ第二條モ此主意ニ依ルベキモノタリ。然ルニ今回割讓ヲ要求セラル、土地ノ如キハ、若シ强ヒテ清國ヲシテ之ヲ肯諾セシメラル、ニ於テハ、啻ニ爭端ヲ除クコト能ハザルノミナラズ、後來必ラズ續々紛議ヲ生ジ、兩國人民子々孫々彼此相仇敵視シ遂ニ底止スル所ナキニ至ルベシ。我輩既ニ兩國全權大臣タレバ、兩國臣民ノ爲メニ深ク謀リ遠ク慮リテ永遠和好ヲ維持シ、互ニ相援助スベキ條約ヲ締結シテ以テ東洋大局ヲ保持セズムバアルベカラズ。清日兩國ハ比隣ノ邦ニシテ、歷史文學工藝商業一トシテ相同ジカラザルコトナキニ、何ゾ必ズシモ此ノ如ク仇讐トナルコトヲ爲サム。抑々國家所有ノ地ハ皆ナ歷代相傳ルコト數千年或ハ數百年ニシテ、價ヲ以テ論ズベカラザル基業ナレバ、一朝之ヲ割棄スルコトアルトキハ其ノ臣民タル者恨ヲ飲ミ寃ヲ含ミテ日ニ報復セムト圖ルハ必然ノ勢ナリ。況ンヤ奉天省ハ我朝肇基ノ地ナレバ其ノ南部各地ニシテ日本國ノ有トナリ、海陸軍ノ根據地トナルトキハ、何時ニテモ直チニ我京師ヲ衝クコトヲ得ベシ。故ニ清國臣民ニシテ此ノ條約文ヲ見ルトキハ、必ズヤ日本ハ我祖宗ノ地ヲ取リ、海陸軍ヲ置キ隙ニ乘ズルノ計畫ヲ爲スモノニシテ、是レ我ト永遠ノ仇敵タラムト欲スルモノナリトイフベシ。且兩國境界ニハ防禦ノ爲メ必ラズ多ク砲臺ヲ築造シ、多數ノ海陸兵員ヲ置クコト、ナルベク、其ノ費用莫大ナラム。加之兩國無賴ノ此等相接ノ地ヲ以テ其ノ逃處トナシ、端ヲ籍リ事ヲ生ジ爲サヾル所ナカルベク、隨テ無數ノ交涉事件ヲ釀スニ至ルベシ。日本國ハ清國ト開戰ノ初メ其ノ公使ヲシテ各國ニ宣言セシメテ曰ク、我レ清國ト于戈ヲ交ヘ爭フ所ノモノハ朝鮮ノ獨立ニ在ルノミ、敢テ清國ノ土地ヲ貪ラムトスルニ非ラズト、日本國ニシテ若シ果シテ初志ニ違ハズムバ、清國ノ爲メニ右條約案第二條及以下ニ指陳スル所ノ各條ニ酌改ヲ加ヘラレ、一ノ永遠和好ヲ維持シ、彼此互ニ援助スルノ條約トナシ、屹然東方亞細亞ノ爲メニ一長城ヲ築キ、歐洲各國ノ狎侮ヲ受ケザルコト、セム。日本國ニテ若シ計此ニ出デズ、徒ラニ一時ノ兵力ヲ恃ミ意ニ任セテ要求セラル、ニ於テハ、清國臣民ハ勢必ズ膽ヲ嘗メ薪ニ臥シ力メテ復讐ヲ謀ルベク、東方兩國同室ニ戈ヲ操リ互ニ相援助セザレバ適々外人ノ攘奪ヲ來タスコトアルノミ。

第三、軍　　費

此回戰爭ハ清國決シテ先キニ手ヲ下セシモノニ非ズ、又開戰ノ後ニ至テモ清國決シテ日本國ノ土地ヲ侵取セシコトナシ。故ニ理論上ヨリイヘバ清國ヲシテ軍費ヲ賠償セシムベキモノニ非ザルガ如シ。然レドモ昨年十月中我政府ハ戰爭息マザルニヨリ、米國公使ヨリ調停ノ勞ヲ執ラムトセラレシ

ヲ以テ軍費ヲ賠償スルコトヲ承諾セリ。

是レ全ク和ヲ復シ民ヲ安ムゼムト欲シタルガ爲メナリ、又本年正月二十三日日本國ヨリ北京駐紮米國公使ヘ電信ニテ之ヲ聲明セラレタリ。就テハ若シ其ノ金額ニシテ過當ナラザレバ、本大臣ハ固ヨリ之ヲ承諾シテ媾和條約中ニ具載スベキモ、日本國ノ宣言スル所ニテハ此回ノ戰爭ハ其ノ意全ク朝鮮ヲシテ獨立國タラシメムトスルニ在リト、然ルトキハ清國ハ昨年十月二十五日ヲ以テ既ニ朝鮮ノ獨立自主ヲ認ムベキ旨ヲ宣言シタレバ、假令强ヒテ清國ヲシテ軍費ヲ賠償セシムルトスルモ、右清國ニテ朝鮮ノ獨立自主ヲ認ムベシト宣言セシ日迄トナスベシ。此ノ日ヲ過ギタル後ハ多額ヲ要求スベキモノニ非ザルベシ。加之軍費賠償金ノ額ヲ定ムルニモ果シテ清國ノ力能ク之ニ勝ヘルヤ否ヤヲ酌量スベシ。若シ清國ノ財力眞ニ乏ヲ告ゲ居ルトキハ、一時强ヒテ締結調印セシムルトスルモ、將來數ノ如ク之ヲ償却スルコト能ハザルベシ。然ルトキハ日本國ハ必ズ清國ニ責ムルニ違約ノ罪ヲ以テシ、必ズ再ビ兵端ヲ啓クガ如キコト之アラム。今回日本國ヨリ要求スル軍費賠償金額ハ、到底清國現今ノ財力ニテ償却シ得ベキ所ニ非ラズ。今若シ假リニ內國租稅ヲ增加セムカ、國民必ズ相率ヒテ亂ヲ爲スニ至ルベシ。國民ハ我ガ政府ガ志ヲ屈シテ和ヲ乞フヲ見テ以テ深ク耻辱ト爲シ居ルガ如クナレバ、若シ更ニ苛酷ノ賦斂ヲ行フトキハ貧民焉ゾ能ク其堵ニ安ゼムヤ。若シ夫レ海關稅ヲ增加セムカ、條約改正ノ期未ダ至ラザルヲ以テ、各國焉ゾ能ク之ヲ肯諾セムヤ。又假リニ條約ヲ改正スルコトヲ得ベシトスルモ、各國一體ニ之ヲ肯諾シタル上ニテ始メテ實施スルコトヲ得ベケレバ、其間歲月ヲ要シ到底今日ノ急ニ應ズルコト能ハザルベシ。又外國債ヲ起スニ於テハ、必ラズ海關稅ヲ以テ之ガ抵當ト爲サヾルベカラズ。然ルニ洋曆本年三月一日上海稅務司ノ報告ニ據レバ、外債ヲ募テ軍事費ニ充タルヲ以テ、洋曆千八百九十五年ニハ關平銀三百九十三萬七千四百二十兩ヲ、九十六年ニハ六百二十八萬千六百二十兩ヲ、九十七年ニハ五百十四萬二千二百三十八兩ヲ、九十八年ニハ三百六十四萬四千五百十六兩ヲ、九十九年ニハ三百五十二萬七千五百四十六兩ヲ、外債償却ノ爲メ海關稅中ヨリ七千八百零一萬七千百零三兩ヲ支出スベキ筈ナリト、以上ハ洋曆本年三月一日ニ調タル所ノ海關稅ヲ以テ償却スベキ外債ノ高ニシテ、本年三月以後清國ニテ借入レタル外債ハ此高ノ內ニ在ラズ。

從前ハ清國ニテ外債ヲ募ルコト甚ダ容易ニシテ利息モ低廉ナリシガ、清日交戰以後ハ外商之ヲ奇貨トシ、清國ノ信用大ニ減ジ、每歲七朱或ハ八朱半ノ利子ヲ拂ハザルヲ得ズ。六朱ノ利子ノ分アリト雖モ、其ノ高僅少ニシテ且額面價格ト募集價格ト大差アリ。有力ニシテ經驗アル銀行家ノ說ニ據レバ、清日兩國媾和ノ後若シ清國ニテ外債ヲ募ラムトスルトキハ、額面ノ金額ヲ得ルニハ、年六朱半乃至七朱ノ利子ニ非ザレバ能ハザルベシト、洋曆千八百九十年ヨリ九十三年マデニ、各海關ニテ徵收セシ輸入稅抵代稅及阿片釐金稅ヲ合算スレバ每年平均關平銀二千二百五十四萬八千百五十兩ト

ナルベシ。其ノ内六割ハ各省總督巡撫ニ分送シテ公費ニ供セザルヲ得ズ。然ルヲ今若シ此ノ額ヲ以テ軍費賠償ニ流用スルトキハ、別ニ各省ノ公費ノ爲メ財源ヲ求メザルヲ得ズ。而シテ租稅ヲ增加スルコトハ國民ノ好マザル所ナリ、若シ又外債ヲ起シテ日本國ニ賠償セントスルカ、年利六朱半トシテ元利ヲ合セ二十年ヲ限リ償却スルトキハ、關平銀六億九千萬兩ヲ要スベシ。此ノ如キ巨額ハ清國ノ能ク賠償シ得ベキ所ニ非ラズ。加之媾和ノ後ハ清國ニテ善後ノ處分ヲ爲ス爲メ種々費用ヲ要スベシ。例ヘバ徵募兵ノ如キ、之ヲ解散スルトキハ總テ無職業トナリ、掠奪騷擾ヲ事トスベケレバ政府ハ之ガ取締ヲ爲サヾルヲ得ズ、又內國人民ハ政府ガ志ヲ屈シテ和ヲ乞ヒシヲ不當トシ、憤懣亂ヲ企テルコトアルベケレバ、清國政府ハ其ノ行爲上一層困難ヲ感ズルニ至ルベク、啻ニ新規增稅ヲ徵收シ難キノミナラズ、却テ從來ノ稅源ヲモ失ハムトスルノ虞ナキニアラズ。故ニ歐洲ノ方式ニ倣ヒ陸軍ヲ訓練シ船舶ヲ製造シ機械ヲ精選シ、重ネテ海軍ヲ整頓シテ以テ初メテ能ク國家ノ利權ヲ保持スルコトヲ得ベシ。然ルニ練兵造船ノ二事タルヤ、莫大ノ金額ヲ有スルニ非ザレバ着手スルニ由ナシ。今一方ニ軍費ヲ賠償スルコトヲ要シ、又一方ニ陸海軍ヲ訓練スルコトヲ要スルガ如キハ到底清國財力ノ堪ユル所ニ非ラズ。況ンヤ其ノ內地興利便民ノ事業ヲ計畫スルコトニ於テヲヤ。故ニ日本國ニ向テ其ノ要求額ニ大削減ヲ加フルコトヲ請ハザルヲ得ズ。抑々日本國ニテ要求スル所ノ賠償金ハ名ケテ軍費トイフ以上ハ、卽チ此回ノ戰爭ニ關スル經費ヲ指シタルモノナルベク、其ノ今日迄ニ支出セシ精細ナル高ニ至テハ未ダ公然ナル計算ヲ見ザレバ外人ノ得テ詳悉スルコト能ハザル所ナレドモ、之ヲ日本國ガ今回要求スル高ニ比スルトキハ蓋シ其ノ小半ダニモ及バザルベシ。日本國新聞ノ記事等ニ徵シテモ其ノ軍事ニ費ス所ノ概數ヲ窺得ベキニ似タリ。但シ若シ誤アレバ幸ニ訂正セラレタシ、按ズルニ開戰以前ニハ日本國大藏省ニ現金三千萬兩ヲ貯存セリ。其ノ內如何程軍費ニ支出セラレシカハ外人ノ確知スルコト能ハザル所ナリトスルモ、今姑ク全額ヲ擧テ軍費ニ支出セラレシトスルモ、開戰後又內國債一億五千萬圓ヲ募集シテ軍費ニ充ラレタリ、洋曆本年二月二十日日本國內閣總理大臣伊藤伯爵廣島ニテ和議不調ノ後東京ヘ歸リ衆議院ニ出席シテ演說セラレテ曰ク

「現在ノ情勢ヲ以テ案スルニ、未ダ何レノ時ニ於テ和議ノ成ルヲ知ルベカラズ。前キニ募集スル所ノ軍費ハ今後戰事繼續スレバ必ラズ缺乏ヲ告グルニ至ラム、故ニ增加軍費案ヲ提出シテ議會ノ協贊ヲ請ハザルベカラズ」ト、此ノ演說ニ據レバ第一回內國債一億五千萬圓ハ當時尙ホ未ダ使用シ盡サズ、此後戰爭繼續スルニ非ラザレバ急ニ缺乏ヲ告グルコトナカルベシ。且日本國諸新聞紙ノ言フ所ニテハ、新規ニ募集セシ軍事費ハ目下使途ナク、洋曆本年六七月ノ際ニ至テ始メテ之ヲ要スベシ。伊藤總理大臣ハ議會ノ閉會ニ先ダチ此案ヲ提出シテ協贊ヲ求メシモ決シテ目下急用アルニ非ラズ云々、又洋曆本年二月二十三日刊行東京英文新聞ニ第一回內國債一億五千萬圓ノ內五千萬圓ハ未ダ募集セラレズ、八千萬圓ハ已ニ募集セラレタレドモ、未ダ全ク拂込ヲ了ラズ云々トアリ、此外尙ホ人

民ノ獻金アリ、若シ大藏省剩餘金及內國債等ヲ合算スルトキハ、日本國ニテ淸國ト交戰セシ爲メ費ス所ハ今日迄ニ一億五千萬圓ヨリ多カラザルモノヽ如シ。加之日本國ハ今回已ニ勝利ヲ得テ居レバ、其ノ收容セシ所ノ淸國軍艦軍器軍需品ヲ折算スレバ、其價莫大ナルベク、此等ハ軍費賠償金ノ內ヨリ控除シテ當然ナリ。又償金年賦ニ就キ利子ヲ要求セラルヽハ一層過重不公ニシテ、之ニ同意スルコト能ハズ、原來ノ償金已ニ巨額ナルニ、尙ホ其ノ上利子ヲ加算スルトキハ淸國財力ノ到底堪得ベキ所ニ非ラズ、猶ホ貴大臣ノ詳細ニ考察ヲ加ヘラレムコトヲ希望ス。

第四、通商上ノ權利

該條ハ專ラ通商上ノ權利ヲ要求セラルヽモノニシテ、事情極メテ複雜重要ニ涉リ、到底一時ニ遍ク考究シ得ベキモノニ非ラズ。故ニ以下ニ述ブル所ノ諸點ハ目下本大臣ノ觀察シ及ブ所ニ依テ陳述シタル迄ニシテ、追テ猶ホ酌改ヲ加フルコトヲ要スレバ、貴大臣ノ此覺書ヲ見テ以テ、淸國ガ已ニ承諾スルノ意アル處ト、亦修正ヲ加フルニ非ズムバ承諾スルコト能ハザル處トヲ覺知アラムコトヲ望ム。從前ノ條約ハ開戰ト共ニ廢止ニ歸シタレバ、媾和談判整ヒタル上、一ノ新條約ヲ締結スベキハ勿論ノコトニシテ、淸國ニテモ同ジク淸國ト歐洲各國トノ現行條約ヲ以テ新條約ノ基礎トナスコトヲ願ヘリ。但シ該條ノ首項中ニ兩締盟國ノ一方ハ互ニ他ノ一方ニ於テ最惠國待遇ヲ受クベシトノ語ヲ挿入スルコトヲ要ス。第一項第二項ニ付テハ須臾ラク回答ヲ猶豫セラレタシ。第三項ノ抵代稅ヲ減ジテ百分ノ二トナシ、並ニ一切ノ稅金賦課金、取立金ヲ免除スベシトノ要求ニ至テハ、元來抵代稅ハ百分ノ二五ナレバ、今五ノ數ヲ除去スルトキハ百兩ニ付五錢ヲ除去スルコトヽナルベシ。然ルニ日本國ニテハ今回淸國ニ向テ巨額ノ軍費賠償金ヲ要求セラレ、到底淸國目下ノ財力ノ堪ユル所ニ非ザレバ、淸國ノ財源ハ啻ニ之ヲ壅塞セシメザルノミナラズ、爲メニ之ヲ開發スル方法ヲコソ計畫セラレテ然ルベシ。何トナレバ減稅ヲ議セムヨリハ寧ロ加稅ヲ議スルニ如カザレバナリ。且目下恰モ日本國ニテハ歐米各國ト條約ヲ改正シ稅率ヲ增加セラレムトスルニ、反テ淸國ヲシテ本來甚ダ抵廉ナル稅ヲ此上尙ホ減ゼシメムトセラルヽハ甚ダ理ニ適セザルコト、謂フベシ。又外國品ノ一旦輸入シタル上ハ、之ヲ淸國人ニ賣渡シタル後ニ至テモ之ニ對スル一切ノ內地諸稅ヲ免除スルコトヽナシタシトハ、多年在北京各國公使ガ要求スル所ニシテ、而モ其ノ目的ヲ達シ得ザル所ナリ。何トナレバ其ノ要求タルヤ、決シテ至當ト謂フベカラザレバナリ。凡ソ各國中最モ通商上ノ權利ヲ保有セムトスルモノハ英國ニ如クハナク、又最モ利ヲ謀ルコトヲ善クスルモノハ英國商民ニ如クハナシ。而シテ英國商民等ニ於テ屢々其ノ公使ニ勸請シテ以テ釐金稅ヲ免除スルコトヲ求メタルモ、今ニ其ノ効ヲ得ザルハ不條理ナルノ故ヲ以テナリ。英國公使「ヨルヂン」ガ兵ヲ率ヒテ北京ニ入ルヤ、都城ニ盤踞シ戰ヘバ勝チ攻ムレバ取ルトイフ勢ニテ、其ノ氣燄甚ダ盛ナレバ、要盟ノ下何事ニテモ求メテ得ザルコトナカルベシ。然レドモ氏ハ外國品ニ對スル釐金稅ノ免除ヲ要求スルコトヲ承諾セ

ズシテ曰ク、外國品ノ一旦清國人ノ手ニ渡リタル上ハ、英國ニ於テハ之ニ對スル釐金稅ヲ免除セシメムトスルコト能ハズ、本使ハ其ノ論據ヲ了解シ難ケレバ、其ノ請ニ應ジテ之ヲ提求スルコトヲ欲セズト、此語ハ天津條約改正ニ關スル千八百七十一年英國青冊第四百四十三葉ニ見ユ、英國商務院ハ英國ト各國間ノ通商事項ヲ監督スル處ナルヲ以テ、英國外務省ヨリ同院ヲシテ此事ヲ調査セシメシニ、同院ニテモ外國品ノ一亙清國人ノ手ニ渡リタル後、尙ホ其ノ釐金稅ヲ免除セシメムトスルハ英國政府ニテ、要求スベキ筋ニ非ラズ、且通商條約中別ニ之ニ關スル規定ナシ、清國內地產物ニシテ釐金徵收所ヲ經過スル每ニ釐金ヲ徵收セラルヽ上ハ、外國品ニ限リ免稅セラルベキ謂レナシ。又假令條約ニ明文アリトスルモ、遵行スベキニ非ラズ。況ンヤ其ノ明文ナキニ於テオヤトノ意見ナリ。是ハ前記青冊第三百四十七葉ニ見ユ。又「トーマス、ウエード」ハ北京ニ在テ英國公使タルコト日久シク、甚ダ堪能ニシテ深ク清國貿易上ノ事項ニ熟達スル人ナリシガ、常ニ曰ク、清國ノ釐金稅ナルモノハ英國ノ所得稅ト相似タルモノニシテ、決シテ外人ノ容喙スベキコトニ非ラズ、一國ノ政府ナルモノハ其ノ歲出ニシテ歲入ニ超過スルコトアルトキハ、便宜徵稅スルノ權アルハ無論ニシテ、決シテ傍人ノ非議スベキコトニ非ラズ。今若シ清國各省ノ總督巡撫ヲシテ釐金稅ヲ廢止セシムルトキハ、經費ノ出處ナキニ至ルベク、又若シ清國商民ニシテ外國人ノ證明狀ヲ所持スルニ非ズムバ、清國內地ニ於テ自由ニ貨品ヲ運送スルコトヲ得ザルベシトイフニ於テハ一層不正當ノコトタリ。云々ト、是ハ前記青冊第四百四十四葉及第四百四十七葉ニ見ユ。右數氏ノ說ハ極メテ公平ニシテ、理ニ適フモノナレバ、貴大臣ニ於テモ之ヲ見ラレナバ必ラズ全然同意ヲ表セラレム。就テハ該條ニ修正ヲ加ヘテ以テ外國品ガ外國商人ノ手ニ在ル間釐金稅ヲ免除スルコトヽセラレタシ。左スレバ最惠國ニ與フル待遇ヲ及ボスモノ故、日本國ニテモ滿足セラルベシ。第四項ニ記載ノ件ニ至テハ其ノ至當ナルト否トヲ問ハズ、事務取扱ノ注意上ヨリ言フモ未ダ其ノ得策ナルコトヲ見出ス能ハズ何トナレバ外國商民ハ清國地方官ノ管轄外ニ在レバ、內地ニ深入シテ一時住居スルトキハ、開港場ヲ距ルコト遠キガ故ニ、其ノ國領事ノ保護行屆キ難カルベク、隨テ清國地方官ハ一層困難ヲ感ズルコトアルベシ。曾テ英國商民ヨリモ此事ヲ出願シタルコトアリタレドモ、「トーマス、ウエード」氏ハ之ニ對シ、此ノ請求タルヤ貪求飽クコトヲ知ラザルモノナレバ、本使ハ斷然同意スルコト能ハズ、外國商民ニシテ清國地方官ノ管轄ニ服從セザル以上ハ、斯ル請求ヲ爲スベキ筋ニ非ラズ、若シ外國商民ノ清國內地ニ聚集スルコト多數ニ上ルトキハ、土地ヲ購買シテ居留地ト爲スベキニ至ルハ自然ノ勢ナレバ、必ズ又紛議ヲ增スノ種トナルベシト告述セリ云々ト前記青冊第四百三十五葉及第四百四十九葉ニ見エ、第六項ニ載スル所ノ利益ハ器械類ヲ輸入スルコトヽ、原料ヲ用ヰテ之ガ製造ニ從事スルコトニ在リ、此事タルヤ在北京各國公使ヨリ久ク提議スル所ナルモ、未ダ承諾セゼル所ナリ。外國商民ガ清國內ニ於テ原料ヲ用ヰテ之ガ製造ニ從事スルコトハ久シク禁止スル所ニシテ、

各國ニテモ是レ全ク清國自主ノ權内ニ屬スルコトタルヲ以テ、敢テ異議ヲ唱フル者ナシ、若シ清國ニテ外國商民ニ許スニ其ノ内地ニ於テ原料ヲ用ヰテ之ガ製造ニ從事スルコトヲ以テスルトキハ、勢必ラズ盡ク清國小民ノ生業ヲ奪フニ至ルノミナラズ、清國商人ノ設立ニ係ル各製造場ニ對シテ極メテ妨礙ヲ與フベケレバ、政府ハ充分之ヲ保護セザルヲ得ズ。此事タルヤ清國年來ノ例禁ニシテ、且其ノ關係各國ニ波及スレバ、一時戰爭ノ結果ニ因リ遂ニ之ヲ變更スルコト能ハズ、又日本國臣民ガ清國ニテ製造シタル所ノ物品ヲ清國内地ニ運搬スルニ當テ、内地諸稅ヲ免除スベシトノ點ニ至テハ從來ノ例規ニ背馳スレバ、請求ニ應ズルコト能ハズ、今若シ清國ニ於テ斯ル利益ヲ日本國ニ許與スルコトアラムニハ、各國孰レモ最惠國條欵ニ依テ其ノ利益ニ均霑スルコトヲ求ムベク、然ルトキハ清國商人ノ各製造場ハ忽チ爲メニ壓倒セラルヽニ至ルベシ。第八條ノ末文ニ但シ通商航海條約批准交換ニ至ル迄ハ日本國ハ軍隊ヲ撤回セザルベシ云々トアレドモ、是レハ當ニ至當ナラザルノミナラズ、過慮ニ屬スルモノト謂ハザルヲ得ズ。第六條中ニ新ニ締結スベキ條約ノ實施ニ至ル迄ハ、清國ハ日本國政府官吏臣民商業工業航海船舶等ニ對シ、總テ最惠國待遇ヲ與フベシトノ語アリ、既ニ此ノ條アリテ擔保セラルヽ上ハ、必ズシモ茲ニ軍隊ヲ撤回セザルベシトノ語ヲ記入スルコトヲ要セザルナリ。

以上ノ諸點ハ本大臣ガ貴大臣ヨリ送致セラレタル媾和條約案ニ對シ、詳細査閲ノ上意見ヲ陳述シタルモノニ係ル、限ラル、所ノ期日短ク、加フルニ傷疾未ダ恢復セズト雖モ、今已ニ疾ヲ力メテ此回答ヲナシ、敢テ直言シテ隱サヾレバ、此外更ニ復タ詳細ヲ要スルコトナキモノヽ如シ。尤モ其ノ關係比較的ニ輕小ナル各條ニ就キ未ダ逐一回答セザル所以ハ、前述四大綱ニシテ雙方ノ意見若シ能ク一ニ歸スルトキハ、其ノ小節細目ニ至テハ時ヲ按ジテ商議スルコトヲ得ベシト信ズレバナリ。本大臣ハ尙ホ茲ニ一言忠告シタキコトアリ、貴大臣ノ諒恕シテ之ヲ聽カレンコトヲ乞フ。思フニ本大臣ハ官ニ在ルコト殆ンド五十年ニシテ、今自ラ已ニ顧ミルトキハ死ニ至ル迄ニ最早多年ナク、君國ノ爲メニ盡ス所モ恐クハ今回ノ媾和事件ニテ最終トナラム。是ヲ之テ深ク條約ノ妥當善良ニシテ毫モ指摘スベキ所ナキコトヲ期シ、兩國政府ヲシテ將來永久ニ交誼ヲ鞏固ニシ、彼此民臣ヲシテ向後互ニ相親睦ナラシメ、以テ本大臣無窮ノ願望ニ副ヘムトス。今ヤ和議將ニ成ラムトシ、兩國臣民今後數世ノ幸福命運ハ總テ兩國全權大臣ノ掌中ニ在リ、就テハ宜シク天理ニ遵循シ、近來各國政治家ガ深謀遠慮スル所ノ心意ヲ師法トシ、以テ兩國人民ノ利益福澤ヲ保タシメテコソ能ク各自ノ職分ヲ盡シタルモノト謂フベシ。日本國ハ方今勢力已ニ强大ニシテ、人才多ク、愈々隆盛ニ赴キテ已マザルモノナレバ、今賠償金額ノ多寡ノ如キ又兵力ノ及ブ所ノ地ヲ得テ擴メムトスル版圖ノ廣狹ノ如キハ、總テ差シタル關係モナカルベキコトナレドモ、清日兩國政府臣民ガ將來永遠ニ輯睦ナルカ、又ハ永遠ニ仇視スルカノ點ニ至テハ日本國ノ國計民生ニ甚ダ大ナルベケレバ、深思熟慮ヲ加ヘラレザ

ルベカラズ。本大臣ハ清國頭等全權大臣ノ任ニ當レバ、固ヨリ清國ノ爲メニ計リ、日本國全權辨理大臣ト一ノ周詳完全ニシテ和睦ヲ永遠ニ保ツベキ條約ヲ締結シテ以テ將來兩國ヲシテ嫌隙ノ生ズベキコトナク隨テ釁端ノ起ルベキコトナカラシメムトス。若シ斯ル媾和條約ニシテ締結スルコトヲ得ルトキハ、啻ニ後世ノ誹譏ヲ招カザルノミナラズ亦與リテ光榮アラム。而シテ東洋二大國人民ノ向後ニ親睦シ彼此相安ジ福澤綿長ナルコト實ニ此ノ一擧ニ基クベシ。尙ホ貴大臣ノ熟慮シテ以テ籌畫セラレムコトヲ希望ス。

（第六十六號）

大日本帝國全權辨理大臣ハ明治二十八年四月一日ノ會合ニ於テ、媾和條約案ヲ提出スルニ當リテハ右條約案ニ對シ大清帝國欽差頭全權大臣ヨリ毎條ニ付諾否ヲ答覆セラレ、條ヲ逐テ決定スルノ方法ヲ執ルコトヲ主張シタリシニ、大清帝國欽差頭等全權大臣ハ條約案全體ヲ同時ニ提出スルコトヲ望マルヽ旨ヲ反覆陳述セラレタリ。因テ大日本帝國全權辨理大臣ハ竟ニ其ノ求メニ應ジ、四日限リ條約案全體ヲ承諾セラルヽカ、又ハ或條項ニ付更ニ商酌ヲ爲サレ度旨ヲ決答セラルヽコトニ約定シテ以テ媾和條約案ヲ提出セリ。然ルニ今大清帝國欽差頭等全權大臣ヨリ送付セラレシ所ノ答覆ヲ按ズルニ、何ゾ料ラム終始大清帝國國內ノ事情ヲ縷陳シ、大日本帝國全權辨理大臣ノ更ニ酌察ヲ加フルコトヲ求メラルヽニ過ギズシテ、之ヲ以テ帝國政府ノ提案ニ對スル答覆トシテ見ルコト能ハザルノミナラズ亦如何ニ商酌ヲ加ヘタシトノコトヲ確然言明セラレズ、然リ而シテ大清帝國々內ノ事情如何ニ至リテハ今茲ニ媾和ヲ議スルニ當リテ論及スベキノ限ニ在ラズ。又戰爭ノ結果トシテ要求スル所ノモノハ通常ノ場合ニ於テ或事件ヲ談判スルト同日ノ論ニ非ザルコトヲ知ラザルベカラズ。是ヲ以テ大日本帝國全權辨理大臣ハ其ノ提出セシ所ノ媾和條約案ニ向テ、更ニ大清國欽差頭等全權大臣ノ全體若クハ毎條ニ付諾否如何ヲ明答セラレ、而シテ若シ酌改ヲ望マルヽ所アレバ一々之ヲ條項ノ體式ニ具シテ以テ直チニ提議アラムコトヲ望ム。

明治二十八年四月六日下ノ關ニ於テ

（是レ余ガ陸奧外務大臣ノ諮詢ニ答ヘシ意見ニシテ同相ヨリ其ノ意見トシテ伊藤首相ニ差出セシ書面ナリ）

本日李ガ送致シタル書面ハ到底一種ノ陳情書ニシテ、毫モ我提案ノ回答トシテ見ルベキ價値ナシ。而シテ支那人ト斯ル閑文字ヲ往復スルトキハ往々議論岐題ニ走リ、遂ニ其ノ要領ヲ得タルコトナシ。仍テ明日ハ彼ノ書中云々スル所ニ答辨ヲ爲サズシテ、我提案ヲ基礎トシ可否ノ決答若クハ條約文體ヲ具備セル修正案ヲ求メ、單刀直入シテ區々枝葉ノ爭論ヲ杜絕スルヲ可トス敢テ高明ノ裁決ヲ煩ス。

一、我提案ニ對シ逐條可否ノ決答ヲ爲スカ若クハ某々ノ條款ニ對シ修正案ヲ呈スルカノ決答ヲ

得ベシ。

一、李ハ卽チ今交戰國ノ兩使臣ガ平和條約ノ商議中ナルヲ知ラサルモノ、如ク動モスレバ兄弟ノ國柄トカ輔車相依ルトカ云フ語氣ヲ以テ本論ヲ糊塗セントスルノ模樣アリ、宜ク此種ノ議論ヲ論破シ本論以外閑言語ヲ容スベカラズ。

斯クノ如クスト雖モ彼ハ北京ノ訓令ヲ得ル迄ハ何等決答ヲ爲ス能ハザルベシ。更ニ二日若クハ三日ノ猶豫ヲ乞フコト必然ナレバ我ハ最短キ期限ヲ與ヘ回答ヲ從シ置ケバ、其後再ビ閑文章往復ノ煩ヲ避ケ漸ク本論可否ノ決答ヲ得ルニ庶幾ラン乎。

（第六十七號）（譯文）

以書翰致啓上候陳者光緒二十一年三月十二日欽命總理各國事務衙門ヨリ電報致接收候處目下李鴻章ハ傷病未ダ痊ヘザルニ付更ニ二品頂戴前出使大臣李經方ヲ全權大臣ニ命ジ李鴻章ニ隨同シテ日本國ヨリ派出ノ全權大臣ト媾和條約ヲ商議セシムベキ旨本日勅諭アリタリトノコトニ有之候間右樣御承知相成度此段及照會候。

光緒二十一年三月十二日

大清欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督部堂一等肅毅伯　李鴻章

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從一位勳一等

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從一位勳一等子爵　伯爵　伊藤博文閣下

（第六十八號）

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ目下貴大臣ニハ傷病未ダ痊ヘザルニ付更ニ二品頂戴前出使大臣李經方閣下ヲ全權大臣ニ命ジ貴大臣ト共ニ本大臣ト媾和條約ヲ商議セシムベキ旨本日貴國皇帝陛下ヨリ勅諭アリタルコト貴國政府ヨリ電報ニテ申越候趣御通知相成致承知候右回答得貴意候。敬具

明治二十八年四月七日

大日本帝國全權辨理大臣　伯爵　伊藤博文

大日本帝國全權辨理大臣　子爵　陸奥宗光

大清帝國欽差頭等全權大臣一等肅毅伯　李鴻章閣下

（第六十九號）（譯文）

大清國帝國欽差頭等全權ヨリ大日本帝國全權辨理大臣ヘ回答覺書

本月十一日本大臣ヨリ大日本帝國全權辨理大臣ヘ送付セシ覺書ハ貴意ヲシテ滿足セシムルコト能ハザリシ旨來示ニ接シ本大臣ノ深ク遺憾トシ、且失望スル所ナリ。右覺書ハ決シテ淸國國內ノ困難

ナル事情ヲ開陳セシメシニ非ラズ、日本國ヨリ提出セラレタル媾和條約案中最モ緊要ナル條款ニ付考究ヲ加ヘ悉ク本大臣ノ所見ヲ記載セシ次第ナリ、然レドモ今茲ニ大日本帝國全權辨理大臣ノ希望ヲ滿タスコトヲ欲シ、其ノ便利ノ爲メ別ニ一ノ約案ヲ調製シ貴大臣ヨリ提出ノ約案ト每條相對セシム其ノ新ニ挿加セシ所ノ第十一條ハ貴大臣ニ於テ必ラズ肯諾セラル、ナラムト信ズ、右對案ハ目下談判ノ情形ニ應ジテ起草シタルモノニシテ本大臣ガ全權大臣トシテ有スル所ノ權限ヲ十分盡シタルモノナレバ尙ホ若シ其ノ內ニ或ハ貴大臣ノ意見ト悉ク符合セザル點アレバ、兩國全權大臣ニテ面議セバ容易ニ協定ノ道アルベシト思考ス。今ヤ休戰期限モ餘日ナケレバ貴大臣ノ速ニ會議ノ日ヲ指定セラレテ更ニ須臾ラクモ延緩セラレザルコトヲ希望ス。

（條約對案）（譯文）

第一條　清日兩國ハ互ニ朝鮮ノ獨立自主國タルコトヲ公認シ、且互ニ其ノ中立國タルコトヲ擔保シ、朝鮮ノ自主ニ妨碍アル內政ノ干涉又ハ其ノ獨立ニ妨碍アル貢獻典禮ヲ修メシムルガ如キコト將來全ク之ヲ停止スベキコトヲ約ス。

第二條　清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニ在ル城市、官衙、倉庫、兵營及一切ノ官有物ヲ日本國ニ讓與ス。

第一、奉天省南部四個ノ廳州縣ノ地

一、安東縣

二、寬甸縣

三、鳳凰縣

四、岫巖州

以上四個ノ廳州縣區域ハ總テ現在ノ境界ニ據ル。

第二、澎湖列島北ハ北緯二十四度ヨリ南ハ北緯二十三度迄トシ東ハ英國天文臺東經百二十度ヨリ西ハ東經百十九度迄トシ英國海圖ニ依リ前記經緯度線ノ交絡シテ形ツクル所ノ小方形以內タルコトヲ特ニ茲ニ言明シテ以テ齟齬ヲ防グ。

第三條　前記ニ揭載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ清日兩國ヨリ各二名以上ノ共同境界劃定委員ヲ任命シ、實地ニ就テ確定スル所アルベキモノトス、而シテ若本約ニ揭記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラザルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任ズベシ。

該境界劃定委員ハ成ルベク速ニ其ノ任務ニ從事シ、其ノ任命後一個年以內ニ之ヲ終了スベシ。但シ該境界劃定委員ニ於テ更正スル所アルニ當テ其ノ更正シタル所ニ對シ清日兩國政府ニ於テ可認

スル迄ハ本約ニ揭載スル所ノ經界線ヲ維持スベシ。

第四條　清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀一億兩ヲ日本國ヘ支拂フベキコトヲ承諾ス、右金額ハ五回ニ分チ、第一回ニハ二千八百萬兩殘リ四回ハ毎回千八百萬兩ヲ支拂フベシ、而シテ第一回ノ拂込ハ本約批准交換後六個月以內ニ於テシ殘リ四回ノ拂込ハ各其ノ前回ノ拂込ノ期日ヨリ一個年ノ後ニ於テシ、本約批准交換後四箇年半以內ニ皆濟スルカ又ハ右期限前ニ支拂フカハ何レトモ其ノ便宜ニ任ズベシ。

第五條　清國ヨリ日本國ヘ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ移住セムト欲スル者ハ自由ニ其ノ所有財產ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベク、決シテ之ガ爲メニ捐資稅金賦課金等ヲ取立ラルヽコトナカルベシ。

又右ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二個年間ノ猶豫ヲ與フベキコトヲ約ス、而シテ右年限ノ滿タル後尙ホ未ダ移住セザル者ハ日本政府ニ於テ之ヲ日本國臣民ト視做スベシ。又清國臣民ノ右割與セラレタル地方ヨリ退去シテ其ノ地方ニ住居セザルモ依然其ノ財產ヲ右地方內ニ有スル者アルトキハ、日本國政府ハ之ニ對シ日本國臣民ノ財產ニ對スルト同樣ノ取扱及保護ヲ與フベシ。

第六條　從來兩國間ニ存在セシ條約ハ總テ交戰ノ爲メ消滅シタレバ、清日兩國ハ本約批准交換ノ後各全權委員ヲ任命シ通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ協商締結スベキコトヲ約ス、而シテ右新條約ハ清國ト歐洲各國トノ間ニ現存スル諸條約章程ヲ以テ基礎ト爲スベシ。又開港場、航海、稅金、倉入、稅金、賦課法等ハ總テ清國ガ歐洲最惠國ニ對スル待遇ト同一タルベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ前記新條約ノ批准ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府、官吏、商業、航海、國境貿易、工業、船舶、臣民等ニ對シ總テ清國ガ最惠國ニ對スル待遇ヲ與フベク、又日本國ニテモ清國政府、官吏、商業、航海、國境貿易、工業、船舶、臣民等ニ對シ總テ日本國ガ最惠國ニ對スル待遇ヲ與フベシ。

第七條　日本國ハ本約第八條ニ依リ一時占領ノ軍隊ヲ除キ其ノ現ニ清國版圖內ニ駐屯スルモノハ本約批准交換後一個月以內ニ盡ク撤回スベシ。

第八條　清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ日本國軍隊ガ山東省威海衞ヲ一時占領スルコトヲ承諾ス、而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ第一第二兩回ノ拂込ヲ了リタルトキニ於テ日本國ハ其ノ軍隊ノ半數ヲ撤回スベク、又該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタルトキニ於テ直チニ盡ク其ノ軍隊ヲ撤回スベシ。

第九條　本約批准交換ノ上ハ兩國互ニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ盡ク還附スベシ、而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セザルベキコトヲ約ス、日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若クハ犯罪者ト認メラレタル者ハ清國ニ於テ直チニ解放スベキコトヲ約シ、清國ハ

又交戰中日本國軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サズ、又之ヲ爲サシメザルコトヲ約ス。

第十條　本約調印ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スベシ。

第十一條（新タニ挿加スルコトヲ提議ス）清日兩國ハ將來更ニ紛議戰爭ノ起ルコトヲ避ルガ爲メ本約ノ解釋若ハ施行上ニ關シ互ニ其ノ所見ヲ異ニスルカ又ハ第六條ニ規定スル所ノ通商航海條約國境貿易條約ノ談判若ハ解散若クハ施行上ニ關シ兩國政府各其ノ意見ヲ異ニスルカニテ到底外交上ノ談判或ハ公文往復ニ依テ妥結シ難キコトアルトキハ兩國政府ヨリ共ニ一友國ニ請ヒ爲メニ仲裁人ヲ選ビテ之ガ裁斷ニ任ズベシ、若又右友國ノコトニ付兩國政府ノ所見合同セザルトキハ米國大統領ニ依賴シ一名ノ仲裁人ヲ選ビテ之ガ裁斷ニ任ズベシ。而シテ右仲裁人ノ裁決ハ兩國ニ於テ必ズ誠實ニ遵行スベキコトヲ約ス。

第十二條　本約ハ大清國皇帝陛下及大日本國皇帝陛下ノ閲覽ヲ經之ヲ妥善トシ批准セラレタル上ニテ何年何月何日某所ニ於テ交換スベキモノトス。

右證據トシテ兩國全權大臣ハ玆ニ記名調印スルモノナリ。

何年何月何日下ノ關ニ於テ四通ヲ作ル

（第七十號）

一、緒言ニ對シテハ大日本帝國全權辨理大臣ハ如何ナル修正ヲ加フルコトヲモ承諾スルコト能ハズ。

一、第一條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ先キニ大清帝國欽差頭等全權大臣ヘ提出セシ所ノ語句ヲ變改スルコトヲ得ズ。

一、第二條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ大清帝國欽差頭等全權大臣ヨリ提出セラレシ修正案ヲ肯納スルコト能ハズト雖モ原案ヲ左ノ通リ更改スルコトヲ承諾スベシ。

清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニ在ル城壘、兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。

一、左ノ經界內ニ在ル盛京省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城、海城及營口ニ亘ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス。遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島卽チ英國「グリーンウイッチ」東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

一、第四條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ大清帝國欽差頭等全權大臣ノ提議ヲ肯納スルコト能ハズト雖モ、原案ヲ左ノ通リ修正スルコトヲ承諾スベシ。

清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀二億兩ヲ日本國ヘ支拂フベキコトヲ約ス、右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ毎回五千萬兩ヲ支拂フベシ。而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六個月以内ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二個月以内ニ於テスベシ殘リノ金額ハ六個年賦ニ分チ、其ノ第一次ハ本約批准交換後二個年以内ニ、其ノ第二次ハ本約批准交換後三個年以内ニ、其ノ第三次ハ本約批准交換後四個年以内ニ、其ノ第四次ハ本約批准交換後五個年以内ニ、其ノ第五次ハ本約批准交換後六個年以内ニ、其ノ第六次ハ本約批准交換後七個年以内ニ支拂フベシ。又初回拂込ノ期日ヨリ以後未ダ拂込ヲ了ラザル額ニ對シテハ毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フベキモノトス。但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ金額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時ニ支拂フコトヲ得ベシ。

一、第五條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ大清帝國欽差頭等全權大臣ノ提議ヲ肯納スルコト能ハズ。

一、第六條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ大清帝國欽差頭等全權大臣ノ提議ヲ肯納スルコト能ハズト雖モ、原案ヲ左ノ通リ修正スルコトヲ承諾スベシ。

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタレバ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スベキコトヲ約ス、而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎トナスベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府、官吏、商業、航海、陸路交通貿易、工業、船舶及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ、而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六個月ノ後有効ノモノトス。

第一、清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民ノ商業、住居、工業及製造業ノ爲メニ左市港ヲ開クベシ。但シ現ニ清國ノ開市場、開港場ニ行ハル、所ト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スベキモノトス。

一、湖北省荆州府沙市

二、四川省重慶府

三、江蘇省蘇州府

四、浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何ノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス。

第二、旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニマデ擴張スベシ。

一、揚子江上流、湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル。

二、上海ヨリ吳淞江及運河ニ入リ蘇州杭州ニ至ル。

日清兩國ニ於テ新章程ヲ妥定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ベキ限リハ外國船舶清國内

地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スベシ。

第三、日本國臣民ガ清國內地ニ於テ貨品及生產物ヲ購買シ又ハ其輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ稅金取立金ヲモ納ムルコトナク、又清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク、一時倉庫ヲ借入ルヽノ權利ヲ有スベシ。

第四、日本國臣民ガ清國ニ於テ納ムル諸稅及手數料ハ庫平銀ヲ以テスベシ、而シテ右諸稅及手數料ハ日本國本位銀貨ヲ以テ其ノ代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

第五、日本國臣民ハ清國ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ベシ。

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ內國運送稅、內地稅、賦課金、取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民ガ清國ヘ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典免除ヲ享有スベキモノトス。

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スベキモノトス。

一、第七條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ修正案ヲ肯納スルコト能ハズ。

一、第八條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ修正案ヲ肯納スルコト能ハズト雖モ、原案ヲ左ノ通リ修正スルコトヲ承諾スベシ。

清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衞ヲ占領スルコトヲ承諾ス、而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清國海關稅ヲ以テ抵當トナスコトヲ承諾スルニ於テハ日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ撤回スベシ、若又之ニ關シ充分適當ナル取極立タザル場合ニハ該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタルトキニ非ザレバ撤回セザルベシ、尤通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非ザレバ軍隊ノ撤回ヲ行ザルモノト承知スベシ。

右一時占領ニ關スル諸費用ハ清國ニ於テ之ヲ支辨スベシ。

一、第十條ニ付テハ大日本帝國全權辨理大臣ハ原案ヲ變改スルコトヲ得ズ。

一、大清帝國欽差頭等全權大臣ヨリ提議セラレシ第十一條ノ新案ハ大日本帝國全權辨理大臣ニ於テハ之ヲ肯納スルコト能ハズ。

（第七十一號）（譯文）

拜啓陳者昨日本大臣ヨリ閣下ヘ提出セシ修改ヲ加ヘタル媾和條件ニ付テハ其ノ節口頭ニテ陳述セシ所ノ要領ヲ玆ニ更ニ書面ニ具シテ申進置候方可然ト存候抑ミ右改修ヲ加ヘタル條件ハ最終ノモノ

ト御心得相成昨日ヨリ四日間ヲ限リ何分ノ御決答相成度旨ハ已ニ昨日モ申入置候得共尙ホ茲ニ重ネテ申述候。

日本帝國政府ヨリ最初提出セシ所ノ要求ニ對シ閣下ヨリ縷陳セラレシ次第ニ付日本帝國全權辨理大臣ニ於テ十分考慮ヲ加ヘタルコトハ已ニ申述置キタル通リニ有之、又我要求條件ニ讓步シ得ル限リ輕減ヲ加ヘタル所以ハ若飽迄我最初ノ條件ヲ變セザルコトヲ主張スルニ於テハ淸國ハ種々ノ困難ヲ蒙ルニ至ルベシト閣下ヨリ開陳セラレタル爲メニ有之候コトモ已ニ申述置キタル通リニ有之候。

軍費賠償金額ノ三分ノ一ヲ減ジ、其ノ支拂方ヲ輕易ニシ、一時占領ノ場所二個所ヲ一個所ニ減ジ、土地ニ代ユルニ關稅ヲ以テ賠償金ノ擔保ニ充ツルモ差支ナキコトヽシ、抵代稅及內地稅ニ關スル條項ヲ廢除シ、及黃浦河口ニ在ル船舶航行ノ障碍物取除ノ要求ヲ撤銷セシガ如キハ償金ニ關スル日本國ノ要求ヲ滿タスコト甚ダ困難ナリト閣下ガ思考セラルヽ所ノ淸國財政上ノ窘迫ヲ免レシムベシトノコトハ已ニ開陳致置キタル次第ニ有之候。

又土地ニ關スル日本國ノ要求ヲ大ニ輕減セシガ如キモ同ク調和ノ精神ニ出タルコトハ十分閣下ニ於テ御諒察相成タルコトヽ相信居候。終ニ臨ミ本大臣ガ是迄屢〻閣下ノ御會得アラムコトヲ努メタル所ニ付キ重ネテ一言致度ハ戰爭ナルモノハ其ノ戰鬪上ノ措施ニ於テモ又其ノ因テ生ズル所ノ結果ニ於テモ進ムコトアリテ止マルコトナキモノナレバ今日日本ガ幸ニ承諾スルコトヲ得ベキ所ノ媾和條件ハ後日ニ至テモ承諾セラルベキモノナリト御思惟不相成樣致度候本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候。敬具

千八百九十五年四月十一日

大淸帝國欽差頭等全權大臣伯爵　李　鴻　章　閣下　　伊　藤　博　文

（先是陸奥伯疾ニ罹ラレ余ニ重任セラレシ所アルヲ以テ余ハ伊藤侯ニ說キ此書簡ヲ送ルノ利アルコトヲ献策セシニ侯之ヲ納レ余ニ起草ヲ命ゼラル因テ「デニソン」氏ト商議シテ此ノ書簡ヲ作ル。）

（第七十二號）（譯文）

拜啓陳者昨日貴翰ヲ以テ媾和談判ノ進行及之ニ伴フテ生ズル所ノ事項ニ付御來示有之候ニ付テハ我政府ノ爲メ又本大臣ノ職分ノ爲メ右ニ對シ簡單ナル回答ヲ提供スルノ必要有之ト存候。

御承知ノ通リ本大臣ハ媾和條件商議ノ爲メ大日本帝國全權辨理大臣ニ會見スルコトヲ許サルルニ先チ日本全權辨理大臣ヨリ要求ノ條件ニ對シ書面ヲ以テ確答可致旨閣下ヨリノ御請求ヲ受ケ、而シテ初メテ會見ヲ許サル、ヤ口頭ニテノ討議ヲ待タズシテ閣下ガ現ニ催迫セラル、所ノ如キ最終ノ提議ニ接シタル次第ニ之有候得バ日本國最終ノ提議ハ我政府ノ所見ヲ開示スル爲メ十分ノ機會ヲ與ヘ

ラレタル上ニテ御提出相成タルモノトハ可難申候。

最初御要求ノ莫大ノ償金ヲ幾分カ御減却相成タルハ滿足ノ次第ニ有之候得共之ニテモ尙ホ戰爭ノ爲メ支出セラレシ所ノ實費ヨリ超過スルコト甚ダ多クシテ清國ニ取リテハ過重ナル負擔ニ有之、且此ノ如キハ清國ヲシテ其ノ切望スル所ノ內國ノ改良ヲ實行シ難キニ至ラシムルモノニ有之候。

閣下ヨリ「土地ニ關スル日本國ノ要求ヲ大ニ輕減セリ」ト御來示有之候得共媾和ノ條件之ガ爲メニ幾何ヲ輕緩スルコトヲ得タルヤ本大臣ノ了解ニ苦シム所ニ候現ニ最終ノ提議ニテ要求セラルヽ所ノ地域ノ經界ハ其ノ小部分ヲ除クノ外ハ日本國軍隊ガ是迄ニ占領シタル盛京省ノ全部ニ有之、尙ホ其ノ外最終ノ提議ニ於テ未ダ日本兵士ノ足跡ダモナキ豐饒ニシテ人口ニ富ミ我帝國ノ重要ナル處(臺灣)ヲモ割讓致候樣御要求有之此ノ如キノ要求ハ各國媾和ノ慣例ニ背馳スル所ニ有之候。又異議ヲ容ルヽニ足ルベキ通商上ニ關スル要求ノ幾分ヲ御輕減相成タルコトハ本大臣ニ於テモ大日本帝國全權辨理大臣ノ措置ヲ欣悅スル所ニ有之候得共最終ノ提議ニ於テ尙ホ本件ニ關シ要求スル所前例ニ無ク條理ニ合ハズ且大ニ獨立國ノ主權ヲ損害スルモノニ有之候、卽最終ノ提議ハ清國ノ土地ヲ擁シテ通商條約及國境貿易章程ヲ議定スルコトヲ求メ、而シテ兩國意見ヲ異ニスルコトアルニ當リ之ヲ一友國ノ仲裁ニ附スルコトヲ拒絕シ、通商條約ノ商議中清國ニ於ケル日本國人ニ最惠國待遇ヲ與フルコトヲ要求シ、而シテ日本國ニ於ケル清國人ニ對シテハ同樣ノ擔保ヲ與ヘ、又何等ノ規定ヲ設クルコトヲモ拒絕シ、清國開港場ヲ距ルノ內地何レノ處ニテモ清國官吏ノ干涉ヲ受ケズ倉庫ヲ借入レ貨品及生產物ヲ輸入購買スルコトヲ得ル特典ヲ日本人ニ與フルコトヲ要求シ、又日本國人ヲシテ清國各地ニ於テ製造業ニ從事スルノ權利ヲ得セシメ、且其ノ製造ヲ經タル貨品ニ對シ內地一切ノ稅金ヲ賦課セザルコトヽシ、又日本貨幣ノ額面價格ヲ以テ諸稅ヲ納ムルコトヲ得ベキコトヽナサムトセリ。

以上陳述スル所ハ本大臣ヨリ敢テ重ネテ商議ヲ盡サムコトヲ求メタル次第ニ無之媾和條件ヲ商議スル爲メ本大臣ヘ與ヘラレタル唯一回ノ會見ニ於テ最終ノ提議ヲ御提出相成タルニ當リ本大臣ヨリ申述ベタル所ヲ更ニ覆陳致度ガ爲メニシテ玆ニ開陳スル所ノ不同意ノ點ニ付閣下ノ御熟考ヲ求メ度ト存候、而シテ閣下ガ本大臣ニ約セラレタル次回ノ會見ニ於テ之ニ對シ閣下ノ意見ノ在ル所ヲ御開示相成度其ノ節本大臣ハ我皇帝陛下ヨリノ勅許ヲ得テ以テ最終ノ提議ニ對スル確答ヲ爲スコトヲ得ベシト存候、本大臣ハ玆ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候。敬具

千八百九十五年四月十二日

大日本帝國全權辨理大臣　伊藤伯閣下　　李鴻章

（第七十三號）（譯文）

日清媾和記錄

拜啓陳者一昨日本大臣ヨリ差出タル書翰ニ對スル回答トシテ昨日附貴翰御送附相成致領收候、本月十一日本大臣ヨリ書簡ヲ差出タル所以ハ前日已ニ本大臣ヨリ口頭ニテ言明シタル所ヲ更ニ書面ニテ開陳シ以テ閣下ヲシテ充分現在ノ情形ヲ審ニセシムト欲シタル次第ニ有之候、而シテ本大臣ニ於テ閣下ノ御意見ニ對シ充分考慮ヲ加ヘタルコト、又日本帝國政府ヨリ提出セシ修改ヲ加ヘタル要求條件ハ最終ノモノニシテ單ニ御決答ヲ與ヘラルヽノ一途アルノミニ付左樣御了解アリタシト希望致シタル次第ニ有之候。

然ルニ御來翰中閣下ハ一面ニ於テ敢テ重ネテ商議ヲ盡スコトヲ求ムルノ意ナキ旨ヲ陳述セラルヽニモ拘ラズ、一面ニ於テ日本帝國政府ノ最終要求條件及是迄執來リタル談判上ノ手續ニ對シ批評ヲ加ヘラレ、且御不同意ノ點ニ對シ本大臣ノ考慮ヲ加ヘル樣御希望相成居候處ヨリ見ルトキハ或ハ本大臣ノ趣意ヲ誤解セラレシニハ非ザルヤト被存候。

就テハ今貴翰ニ對シテハ只一言本月十日本大臣ヨリ提出シタル要求條件ハ最終ノモノニシテ最早何時迄モ討議ヲ許スベキモノニ無之旨申述候ヨリ外別ニ御答ニ可及必要無之候。

抑々戰爭ノ結果ヨリ生ズル所ノ要求ハ普通ニ稱スル所ノ提議トハ異ナル次第ニ有之、而シテ日本帝國全權辨理大臣ニ於テ帝國政府ノ要求條件ヲ商議ニ附シタルハ既ニ媾和ヲ重スルカ爲メニ最極限ノ讓歩ヲ爲シタルモノナルニ此調和ノ精神ヲ誤解セラルヽニ於テハ日本帝國全權辨理大臣ハ之ヨリ生ズル所ノ結果ニ向テ一切責任ナシト斷言スルノ權利ヲ有シ候。

因テ將來ノ誤解ヲ防グ爲メ茲ニ一言申添置度ハ餘ノ義ニ無之、今本大臣ニ於テ日本國ノ要求條件ヲ再議スルコトヲ拒絕セシハ本大臣ニ於テ敢テ閣下ノ御意見又ハ之ヨリ生ズル所ノ結論ニ對シ容納ノ意ヲ有スル次第ニハ無之候。本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候。敬具

千八百九十五年四月十三日

伊藤博文

大清帝國欽差頭等全權大臣伯爵　李鴻章閣下

（第七十四號）（譯文）

拜啓陳者本日午後四時迄ニ御決答可致旨御約束致置候處差當リ不便ノ義有之候ニ付明日午後四時迄ニハ必ズ決答可致候。敬具

光緒二十一年三月二十日（我四月十四日）

李鴻章

（第七十五號）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝（御名）此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス。

朕親シク明治二十八年四月十七日下ノ關ニ於テ帝國全權辨理大臣大清帝國全權大臣ノ記名調印シ

タル媾和條約及別約ノ各條目ヲ閲覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約及別約ヲ嘉納批准ス。

神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年四月二十日廣島行在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名國璽

外務大臣　子爵　陸奥宗光　副署

（第七十六號）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝（御名）此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス。

朕内閣書記官長正四位勳二等伊東巳代治ノ材能敏達ナルヲ以テ全權辨理大臣ニ簡命シ委スルニ明治二十八年四月十七日下ノ關ニ於テ帝國ト大清帝國トノ間ニ締結シタル媾和條約及別約ノ批准ヲ交換スルノ全權ヲ以テス。

神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年四月二十一日廣島行在所ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名國璽

外務大臣　子爵　陸奥宗光　副署

（第七十七條）

日上書譯文

露國皇帝陛下ノ政府ハ日本國ヨリ清國ニ向テ要求シタル媾和條件ヲ査閲シタルニ遼東半島ヲ日本ニテ所有スルコトハ啻ニ常ニ清國首府ニ危フスルノ恐レアルノミナラズ、是ト同時ニ朝鮮國ノ獨立ヲ有名無實ト爲スモノニシテ、右ハ將來極東永久ノ平和ニ對シ障害ヲ與フルモノト認ム、因テ露國政府ハ日本國皇帝陛下ノ政府ニ向テ重ネテ其ノ誠實ナル友誼ヲ表セムガ爲メ茲ニ日本國政府ニ勸告スルニ遼東半島ヲ確然領有スルコトヲ放棄スヘキコトヲ以テス。

（第七十八號）

日上書譯文

佛蘭西共和國政府ノ意見ニテハ遼東半島ヲ領有スルコトハ清國ノ都城ヲ危フシ朝鮮ノ獨立ヲ有名無實ニ歸セシメ且永ク極東ノ平和ニ對シ障害ヲ與フルモノナリトス。

佛蘭西共和國政府ハ重ネテ茲ニ日本帝國ニ對スル友情ヲ彰表セムト欲スルガ故ニ帝國政府ニ向テ該半島ヲ確然領有スルコトヲ放棄セラレ度ト友誼上ノ勸告ヲ與フルコトハ佛國政府ノ義務ナリト思考ス。

（第七十九號）

獨逸國政府ガ日清媾和ノ條件ヲ見レバ貴國ヨリ請求シタル遼東ノ所有ハ清國ノ都府ヲシテ何時迄モ不安全ノ位地ニ置キ且ツ朝鮮ノ獨立ヲモ水泡ニ屬サセ因テ東洋平和ノ永續ノ妨ゲニナルコトデアルト認メナケレバナリマセヌ、夫故ニ貴國政府ガ遼東ノ永久ナル所有ヲ斷念ナサル樣ニ本國政府ガ御勸告致シマス。

（因ニ云獨逸公使ハ口頭ニテ日本語ヲ用ヒ宣言シタルナリ）

（第八十號）

電　信　譯　文

閣下ハ內密ニ露國外務大臣ニ向テ露國政府ハ其ノ勸告ノ次第ヲ再考スルコト能ハザルヤヲ問ヒ既ニ我　皇帝陛下ガ媾和條約ニ御准濟ノ今日ニ在リテ遼東半島ヲ拋棄スルコトハ我政府ニ於テ至難ノコトナル旨ヲ同大臣ニ告グベシ。

閣下ハ右ノ事ヲ乞フニ當リ日露兩國間ニハ永年親密ノ好誼ヲ存スル旨ヲ述ベ今日ニ於テ善隣ノ關係ヲ誤ルベカラザルコトヲ說クベシ、又日本ニ於テ遼東半島ヲ割取スルトモ毫モ極東ニ於ケル露國ノ利益ヲ危殆ナラシメズ、而シテ朝鮮國獨立ノ事ニ關シテハ日本國政府ハ露國政府ヲシテ十分ニ滿足セシムベキ處置ヲ執ルベキ旨ヲ述ブベシ。

又日本國政府ハ此件ニ關シ未ダ獨佛兩國政府ヘハ何等ノ照會ヲナサザレドモ、露國政府ヨリ好回答ヲ得次第之ヲ爲ス積リナル旨ヲ露國外務大臣ヘ告グベシ。

（第八十一號）

電　信　譯　文（四月二十七日午後八時三十分聖彼得堡發　同二十八日午後三時着）

四月二十五日貴電ニ基キ本使ハ力ヲ盡シテ露國政府ヨリ提出ノ勸告ニ關スル我請求ニ對シ同政府ノ都合能キ回答ヲ得ムコトヲ努メタリ。四月二十六日本使ハ露國外務大臣ト長時間談論ニ及ビタルニ同大臣ハ大ニ感ズル所アルガ如キ色アリ。而シテ再ビ露國皇帝陛下ノ叡慮ヲ伺フベキコトヲ約セリ、然ルニ今日ニ至リ同大臣ハ露國皇帝陛下ニハ露國ノ勸告ヲ翻回スベキ充分ノ理由ナシトノ故ヲ以テ我ガ政府ノ請求ヲ承諾セラレズトノ旨ヲ本使ニ回答シタリ。本使ハ露國ヨリ提出シタル抗議ノ程度ヲ額知シ能ハザレドモ、目下露國政府ハ運送船ヲ遣リ「オデツサ」ニ於テ軍隊派出ノ準備中ナリトノ風聞アリ、故ニ豫メ露國ノ干涉ハ重大ナルベシト覺悟シ居ル方安全ナラム。

（第八十二號）

口　上　書　譯　文

日本帝國政府ハ露國獨國皇帝陛下佛國ノ特命全權公使閣下ガ其ノ本國政府ノ名ヲ以テ帝國政府ヘ差出サレタル覺書ヲ最モ愼重ニ査閱シ了セリ、日本國皇帝陛下ノ政府ハ露國獨國皇帝陛下佛國大統領ノ政府ノ勸告ヲ熟考シ且ツ茲ニ再ビ兩國間ニ存スル親密ノ關係ヲ重視スル證據ヲ表彰セムト欲スルガ故ニ下ノ關條

約ノ批准交換ニ因リ日本國ノ名譽ト威嚴トヲ全フシタル後別ニ追加定約ヲ以テ該條約中ヘ左ノ修正ヲ加フルコトニ同意ス。

第一、帝國政府ハ其ノ奉天半島ニ於ケル永代占領權ハ金州廳ヲ除ク外ハ總テ之ヲ抛棄シタル領土ニ對シ之ニ代フベキ報酬トシテ相當ナル金額ヲ清國ト協議ヲシ之ヲ定ムルコトアルベシ。

第二、然レドモ帝國政府ハ清國ニ於テ日本國ニ對スル其ノ條約上ノ義務ヲ全然履行スル迄ハ擔保トシテ前記ノ土地ヲ占領スルノ權利アルコト、知ルベシ。

（第八十三號）

電　信　譯　文（五月三日發同月　日接）

陸奥外務大臣

本使ハ本月一日我ガ覺書ヲ露國政府ヘ差出シ力ヲ極メテ我ガ提議ヲ貫カムト論辨セリ。

本月三日露國外務大臣ハ露國政府ニ於テ我ガ覺書ニハ滿足スルコト能ハザル旨ヲ言明シ且ツ曰ク、昨日內閣會議ヲ開キタルニ該會議ニ於テ日本國ガ旅順口ヲ所有スルコトハ障害アル故ニ其ノ最初ノ勸告ヲ主張シテ動カザルベシト閣員一致ニテ決議シ、而シテ該決議ハ露國皇帝陛下ノ裁下ヲ經タル旨申聞ケタリ。

本件ニ關シ本使ハ露國外務大臣ニ向ヒ力ノアラム限リ手ヲ盡シタレドモ、遂ニ露國政府ヲシテ別ニ本件處理ノ方案ヲモ提出セシムルコト能ハザリシハ本使ノ最モ遺憾トスル所ナリ。

（第八十四號）

電　信　譯　文

在露　西特命全權公使
在獨　青木特命全權公使　各通
在佛　曾彌特命全權公使

陸奥外務大臣

日本帝國政府ハ露獨佛三國政府ノ友誼上ノ忠告ニ基キ奉天省半島ヲ永久ニ占領スルコトヲ抛棄スルヲ約ス。

（第八十五號）

口　上　書　譯　文

露國皇帝陛下ノ政府ハ日本國ガ遼東半島ノ永久占領權ヲ抛棄セラレタルノ通告ヲ得日本國皇帝陛下ノ政府ガ此ノ措置ニ依リ重ネテ其ノ高見ヲ彰表セレラタルヲ認メ宇內ノ平和ノ爲メ玆ニ其ノ祝辭ヲ述ブ。

（第八十六號）

口上書譯文

獨逸國皇帝陛下ノ政府ハ日本國ガ遼東半島ノ永久占領權ヲ拋棄セラレタルノ通告ヲ得、日本國皇帝陛下ノ政府ガ之ニ依テ重ネテ其ノ卓見ヲ彰表セラレタルヲ認メ宇內ノ平和ノ爲メ玆ニ日本國政府ニ向テ其ノ祝辭ヲ述ブ。

（第八十七號）

口上書譯文

佛蘭西共和國政府ハ日本帝國政府ガ遼東半島ノ永久占領權ヲ拋棄スルコトヲ承諾セラレタル旨公然ノ通知ニ接シ、日本國皇帝陛下ノ政府ガ之ニ依リテ再ビ其ノ卓見及謙讓ノ意ヲ彰表セラレタルコトヲ認メ宇內ノ平和ノ爲メ日本政府ニ向テ玆ニ其懇篤ナル祝辭ヲ述ブ。

（第八十八號）

電信譯文

北京米國公使　東京米國公使

四月二十四日日本國政府ハ左ノコトヲ清國政府ヘ通告スルコトヲ閣下ニ依賴セリ。

日本國皇帝ハ媾和條約日清兩國文ノ分ヲ併セテ全ク之ヲ批准セラレタリ。

日本國政府ハ清國皇帝ニ於テ何時頃該條約ヲ批准セラルベキ筈ナリヤ承知シタシ。

（八十九號）

電信譯文（五月一日午後三時發　五月二日着）

東京米國公使　北京米國公使

五月一日閣下ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ傳達セラレタシ、四月二十四日附貴電翌二十五日接手直チニ右電報及其ノ譯文ヲ總理衙門ニ送リタリ之ニ對シ四月二十八日附ヲ以テ左ノ通リ回答アリタリ。

日本國トノ和親條約ハ何時頃批准セラルベキ筈ナリヤ日本國政府ヘ發電セラレ度ニ付回答ヲ望ム

トノ貴翰ヲ接收セリ、該條約ハ皇帝陛下ノ閲覽ニ供スル爲メ李全權大臣ヨリ吏員ヲ派シテ之ヲ軍機處ヘ差出シタレドモ尙ホ未ダ陛下ヨリ下附セラレズ尤モ右批准ヲ經テ下附セラレタルトキハ直チニ其趣ヲ閣下ニ通知スベシ。於是本使ハ總理衙門ニ向ヒ此ノ書翰ハ本使宛ナレドモ右ハ日本國政府ヘ清國政府ヨリ申來リタリトテ轉達スルコトヲ本使ヘ依賴スベキ筈ナル旨ヲ告ゲ、且ツ清國政府ニ於テ右書翰中ノコトヲ本使ヨリ日本國政府ヘ電報スルコトヲ望ムナレバ其ノ趣ヲ判然申入レラレタシ、何トナレバ本使ハ唯通信ヲ取次グノミニシテ本使ノ名義ニテハ何事モ電報スルコト能ハザレバナリト申入レタリシニ本日總理衙門ヨリ接收シタル書翰中ニハ前顯書面ノ大要ヲ述ベタル末左記ノ通リ書載セリ。

條約ハ猶ホ未ダ皇帝ヨリ下附セラレズ、四月二十八日附當衙門ヨリノ書翰ノ趣ハ閣下ヨリ日本國

ヘ電報アラムコトヲ請フ。

（第九十號）

電　信　譯　文（五月一日午後六時三十分發）

東京米國公使　　北京米國公使

五月一日清國政府ハ左ノコトヲ日本政府ヘ電送スルコトヲ本使ニ依頼セリ。

聞ク所ニ據レバ露獨佛三國ハ清日兩國間ノ新條約ヲ變更スルコトニ付日本國ト商議スル所アリタルト就テハ其ノ事ノ定マルヲ待ツコト肝要ナリ、五月八日ニ批准ヲ交換スルトシテハ日合至ツテ短シ、因テ其ノ期日ヲ十數日延期スルコトヲ提議ス、此事ハ日本國政府ノ勘考ノ爲メ電信ニテ申送ラレタシ、且ツ回答ヲ待ツ。

（第九十一號）

電　信　譯　文（五月三日發）

北京米國公使　　東京米國公使

五月三日閣下ヨリ五月一日ノ暗號電信ニ對シ日本國政府ハ左ノ通リ清國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依頼セリ。

日本國政府ハ媾和條約ノ批准交換ヲ延期スルコトヲ要スル事情アルヲ見ザルノミナラズ、反テ平和回復ノ爲メニ批准ノ交換ヲ毫モ猶豫セザルコト切ニ緊要ナリトス。

若シ露獨佛三國ヨリ申出ノ結果トシテ媾和條約ニ修改ヲ加フル方然ルベキ場合アリトスルモ斯ル場合ニ處スル例規ニ從ヒ批准交換ノ前ニ於テスルヨリモ之ヲ交換セシ後ニテ此等ノ事ヲ處理スル方遙カニ容易ナルベシ。

伊東巳代治閣下ハ批准交換ノ爲メ全權辨理大臣ニ任ゼラレ、今既ニ芝罘ヘ赴ク途上ニ在レバ批准交換ノ爲メ定メラレタル日限前ニハ同地ヘ到着スベシ。

（第九十二號）

電　信　譯　文（五月七日午後五時五十分發同八日着）

東京米國公使　　北京米國公使

五月七日清國政府ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ電送スルコトヲ本使ニ依頼セリ。

過日清國ハ條約批准交換ノ期日ヲ延展スルコトヲ提議シ、日本國政府ノ勘考ノ爲メ之ヲ電報スルコトヲ米國公使ニ請ヒタリシニ日本國ヨリ接收セシ回答ニ曰ク「日本國政府ハ媾和條約ノ批准交換ヲ延期スルコトヲ要スル事情アルヲ見ザレバ批准交換ヲ毫モ猶豫スベカラズト清國ハ全權ヲ附與シタル二名ノ官員ヲ芝罘ニ派遣シ批准交換ノ期ヲ待タシメタリ、然ルニ頃日ニ至リ露獨佛三國ヨリ屢々批准交換ヲ延期スルコトヲ求メタリ、因テ該三國ノ回答ヲ俟テ處辨セムトシタルモ今ニ至ル迄未

ダ何等ノ回答ニ接セズ、然ルニ該三國久シク清國ト友誼アレバ今其ノ之ヲ調處セムト欲スルノ意ニ背クニ便ナラズ、且ツ前次日本國ヨリノ電報ニハ批准交換ヲ延期スルコトヲ要スル事情ナシトアレドモ、今聞ク所ニ據レバ遼東問題ヲ商議スルノ辨法アリトノコトナレバ其情形自ラ前日ニ異ナル所アリ、且ツ批准交換ヲ俟テ然ル後修改ヲ加ヘムヨリハ寧ロ其ノ前ニ滿足ナル商議ヲ爲スニ如カザルガ如シ。就テハ三國ヨリ清國ニ向ヒ其ノ回答アルヲ俟テ批准ヲ交換スベシトノ請求モアレバ清國ノ望ニ應ゼラレタシトノコトヲ直チニ日本國政府ヘ發電セラレムコトヲ再請シ、日本國ニ請フニ清國ニ對シ本問題ヲ妥結スルニ時日ヲ假ス爲メ批准交換ノ期日竝ニ休戰期限ヲ延展セラレムコトヲ以テス。清國ハ日本國ノ熟考ヲ加ヘテ速答セラムコトヲ待ツ、又清國ハ其ノ批准交換委員ニ芝罘ニテ命ヲ待ツベキコトヲ訓令シタレバ日本國ヨリモ同樣ノ訓電ヲ其ノ批准交換委員ニ發セラレムコトヲ乞フ。

（右電信接到ノ後前電ノ漢文ヲ電報シ來レリ卽チ左ノ如シ）

中國政府請貴大臣、轉電日本政府、前因中國擬、展緩互換和約日期、請貴大臣電商日本政府後、接覆信云、查、無實有須行展緩情形、仍應按期互換中國已派換約全權大臣伍廷芳、聯芳二員、赴烟等候、惟連日以來我、法、德、三國、屢囑暫緩互換、候信辨理至今尙無覆信、因念三國與中國素敦睦誼、未便拂其調停之意、且前次日本覆信原因尙無須行展緩情形、今聞所商遼東之事、已有辨法、與前日情形不同、與其俟互換之後、再行更改、似不若於未換以前、妥爲商議、爲此再懇貴大臣卽日轉電日本政府婉達中國因三國諄囑候信再換是以再請日本將換約停戰日期、另行改行以期從容定議、應候日本政府詳籌連覆、中國已飭換約大臣在烟靜候、竝請日本政府電知、換約大臣一體辨理。

孫大臣旒汶
慶親王各折
榮大臣祿

四月十三日

（第九十三號）

電信譯文（五月八日發）

北京米國公使　　東京米國公使

五月八日日本國政府ハ左ノコトヲ清國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依賴セリ。

日本國政府批准交換期限延展ニ關スル清國ノ請求ニ付五月七日附在北京米國公使ヨリノ電報ニ接セリ、右ニ對スル回答トシテ日本國ハ左ノコトヲ清國ニ告知ス。

日本國ハ既ニ露獨佛三國ノ勸告ヲ容レ遼東半島ヲ永久ニ占領セザルコトニ決シタルガ故ニ該三國

ニ於テモ十分滿足ヲ表スルコトヽ信ズ、然レドモ該半島ヲ拋棄スルニ付必要ノ取極ヲナス爲メ兩國政府間ニ新ニ商議ヲ要スベク、而シテ右商議ニハ時日ヲ要スルニ付日本國政府ハ條約ノ修改及之ガ爲メニ必要ナル取極ハ後ニテ整理スルコトヽシ、先ヅ猶豫ナク批准ヲ交換スルコトヲ主張ス、然レドモ批准交換ノ期日將ニ盡キムトシ且ツ更ニ開戰スルコトハ兩國ノ利益ニ害アルヲ以テ日本國政府ハ休戰ノ日限ヲ五日間延期スルコトヲ承諾ス、而シテ其ノ期限ノ滿タザル內可成速ニ批准ヲ交換スベシ。

（第九十四號）

電　信　譯　文　（五月八日午後十二時四十分發）

東京米國公使　　北京米國公使

五月八日清國政府ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ傳達スルコトヲ本使ニ依賴セリ。

清國政府ハ本日三國ノ回答ニ接シタルヲ以テ直チニ清國全權委員伍廷芳聯芳ヘ發電シ、所定ノ期日ニ於テ批准ヲ交換スベキコトヲ訓令セリ。期日延展ヲ請求スルコトニ付昨日發送セシ清國政府ノ電信ニ付テハ考慮ヲ煩ハサズ。清國ハ日本國使節ヲ迎接スル爲メ相當ノ準備ヲ爲セリ。

（第九十五號）（譯文）

以書翰致啓上候陳者是迄清國ニテ各國ト條約ヲ締結スルニ當リ清國皇帝陛下ノ批准ハ御璽ヲ鈐シテ其ノ證據トセラルヽノミニシテ御筆ヲ以テ記入セラレシコト無之是レ永年ノ慣例ニ有之、卽チ此回清日兩國間ニ於テ光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニテ締結セシ所ノ媾和條約及別約モ清國皇帝陛下ノ批准ヲ經御璽ヲ鈐シテ其ノ證據トセラレ御筆ヲ以テ記入セラレシモノ無之候。右爲念申進置候。敬具

光緒二十一年四月十四日（我五月八日）

大清帝國欽差換約全權大臣　二品頂戴　伍廷芳
三品銜　聯芳

大日本帝國欽差全權辨理大臣　伊東閣下

（第九十六號）

下名ハ明治二十八年四月十七日卽光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ締結調印シタル大日本帝國皇帝陛下ト大清帝國皇帝陛下トノ間ニ於ケル媾和條約及別約ノ批准書ヲ交換スル爲メ玆ニ會合シ、右條約及別約ノ批准ヲ篤ト對照シ各相符合スルコトヲ認メ定式ニ依リ本日右交換ヲ執行ス。

右證據トシテ各此ノ交換證書ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年五月初八日卽光緒二十一年四月十日芝罘ニ於テ之ヲ作ル

大日本帝國欽差全權辨理大臣　伊東巳代治

大清帝國欽差換約全權大臣　二品銜　伍廷芳
大清帝國欽差換約全權大臣　三品銜　聯芳

（第九十七號）

詔勅

朕嚮ニ清國皇帝ノ請ニ依リ全權辨理大臣ヲ命ジ其ノ簡派スル所ノ使臣ト會商シ兩國媾和ノ條約ヲ締結セシメタリ。

然ルニ露西亞、獨逸兩帝國及法朗西共和國ノ政府ハ日本帝國ガ遼東半島ノ讓地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ東洋ノ平和ニ利アラズト爲シ交々朕ガ政府ニ慫慂スルニ其ノ地域ノ保有ヲ永久ニスル勿ラムコトヲ以テシタリ。

顧フニ朕ガ恒ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ竟ニ清國ト兵ヲ交フルニ至リシモノ洵ニ東洋ノ平和ヲシテ永遠ニ鞏固ナラシメムトスルノ目的ニ外ナラズ、而シテ三國政府ノ友誼ヲ以テ切偲フル所其ノ意亦茲ニ存ス、朕平和ノ爲メニ計ル素ヨリ之ヲ客ル、ニ吝ナラザルノミナラズ更ニ事端ヲ滋シ時局ヲ難ジ治平ノ囘復ヲ遲滯セシメ、以テ民生ノ疾苦ヲ釀シ國運ノ伸張ヲ沮ムハ直ニ朕ガ意ニ非ズ、且ツ清國ハ媾和條約訂結ニ依リ既ニ渝盟ヲ悔ユルノ誠ヲ致シ我交戰ノ理由及目的ヲシテ天下ニ炳焉タラシム今ニ於テ大局ニ顧ミ寛洪以テ事ヲ處スルモ帝國ノ光榮ト威嚴トニ於テ毀損スル所アルヲ見ズ朕乃チ友邦ノ忠言ヲ容レ朕ガ政府ニ命ジテ三國政府ニ照覆スルニ其ノ意ヲ以テセシメタリ、若シ夫レ半島讓地ノ還附ニ關スル一切ノ措置ハ朕特ニ政府ヲシテ清國政府ト商定スル所アラシメムトス、今ヤ媾和條約既ニ批准交換ヲ了シ兩國ノ和親舊ニ復シ局外ノ列國亦斯ニ交誼ノ厚ヲ加フ百僚臣庶其レ能ク朕ガ意ヲ體シ深ク時勢ノ大局ニ視微ヲ愼ミ漸ヲ戒メ邦家ノ大計ヲ誤ルコト勿キヲ期セヨ。

御名御璽

明治二十八年五月十日

内閣總理大臣　伯爵　伊藤博文
陸軍大臣　伯爵　山縣有朋
大藏大臣　伯爵　松方正義
海軍大臣　伯爵　西鄕從道
農商務大臣　子爵　榎本武揚
外務大臣　子爵　陸奥宗光
遞信大臣　渡邊國武
司法大臣　芳川顯正

文部大臣　侯爵　西園寺公望
内務大臣　子爵　野村靖

「日本」ト「東洋ノ未來」

左ニ譯スル一篇ハ去ル九月八日發刊ノノルドドイツチエ、ツアルゲマネ、アイツング紙ニ掲グル所ニシテ、法科大學教授ドクトル・レンホルム氏ノ近著「日本」ト曩ニ彼ノ有名ナルフオン、ブラント氏ガ著ハシタル「東洋ノ未來」ト題セル書トヲ對比論評セルモノナリ。

下ノ關條約訂結後、余輩ガ日本ノ内政ニ付キテ確聞スル所極メテ少シ。獨乙國及英國ノ新聞紙上時々長文ノ通信ヲ掲ゲテ讀者ノ覽ニ供スルコトアレドモ、此ハ偶然旅行者ノ目ニ觸レタル片々ノ記事ニシテ、間々皮想ノ見タルヲ免カレズ。明ニ事情ニ通ジタル人ノ熟慮ニ出デタル批評ハ二拾行ニシテ能ク疎雜ナル數卷ノ著書ニ述ベ能ハザル所ヲ盡スベシ。此頃東京ニ於テ出版セラレタル一ノ獨乙語小冊子ハ實ニ此種ノ貴重書ナリ。該書ハ「日本」ト題シ東京ノ帝國大學ニ於テ法律學ノ教授タルドクトル、エル、レンホルム氏ノ著ニ成リ、フオン、ブラント氏ノ「東洋ノ未來」ヲ論駁セルモノナリ。

レンホルム教授ハ先ノ北京派遣公使、フオン、ブラント氏ガ東洋ノ事情ニ精通セルコトヲ承知スレ共、又氏ノ日本ニ關シタル所ハ清國ニ對シ述ルモノ、如ク適實ナラズト云ヘリ。

ブラント氏ハ歐洲ノ開化ヲ受ケ入レテ大革新ヲナシタル後ノ日本國土及國民ヲ親シク觀察シタルコトアラザレバ、其ノレンホルム氏ノ云フガ如クナルハ誠ニ自然ナルコトナリ。

二氏ノ如ク學識ニ富ミ、且ツ親シク彼地ニアリテ深ク事情ニ通ズル人ノ意見ヲ異ニスルニ當リ、個々ノ點ニ付テ是非ノ評ヲ下サンコトハ余輩ノ敢テセザル所ナレ共、レンホルム教授ガブラント氏ノ所論ヲ駁スルニ於テ、議論精確爭フ可カラズ。或ハ近今ノ歷史上ノ事實ニ徵シ、否定スベカラザル點勘カラザルヲ以テ、余輩ハ教授ノ說ニ左擔スルニ躊躇セズ。

レンホルム教授ハ又ブラント氏ガ東洋人ハ外國人及ビ外國ヨリ來ル諸般ノ事物ニ對シ、人種的嫌惡ヲ有セリト云ヘルヲ以テ、漫リニ一班ヲ以テ全貌ヲ推セル者トナシ、ブラント氏ノ東洋人ノ稱ヲ亂用シタルヲ難ゼリ。日本人及ビ支那人ガ思想感情及動作ニ於テ相違セルコトノ甚ダシキハ、恰モ獨逸人ガスラブ人ニ相異レルガ如シ。日本人種ハ數百年來嘗テ他種ト相混ズルコトナカリシ一ノ純粹ナル人種ナリ。故ニ國人ハ非常ニ强固ナル國家的觀念ヲ有スル一大結合トナレリ。日本人ニ取リ國家及ビ太古以來一系ノ皇室ハ其生命ノ理想ナリ。又國民ノ化身ナリ。此レ殆ンド宗教的ナル國家ノ理想的觀念ガ時ニ國人ヲシテ驕慢自尊ノ弊害ニ陷ラシムルハ免ルベカラズ。然レ共此過張ノ感情ハ又德義ノ反面ニ他ナラズ。人種的自尊ト人種的嫌惡ハ時ニ非常ニ相似タルガ如ク見ユルコトアルモ、決シテ同一物ニハアラザルナリ。

教授ハ又ブラント氏ガ日本政府ノ軍隊ヲ驅テ戰ニ赴カシメタルハ其力ヲ弱メ、皇帝自ラ恐ルルニ至レル其驕慢心ヲ挫カンガタメナリト云ヘルヲ駁シ、其說ノ維持スベカラザルヲ明示セリ。教授曰ク、日本ノ事情ヲ知レルモノハ何人モ此國ノ軍隊ガ全ク政治ニ關係セザルヲ知ルベシ。軍隊ハ天子ノ順從ナル臣隷ニシテ、彼等ハ北京王城ノ塔上ニ日出國ノ國旗ノ翻ヘランコトヲ熱望セルモ、一度 皇帝ノ命令ノ下ルニ及ビテハ、一言ノ不平ヲ漏スモノナク。軍旗ヲ東ニ旋シ其ノ心血ヲ流シタル淸國ノ土ヲ後ニスルニ躊躇セザリキ。

最後ニ教授ハブラント氏ガ其書中ニ述ベ當時獨乙讀者中ニ奇異ノ感ヲ起スモノアラシメタル一ノ記事ヲ擧ゲテ之ヲ論駁セリ。ブラント氏ハ日本人ガ其師タル歐羅巴人ニ對シ、愛敬感謝ノ念ナキヲ咎メタルガ、氏ハ實ニ各國ノ國際關係ガ他愛的動義原則ニヨリテ支配セラルヽト思ヘルニヤ、最モ有力ナル國民ハ自信ノ念最モ明白ニシテ、又最モ强固ナルモノナリ。ブラント氏曰ク、日本ハ歐洲人ニ一ノ利益ヲ與フルコトヲナサズ、日本ハ歐洲ノ智識ヲ取リ用ヒタリ。然レドモ歐洲ノ資本ノ投入ヲ拒絕シタリ。レンホルム教授ハ此言ヲ引キ、歐洲ノ資本ノ投入ヲ拒ミタル國民ハ誠ニ忌ムベキモノナラントテブラント氏ヲ嘲弄セリ。英人若シ獨乙人ハ英國ヨリ蒸汽機關ヲ得タルニ、之ヲ運用スルハ英ノ資本ニヨラズ、獨ノ資本ヲ以テセリトテ獨乙人ヲ難ズルモノアラバ、ブラント氏ハ何ヲ以テ之ニ對ヘントスルヤ。

日本ハ實ニ該國ガ自ラ進ミテ歐洲ノ負債者トナルベシト信ズル人ヲ失望セシメタリ。彼ハ外國ノ資本ヲ以テ最モ恐ルベキ敵ナリトシ、之ヲ遠ザケンガ爲メ諸般ノ豫防的注意ヲ怠ラザリキ。然レ共多數ノ獨乙人ハ之ガタメニ日本人ヲ罵ランヨリハ、寧ロ其ノ先見ノ明アルヲ羨望スベシ。目下外國ノ資本ニ依賴シテ事ヲナサントシ、後悔スルモノ多キハ余輩ノ等シク認ムル所ニアラズヤ。

伊藤首相ニ寄スル書

費府　ジョナサン、ゴーブル

謹啓、余曾テ千八百七十一年ヨリ同二年ニ跨リ、故岩倉公大使トシテ歐米各國ニ特派セラレタル時、偶然横濱ヨリ桑港ニ至ルノ間、大使一行ト其船ヲ同クスルノ榮ヲ荷ヒ、親ク謁ヲ閣下ニ得タルノ舊アルニ緣リ、卑賤自ラ揺ラズ、茲ニ一書ヲ裁シ恭ク之ヲ閣下ノ左右ニ致ス。當時ニ於ケル閣下ノ高義有情ハ今尙ホ胸臆ニ記シ、終世忘ル能ハザル所ナリ。寛洪宏識閣下ノ如キニ在リテ、大使ハ聖書ニ基ケル基督教、及聖書ニ基ケル開明ガ夫ノ墨西哥西班牙ニ於テ行ハル、有名無實ナル基督教竝ニ偶像教ニ幾籌ノ勝レルアルヲ洞察シ、當時貴國内ニ於テ基督教ニ對スル物議ノ囂々タリシニモ拘ラズ、暫ク之ヲ默許スルノ方針ヲ取ラレタリ。是レ一ニ閣下ノ力ニ由ラズンバアラズ。夫レ此ノ如ク聖書ニ對スル寛宏ノ處措ハ貴國ヲシテ列國社團ノ土ニ於テ、優ニ其地歩ヲ高クスルニ偉效アリシヲ疑ハザルナク。而シテ客歲日清兩國間交戰ノ事アリシ以降、我國ニ在ル基督教宣教師ハ、兩國ノ交戰ノ不幸ナリト雖モ、之ガ爲ニ貴國ニ聖書ノ播布セラレタル如ク、汎ク亞細亞全洲ニ聖書ノ注

入セラルベキ一大時機トシテ、寧ロ望ヲ前途ニ擊ギ祝福ヲ皇天ニ祈ル者多カリキ。彼等ハ教會ノ說教ニ於テ又ハ新聞紙雜誌上ニ於テ、全力ヲ傾倒シテ日本ノ全勝ヲ豫言シ、若シ他ノ惡意ノ干涉ノ爲ニ阻遮セラレズンバ、日本ノ全勝ハ亞細亞洲ニ在ル幾億萬生靈ニ自由ト光輝トヲ與ヘ、古來ノ無學壓制腐敗ヨリ拯ハレ、耀々タル聖書ノ光ハ能ク亞細亞洲ニ現存スル迷信異端闇黑ヲ照シ、此レ等不幸ノ境遇ニ彷徨スル所ノ人類ヲ救濟シ、苦痛ニ代フルニ喜樂ヲ以テスルモノナルヲ說カザルハナシ。貴國ハ夙ニ聖書的開明ヲ進ムルノ國是ヲ定メ、今之ニ從ツテ正々堂々ノ師ヲ出サル。其連戰連勝更ニ旭日ノ菊花ノ燦然タルベキハ洵ニ以テ故アルナリ。加フルニ叡聖文武ナル大日本　皇帝陛下ガ神聖ナル赤十字社ノ事業ヲ嘉ミシ、特惠ノ下ニ創設セシメ玉ヘルアリテ、現ニ赤十字旗ハ軍中ニ翩翻タリ。蓋シ赤十字旗ハ其敵軍ト自軍トニ論ナク、傷ヲ負フテ戰フ克ハザルモノヲ助ケ、之レニ施スニ仁術ヲ以テスルノ徽章ニシテ、所謂聖書的開明ノ本旨ヲ得タルモノナリ。余ハ遠ク貴國ノ盛運ヲ望ミ、特ニ閣下ニ請ハントスルモノハ、閣下ガ一タビ擧グレバ四百州ヲ震撼セシムルノ手ヲ以テ更ニ聖書的開明ノ指導ニ用ヰラレンコト是ナリ。余ハ閣下ニ熱望スルニ此事ヲ以テスルト同時ニ、最モ慶喜スベキノ報道ニ接セリ。曰ク、日本ノ將校兵卒ハ背囊中聖書一卷宛ヲ藏メテ征淸ノ途ニ上ルト、當時余ノ歡喜果シテ如何ゾヤ。閣下幸ニ想察シ玉ヘ。憶フニ此事タル、獨リ余ノ無上ノ歡喜ノミナラズ、誠意貴國ニ好情ヲ表スル者ノ與ニ歡喜スル所ナリ。貴國ノ此ノ如キ措置ハ眞ニ聖書ノ教ヘル所ニ協フモノニシテ、闇黑ヲ彷徨スル淸國人民ハ貴國ノ高義ニ因リ、神ノ惠福ニ浴スベキヲ知ル。余ハ貴國將來ノ隆盛ヲ祈望シ、此ニ拙作ヲ列ネテ閣下ノ一喋ニ供シ、聊カ貴國人衆ト其喜ヲ分タント欲ス。

一、朝日さやけきしきしまの　大和のほまれ音高し
　　暗夜の船路今は早や　越えてうれしき日の本の
　　光は代々にかゞやかん　光はやゝに輝きつ
二、朝日と昇る日の本の　神の聖意を今ぞしる
　　暗きに迷ふ民草も　時は來にけりよろこびの
　　時は來にけりよろこびの　山のいたゞきいとたかく
三、荒野に今は花咲きて　譽れつきせぬいさほしを
　　うたふ鳥の音日の本の　たたふる聲ぞ響きける
　　たたふる聲ぞ響きける　大海原の島人も
四、陸にむらがる諸民も　いくさの器なげ捨てゝ
　　眞に神の御惠みに　やすきを祝ふ時ぞ來ぬ
　　安きを祝ふ時ぞ來ぬ　國民今ぞめでたけれ
五、眞の神のえらひにし　かたく結びて永遠に
　　聖書の法にこゝろ禰を　くちぬ譽れをたてよかし
　　くちぬ譽れをたてよかし

（舊約聖書士師記第八章耶和華ノ創ノ基田ノ劒ノ句參照）

伊藤首相ニ寄スル書

我教會ノ一ナル「バプチスト、ヱキザミナー」本年二月廿八日刊行ノ紙上、下ノ記事アリ。曰ク日本ハ英國ノ容喙ニ對シテ日清兩國ノ商議ハ兩國自ラ其事ニ從ヒ、亦敢テ他ノ助力ヲ借ラズト言ヘリ。是レ直接英國ノ猛獅ニ向テ一矢酬ヒタルモノナルヲ以テ、勢ヒ英國ノ感情ヲ傷クベキモ、曲ハ英國ニアリテ日本ニアラズ。然ルニ英國ノ各新聞ハ當初ヨリ極メテ少數ノモノヲ除ク外ハ、概シテ日本ニ對シテ友情ヲ表セザルガ如シ。余輩ハ日本ガ殊ニ連戰連勝ノ時ニ於テ、所謂開明國ノ自ラ認メテ弱小國トスルモノニ對シテ爲ス所ニ介意セズ、優然看過センコトヲ望ムト。余ハ一タビ日清兩國間ノ平和回復セラレタル後ハ、日清韓國間ニ神聖ナル三國同盟成リ、夫ノ饑獅貪熊（卽チ英露二國）ヲシテ三國ノ領土ニ於テ毫モ呑噬ノ慾ヲ逞ウセシメザルヲ望ム。近者我國ニ歸來セル宣教師ハ教會ノ說教ニ於テ、每ニ貴國ニ友情ヲ表シ、貴國政府ガ開明シテ有力ナルヲ稱贊セザルモノナシ。多年貴國大阪ニ在リシ宣教師デフヲレスト氏ハ紐育州ブルックリン教會ニ於ケル演說中、今ヤ日本ヲ異教國ト呼ブヲ止ムベキ時ナリト絕叫シ、且ツ敷衍シテ曰ク、日本人ハ一種特別ナル人民ナリ。其ノ基督教國ニ向テ干戈ヲ動カザルハ條約上ノ信義ヲ重ジ、厚ク基督教國ヲ保護スルニ由レリ。今小ナル日本ガ大ナル清國ト戰フテ奇捷ヲ得ルノ主因ノ源タルニ、日本ハ阿片ヲ嚴禁スルニ反シ、清國ハ之ヲ嗜好スルコト甚シク、國民ノ腐敗外人宣教師ヲ厭忌シ、自國基督教徒ヲ殺戮スル如キ、皆此ニ由來ス。又既ニ日本ニ在ル宣教師ヨリ我國ニ在ル友人ニ寄セタル書翰中、日本ノ征清軍ニハ整然タル赤十字病院ノ設備アリテ其美其喜枚擧ニ遑アラズ。自國及敵傷者ヲ待遇スルノ親切ナルハ意ヲ俟タズ。捕虜ト雖モ日本兵ト全ク同一ノ厚遇ヲ受クルハ曾テ基督教國ニ於ケル大戰ノ時ト雖モ多ク其例ヲ見ザル所ナリ。若シ英露二國ニ於テ最後マデ干涉セザラン乎。日本ハ必ズ清韓二國ノ爲ニ偉大ノ事業ヲ成遂シ、以テ自國ノ大名譽ト大利益トヲ完クスルヲ得ント。余等ノ監督者猛獅貪熊ヨリ太闘王（デビット）ヲ救出シタル神ハ、日本ヲシテ不正傲慢貪慾ナル干涉ヨリ免レシメ玉ハンコトヲ信ジ、且祈ル者ナリ。（撒母耳（サミエル）前書第十七章大闘王傳參照アレ）余ハ全能ナル神ニ懇求セリ。嗚呼太闘ノ神ヨ、神國ナル大和民族ヲ現在ノ猛獅貪熊ノ爪牙ヨリ救拯シ玉ヘト。抑々貴國軍人ガ其背囊ニ聖書ヲ有セルハ宣教的ノ義軍ナリ。貴國ハ亞細亞洲ニ在テ最先ニ立憲政治ヲ實施シタルモノニシテ、光輝アル憲法ハ信教自由ヲ明書セリ。古來戰爭多シト雖モ、猛惡殺虐非道ナク、博愛高義ヲ以テセル開明的戰爭ハ獨リ今回貴國ノ能クスル所ナリト云フノ光譽ハ、我國ニ於ケル教師等ガ齋シク講壇ニ稱讃シテ措カザル所ナリ。余ヤ齡漸ク遭ミ、氣衰フヲ以テ講壇ニ立ツヲ得ズト雖モ、聊カ老腕ヲ役シテ貴國ノ令譽ト品位トノ爲ニ新聞紙ニ記述シタルコトアリ。若シ健康ノ許スアラバ二十餘年前ノ如ク聖書ヲ懷ニシテ貴國ニ再遊センコトヲ望ムト雖モ、今ハ空想ノミ。閣下閑ニ乘ジ往時ノ日新眞事誌ヲ一閱シ玉ハヾ「地」發見セラレン是レ實ニ余ノ發明スル所ニ係ル。又當時ノ太政官記錄ヲ繙カバ、日英商人合意シテ香港ヨリ彈藥ヲ輸入シ、之ヲ鹿兒島叛徒ニ密賣セントシタル事實アリシ

ヲ知ラレン。余窃ニ貴國政府ニ告ル所アルヲ以テ幸ニ危害ヲ未然ニ防止スルヲ得タリ。此事ハ平井希昌氏（書記官トシテ關知セシヲ以テ氏猶ホ生存セラルヽナラバ就テ試問セラルベシ）今次余ガ遙ニ此書翰ヲ閣下ニ寄スルハ、閣下ガ曾テ聖書的開明ニ贊同セラレタルニ由ル。唯老腕執筆ニ懶リテ行文極メテ澁、閣下幸ニ諒恕シ玉ヘ。然レドモ將來我國各種日刊新聞等ニ記載スルヲ要スルモノアラバ、隨時垂命ヲ乞フ。余既ニ耄スト雖モ喜デ尊命ヲ奉ゼン。蓋シ天ガ忠勇義烈ナル大政治家大仁人ヲ生メル日本國ニ對シ、最モ有誼アル者ノ任タルヲ信ズレバナリ。　敬具

千八百九十五年三月十二日

米國費州日耳曼府ニ於テ

ジヨナサン、ゴーブル　再拜

大日本首相　伊藤伯閣下

日本政府ノ執ル可キ途

——伊藤首相ニ寄スル書——

紐育　ヘンリー・クルース

拜啓近刊ノニユーヨークヘラルド新聞紙上大佐コケリル氏通信中、御深切ニモ拙者ノ事情御尋被下候趣記載有之、欣然舊日ノ親交ヲ想起シ愉快禁ズル能ハズ。閣下ニハ此度日清戰爭ニ關シテ國政上偉大ノ勳功ヲ立テラレ、天下ノ雋傑中殊ニ顯著ナル位置ヲ占ムルニ至ラレタルコト拜祝ノ至ニ御座候。日清戰爭ト伊藤ノ名聲トハ歷史上不滅ナル事柄ト相成萬世ノ敬服ヲ喚起スルコトニ御座候。

乍去閣下ハ此度貴國ガ大功ヲ擧ゲタルヲ以テ、自己ノ功勞ヨリモ更ニ偉大ノモノトシテ貴重セラルヽコトハ、敢テ疑ヲ容レザル所ニ候。拙者ハ之ヲ歡喜スルニ於テ決シテ人後ニ落チザル者ニ有之、且合衆國一般ノ輿論モ亦此ノ如クナリト云フモ過言ニ有之間敷ト存候。合衆國人民ハ貴國ニ對シ常ニ庇護者ノ義務ヲ有シ、嚮キニ貴國ノ將來大ニ成スアルヲ觀テ、貴國ヲ萬國ニ紹介シタルハ實ニ數十年前ニシテ、以來米國人ハ貴國ノ進歩ヲ顯ハシ、天下競爭者ノ中ニ於テ駸々平トシテ邁進セラルヽヲ見テ、欣然日本萬歲ヲ呼ブノ傾向ヲ致シタル事ニ御座候。過去既ニ然リ、其將來ハ如何、

吾人米國人ノ見ル所ニ依レバ、貴國ハ早晩露ト事ヲ構ヘザルヲ得ザルベシ。其時ヤ實ニ貴國ノ資力上重大ノ事タルベク、吾人ハ此ノ如キ變象ヲ見ルヲ憂慮スルヤ深シ。日モ露モ共ニ米ノ親友タリ。否同盟國タリ。而シテ日露事ヲ構フルノ曉ニ至リテハ、米ハ其兩國間就レカニ其親交ヲ偏セザルヲ得ズ。而シテ貴國ト我ガ邦トノ通商條約ハ露ト我ガ邦トノ傳來ノ義務ニ勝リテ重キモノニ無之候。

凡ソ米國ニ生ジ、少シク文字アル徒輩ニシテ米ノ歷史上彼ノ改革ノ戰後一千八百十二年ノ役及南北ノ亂ノ如キ重大ノ事件ニ於テ、露ハ多少過失アルニモセヨ、常ニ其力ヲ致シテ米ヲ助ケ、實ニ强勢有爲ノ友邦タリシハ之ヲ知ラザラント欲スルモ能ハズ。實ニ米ハ國トシテ露ニ對シテ大ニ負フ所アルモ、未ダ之レニ報ヒタルコト無之モノニ候。

若シ日露衝突シ、米其舊誼新交深厚アルノ兩邦國ニ對シテ去就ヲ決セザル可カラザル場合ニ際セバ唯是レ正ニ就クノ一途アルノミ。卽チ穹蒼墜ツルモ正義守ルベシトノ金言ニ從テ進退ヲ決スルノ外無之候。夫ノ露國ガ干涉シテ貴國ノ淸ヲシテ革新セシメントノ企圖ヲ破リ、且戰勝者タル貴國ニ正當ナル結果トシテ、且ツ將來ノ平和ニ必要ナル條件ヲ貫徹スルヲ得ザラシメタルハ露ノ處置甚ダ酷ニシテ、不條理且壓倒的ノ事ニ候。去レバ露ト釁端ヲ聞クニ於テハ正ニ貴國ニアリト被存候。

乍然如何ニシテ米國人一般ヲシテ此理ヲ知ラシメンカ、唯ダ新聞紙ヲ利用スルノ一途ノミニ御座候。米人ハ文事ニ進ミ、事理ノ考究ヲ勉ムル所ノ國民ニシテ、其新聞雜誌ノ數ノ如キハ各國ニ出版スルヲ合算セルモノヨリモ尙多キハ已ニ閣下ノ了知セラルヽ所ニシテ、今更喋々ヲ要セズト存ジ候。又閣下ガ汎ク各國ノ制度ヲ取調ベラレタル上ニ於テ、新聞紙ノ力廣大ナルト、公務ノ處理上、其勢力ノ顯著ナルトハ必然了解セラルヽモノアラン。抑々新聞紙ハ單ニ輿論ヲ制抑スルノミナラズ、輿論ヲ創造シ、且意ノ如ク之レヲ變改スルコト實ニ易々タリ。米國ニ在リテハ凡ソ新聞ノ唱道スル所必ズ其成効ヲ見ザルナキ有樣ニ御座候。此ク記述シ來レバ、自ラ拙翰ノ主意奈邊ニ存スルカト云フニ到着致候。當米國諸新聞紙ノ全體ヲ觀察致候ヘバ「ニューヨークヘラルド」新聞ハ最上ノ勢力ヲ有スルモノニ御座候。現今其持主ハシエームス、ゴルドンベネット氏ニシテ、氏ノ力能ク該新聞紙ヲシテ空前絕後ノ進步ヲ爲サシメ、日刊ノ新聞トシテ未曾有ノ勢力ヲ得セシメタル次第ニ御座候。彼ノリビングストン氏探見トシテスタンレー氏ヲ亞佛利加ニ派遣シタルハ、實ニベネット氏ニ有之、且自費ヲ以テ北極探見ノ遠征隊ヲ送リタルモ亦此人ニ御座候。此外大ニ陣ヲ歐洲大陸ニ張リ、巴里府ニヘラルト新聞ノ發行所ヲ設ケ、以テ世ニ始メテ眞正ナル萬國的新聞紙ヲ發行スルコト相成候。米國ニ於ケル該新聞紙ノ賣高ハ三十萬部ニシテ、其外國賣高ハ巴里發行ノ分ヲ除キテ他ノ米國新聞ニシテ販路ヲ外國ニ有スルモノノ總數ニ超過スル程ニ御座候。而シテ巴里發行ノ分ハ歐洲各地ニ普及シ居候。實ニ該新聞紙ノ外事通信ハ最モ感服スベクシテ廣大ナル米大陸ノ新聞紙ハ之レニ依テ以テ事ヲ報ズルノ狀態ニ御座候。

以上陳述スル所ハ知ル人多カラザルモ疑フベカラザル事實ニ御座候。拙者ノ之ヲ陳述スル所以ハ、右ベネット氏ガ新聞事業家トシテ深ク見ル所アルニ基キ、此度貴國ニ大佐ジョン、エー、コケリル氏ヲ派遣シタルコトニ向テ、閣下ノ注意ヲ乞ヒ度所存ニ御座候。コケリル大佐ハ當米國ニ在ル數多ノ新聞記者中正儔ナキ敏腕家ノ名聲高ク、人凡ソ氏ノ名ヲ知ラザルモノナク、第一流ノ記者中特ニ人望ヲ博シタル有力家ニ御座候。又氏ハ榮譽アル家系ヲ有シ、氏ノ父ハ曾テシヤーマン將軍ガ最良ノ軍人ナリト評サレタ人ニ御座候。以上述ブル所ヲ以テ「ニューヨークヘラルド」新聞紙ノ性質竝ニ貴國ニ派遣セラレタル同新聞紙ノ特派員ノ人物ノ梗概ヲ了知セラレンコトヲ希望致候。

此拙翰ノ目的ハ業ニ已ニ閣下ノ烱眼ニ映寫候ハンカ。即チ拙者ハ理財家且公務家トシテ、當市ニ於ケル新聞紙ヲ扱フノ途ニ於テ、聊カ經驗有之候ニ付、拙者ハ萬里ノ波濤ヲ越テ風物相違セル貴國ニアルノ閣下ニ對シ、一ノ方針ヲ表明シ以テ當米國ノ輿論ヲ指導シ、且之レヲ制抑スルノ途アルヲ告グルハ實ニ閣下ニ對スル友義ト奉存候。而シテ其事タル敢テ他ノ手段ヲ要セズ。閣下一言ノ依賴アレバ則チ足レリト相考候。要スルニ當國ノ事業家ガ經驗上有利ナリト認メタル途ヲ以テ、新聞記者ヲ遇スル一事ニ御座候。換言スレバ新聞ノ材料ヲ與フル事ニ外ナラズ候。

コケリル大佐ハ到處厚遇セラレザル人物ニテ當國ニ於テハ如何ニ優待セラルヽモ氏ニ對シテ過ギタリトセズ。曾テ拙者ガ閣下ノ交誼ヲ辱シタル實驗ニ依レバ、閣下ハ大佐ニ對シテ十分ノ厚遇アリシコト毫モ疑ハザル所ニ御座候。然レドモ氏ニ對シテハ所謂厚遇ナルモノヨリモ一層鄭重ヲ要スル儀ト存候。前ニ申上候通リ新聞ノ材料ヲ得ルコト卽チ氏ノ特ニ派遣セラレタル所以ニ御座候。

コケリル大佐ノ要スル所ハ敏速ニ報告ヲ得テ、以テ多數ナル「ヘラルド」新聞ノ購讀者ニ快報スルニ有之候ヲ以テ、十分時間ノ餘地ヲ得ル事ヲ知ル事氏ニ取テ肝要ニ御座候。氏ハ德義ヲ重ンズルノ士ニシテ、閣下ノ信任ヲ得ベキ價値アル人物タルハ拙者保證仕候。當米國ニアリテハ凡ソ公益ニ係ル事ニシテ、國家重大ノ秘密ニアラザル以上ハ紙上ニ揭載セシメラルヽコトニ御座候。御差支無之限リ大佐ニ右ノ如キ特待ヲ與ヘ、他ニ先ンジテ米國ニ報道ヲ爲シ得ベキ都合ヲ許與セラレ間敷哉。大佐ガ拙者ノ畏友タルコトハ本文ニ於テ定メテ推知セラレン。閣下若シ大佐ノ爲ニ庇護シ玉ハヾ幸甚此事ニ御座候。

既ニ「ヘラルド」新聞ヲ以テ旅順虐殺事件ニ關スル風評ニ對シテ十分貴國ノ爲ニ雪寃セシメタル事實ハ、閣下亦諒知セラレン。同氏ハ之ガ爲ニ直接同業者ヲ駁擊セザルヲ得ザル場合ニ立到リ、隨分其地位上ヨリ云ヘバ、困難ナリシニモ拘ラズ、一々貴國ノ名譽ヲ重ジ、衆議囂々ノ間ニ立チ毅然友情ヲ貴國ニ表シ、飽クマデ貴國ノ爲ニ辨護ノ勞ヲ取リ候。尤其意志ハ唯ダ眞理ノ爲ニ盡瘁セントスルニ存シ、今ヤ其聲ハ廣ク天下ニ鳴動シアルヲ信ジ候。抑々拙者ガ此事ヲ云フハ、大佐コケリル氏ガ厚ク貴國ニ友情ヲ表シ、且氏ガ貴國ニ推服スル所アルヨリ、氏ガ貴國ノ爲ニ盡力シタル幾多事

項中ノ一例ヲ擧示スル爲ニ此ニ說及致候次第ニ御座候。拙者ガ此ノ如ク申上候事ハコケリル氏ノ發送セラレタル貴重ナル材料中、中途差押ヘラレタルモノアルガ爲メニ竊ニ閣下ニ哀訴セントスルノ意ニハ無之候。尤當地同業者ニ於テ此風說ハ盛ニ傳唱セラレ居候事ニ候。又素ヨリ拙者ハ敢テ尊畏ヲ冒シテ饒舌スルモノニモ無之、唯ダ貴國將來ノ爲ニ計ルニ、今日米國ノ新聞紙ヲ利用シテ輿論ヲ喚起シ、一層貴國ノ爲ニ利益アル友情ヲ得ルコトノ必要アル爲メニシテ、而カモ今日ハ其機會ノ熟スルモノアル故ニ候。況ヤ露國ハ追々此方針ヲ取ルベキハ必然ニ候ヘバ、貴國ガ露ニ一着ヲ輸スル時ハ非常ナル不利益有之候ヲ憂慮致候ヨリ赤誠ヲ吐露致候マデニテ、拙者ハ上來敍述スル如ク、終始貴國ニ向テ尤モ深厚ナル同情ヲ表スルモノニシテ、貴國ガ間斷ナキ援助ヲ合衆國ニ保チ一旦必要アルニ及デハ、財政上及外交上ノ助力ヲモ貴國ニ與ヘシメント欲スルニ急ナルノミニ候。

此拙翰ハ意外ノ長文ニ亘リ候故最早筆ヲ玆ニ擱カントスルニ當リ、敢テ貴國及閣下ノ萬歲ヲ高呼シ幷セテ閣下ノ健康多福ヲ祈望ス。頓首々々

千八百九十五年八月七日

紐育府

首相伊藤閣下　　ヘンリー、クルース　再拜

「カメロン」ノ處分ニ就テ

本件ノ處分ニ就テハ四種ノ意見アリ、曰ク裁判權ヲ充分ニ行フベシ。曰ク單ニ戰爭ノ終リ迄獄ニ入レ置キ、戰爭終ルヲ待チ解放スベシ。曰ク治外法權ノ約アルヲ以テ、米國領事ニ引渡サヾルベカラズ。曰ク伊東司令長官ノ牛道臺ト締結セル降服規約第一條及第五條ニ依リ解放セザルベカラズト、乞フ左ニ順次其適否ヲ論ゼン。

一、裁判權ヲ充分ニ行フベシトナスノ意見、此意見ヲ分ツテ一派トナスヲ得。曰ク名義上充分裁判權ヲ行テ、實際ニハ之ヲ行ハザルモノ、曰ク名義實際共ニ之ヲ行フモノ是ナリ。

(一)　名義上充分裁判權ヲ行テ、實際ニ之ヲ行ハズトナスノ意見。此意見ニ從ヘバ該俘虜ヲ死刑若クハ其他ノ重刑ニ處シ、而シテ大赦若クハ特赦ニヨリ之ヲ放免スベシトナスモノナリ。若シ此意見ヲ採用スレバ一方ニハ我威嚴ヲ示シ、一方ニハ政略上寬典ニ依ルヲ示スノ利アリ。而シテ之ヲ放免スルノ手段ハ大赦ヲ以テセズシテ特赦ヲ以テスルヲ便トス。何トナレバ大赦ハ數多ノ同種類犯罪ヲ宥恕スルモノニシテ、特赦ハ一定ノ犯人ニ對シ其刑罰執行權ノ全部又ハ一部ヲ將來ニ取消スモノニシテ、本件ノ如キ場合ニ適當ナレバナリ。特赦ハ裁判確定後之

ヲ行フ

(二) 名義實際共ニ裁判權ヲ充分ニ行フノ意見。此意見ニ依レバ國際法ニ基キ、破誓者ヲ死刑ニ處シ、若クハ其他ノ重刑ニ處スルハ交戰國ノ權利ナルヲ以テ、敢テ他ニ忌憚スル所ナク之ヲ行フハ當然ノコトナリトナシ、多少外國ノ論評ノ如キハ顧ミルニ足ラズトナスモノナリ。

(別冊「宣誓解放ノ條件ヲ破レルジョージ・エル・カメロンノ處分」參照)

二、單ニ戰爭ノ終ル迄獄ニ入レ置キ、戰爭終ルヲ待チ該俘虜ヲ解放スベシトナスノ意見。此意見ニ依レバ裁判權ヲ充分ニ行ハズシテ、一種ノ軍事上ノ處分トシテ寛大ノ手段ナルモノナリ。而シテ其實際ニアリテハ前項(一)ノ意見ト懲罰ヲ同フシ、名義ニ於テハ大ニ寛典ナルヲ覺ユ。是該俘虜米國歸化人ナリト稱スルヲ以テ、米國ノ名ニ對シ政略上寛大ノ處分ヲ採レルモノニシテ、曩キニ故楠内福原二人ノ引渡シニ關シ、米國議院ハ國務卿グレシャム氏上海總領事ニ訓令シ、支那官吏ニ引渡サシメタルヲ批難シ、遂ニ議院ヨリ本件ニ關スル往復公文ヲ政府ニ請求シ、議場ニ於テ其當否ヲ論議セントスル同感情的ノ國民ニ對スル政略上ノ手段ナリ。

三、治外法權ノ約アルヲ以テ該俘虜ヲ米國領事ニ引渡サヾルベカラズトナスノ意見。此意見ノ如キハ別冊「宣誓解放ノ條件ヲ破レルジョージ・エル・カメロンノ處分」第七項ニ論ジタルガ如ク、成立シ得ザルノ意見ナリトス。第一、治外法權ノ規程タル平時ノ條約ニシテ本件ノ如ク戰時國家正當防衛ノ場合ニ適用スベカラズ。第二、治外法權ノ規程タル我臣民ト彼ノ市民トノ間ノ事件ヲ規定セルモノニシテ、我國ノ臣民對彼ノ政府若クハ我政府對彼ノ國ノ市民ノ間ノ事件ヲ規定セルモノニアラズ。第三、國際法上何人ガ敵ナルヤヲ決スルハ國籍ニ依ラズシテ住居(法律上ノ所謂住居)ニ依リテ決スルノミナラズ敵國ノ軍事ニ服務スルモノハ必ズシモ住居ニ依ラズシテ、直チニ敵ノ性質ヲ有スルモノトシ、本件ノ如ク特ニ或ル事項ヲナス爲メニ敵ノ軍事ヲ服務セルモノハ、當然治外法權ノ適用ヲ得ザルモノトスルヤ又疑ヲ存セズ。

四、伊藤司令長官ノ牛道臺ト締結セル降服規約第一條及第五條ニ依リ、該俘虜ヲ解放セザルベカラズトナスノ意見。此意見ノ如キハ降服規約第一條及第五條ノ解釋ヲ誤マルモノニシテ、固トヨリ採用スベカラザルノ意見ナリ。降服規約第五條ニ依レバ、「清國ノ海陸軍士官タル支那人及ビ外國人ハ第十條ノ規定ニ依リ港外ニ航行スル康濟號ニ投ジ、威海衞以外ニ退去スルヲ許サルヽモノトス」トアルモ、本規約ヲ結ブニ當リ、國際法ニ反シ、信義ヲ破リ宣誓解放ノ條件ニ背キタルモノヽ如キハ固トヨリ之アラズト推測スルハ、所謂「法律ハ約束ヲ履行セルモノト推測ス」ノ格言ニ依リ、極メテ至當ナリトス。故ニ第五條ハ當然宣誓ヲ破リタルガ如キ支那人若クハ外國人ヲ包含セザルハ、毫モ疑ヲ存セザル所ナリトス。然レバ宣誓ヲ破リタルホーウイーヲ第五條ニ依リ威海衞以外ニ退出ヲ許サレタルモノトナスノ意見ノ如キハ不當ニシテ採用スベカ

ラザルモノトス。

以上論ジタル如クナルヲ以テ、第三第四ノ兩意見ハ成立セズ。然レバ第一、(一)(二)及ビ第二ノ意見中其ノ一ニ依ラザルベカラズ。而シテ死刑ニ處スルハ必ズシモ之ヲ國際法上要スルモノニアラズ。他ノ重刑卽チ禁獄ノ如キ刑ヲ科シテ止ミタル例少カラズ。故ニ其ノ寬ニ從ヒ、之ヲ重禁獄若クハ輕禁獄ニ處シ、戰爭結局ノ日ヲ待チ(裁判確定後)特赦ヲ以テ放免スルヲ最モ至當ナリトスルガ如シ。裁判所ノ如キハ必ズシモ軍法會議ニ限ラズ。軍事上ノ處分トシテ一應訊問宣誓セシメタル上宣告シ得ルモノト思考ス。

附記。海軍治罪法第八條ニ依レバ、臨時合圍ノ地ニ於テハ司令官審判ノ手續ヲ省略スルコトヲ得トアリ。又第十一條第二項ニ依レバ、臨戰合圍ノ地ニ於テハ判士ニ名ヲ減ズルコトヲ得トアリ。又第十七條第二項ニ依レバ、合圍ノ地ニ於テハ司令官其他所在ノ高等官ヲ以テ判士若クハ主理ニ充テ、判任官ヲ以テ錄事ニ充ツルコトヲ得トアリ。然レバ本件ヲ軍法會議ニ付スルトスルモ、其審判手續及構成ハ極メテ之ヲ省略スルヲ得。

處分按

一、近代ニ至ルマデ敵國ノ人民ハ皆敵ニシテ中立國ノ人民ハ皆中立國人ナリトナセルモ、輓今ニ於テハ敵國人民必ズシモ敵ナラズ、中立國人民必ズシモ中立國人ナラズトセリ。卽チ敵國人民ト雖モ法律上ノ所謂住居ナルモノヲ中立國ニ有スルモノハ敵國人ニアラズトナシ、該財產ノ沒收ハ敵國ニアルモノノ外ハ沒收スルヲ得ズ。之ニ反シ中立國人ト雖ドモ住居ヲ敵國ニ有シ、開戰後該住居ヲ移サザルモノハ敵人ナリト見做シ、從ツテ該中立人ノ財產ニシテ敵國ニアルモノハ敵ノ財產ナリトシテ沒收サルヽコトアリ。要スルニ何人ガ敵國ナルヤヲ決スルハ現今ニアリテハ出生又ハ歸化セル國籍ニ依ラズシテ、現在ノ住居ニ依リテ之ヲ決ス。

一、住居トハ權利義務ノ中心點トナルベキ住居ヲ云フ。而シテ住居ヲ決スルハ住ヒタル時日及目的ニヨルモノトス。然レドモ本人若シ敵國ノ軍事ニ服スルトキハ、必ズシモ住居ノ要素タル時日及目的ヲ問ハズシテ直チニ敵ノ性質ヲ有スルニ至リ、本人ヲ敵トシテ取扱フヲ得。而シテ本人敵國ノ文官若クハ武官ノ役務ニ不定時間服スルモノハ、完然ナル敵ノ性質ヲ有ス。之ニ反シ特ニ或ル事項ヲナス爲メニ雇ハレタルモノハ、單ニ該事項ニ關シテノミ敵ノ性質ヲ有スルモノニシテ、其他ノ事項ニ關シテハ敵トシテ取扱フヲ得ズ。卽チ第一ノ場合ノ例ハハンネツケンノ如キモノニシテ、第二ノ場合ハジョージ・エル・カメロンノ如シ。

一、中立國人ト雖モ前項ノ場合ニ當ルモノハ、敵トシテ之ヲ取扱フヲ得ルヲ以テ、之ヲ俘虜トナセルトキニ異ルコトナシ。

「カメロン」ノ處分ニ就テ

一、俘虜ヲ宣誓ノ上解放セルトキハ、該俘虜ハ當然再ビ敵ノ軍事ニ服スベカラザルハ論ヲ俟タズ。而シテ若シ宣誓ニ反シテ其約セル所ニ違ヒ、再ビ軍事ニ從ヘルモノ、戰爭ノ終局前再ビ俘虜トナルトキハ、國際法上之ヲ死刑ニ處スルモノトス（フアツテル第三篇第八章第百五十一節、モーゼル第九篇第二章第三百六十九頁、マルタン第二百七十五節、亞米利加ノ訓令第百十九條乃至第百三十三條ブリユンチユリー第六百十七節乃至第六百二十六節「ブルツセル」宣言第三十一條乃至第三十三條參照）獨佛戰爭ノ時、佛國ノ將士獨ノ俘虜トナリ、宣誓ノ上解放セラレ、再ビ軍ニ從ヒタルモノ復タ捕ハレテ重刑ニ處セラレタルモノ其數千百ヲ以テ數フ。

一、彼我便宜ノ爲メ俘虜ヲ交換スルニ當リ、該俘虜護送船ヲ中立船ト見做シ、該船員ヲ中立人ト見做スヲ例トス。而シテ該船員等ハ戰鬪行爲ヲナスベカラザルコトヲ、彼我ニ約スルモノニシテ、若シ該約ニ負キ、或ハ敵艦ヲ捕拿シ或ハ自國船ノ敵ノ爲メニ捕拿セラレタルモノヲ挽回セルトキハ俘虜ノ宣誓シテ解放サレタルモノ再ビ軍ニ從ヘルト趣キヲ同フス。而シテ英和間ノ戰爭ニ於テ、「ゼマリ」ノ件ニアリテハ英國ノ俘虜宣誓ヲ破リ逃亡ヲ企テ、己レ等ノ船舶ヲ挽回シ、後チ再ビ和蘭人ノ爲メニ捕拿セラレ、該船ノ和蘭ニ到着スルニ及ンデ、「ゼマリー」號ノ船員ハ直チニ獄ニ投ゼラレ、該船ハ英國ニ渡シ、該君主ノ公立ニ依リ和蘭政府ニ相當辨償ヲナスニ任ジタリ。

然レバ俘虜宣誓ヲ破リ、再ビ軍ニ從ヒ戰爭ノ終局前復タ俘虜トナリタルモノハ、「ゼマリー」號事件ノ例ニ依レバ必ズシモ死刑ニ處スルヲ要セザルガ如シ。

一、カメロン（ホーウイー）ヲ死刑ニ處シ、徒ラニ外國ノ批評ヲ招クハ政略上甚ダ得策ナリトセズ。故ニ前項「ゼマリー」號ノ例ニ倣ヒ單ニ獄ニ投ジ、戰爭終局後解放スルヲ可トス。

一、本件ニ治外法權ヲ適用スルヲ得ザル理由三アリ。

第一、治外法權ノ規程タル平時ノ條約ニシテ戰時本件ノ如キ場合、卽チ國家正當防衞ノ場合ニ適用スベカラザルコト。

第二、治外法權ノ規定タル本邦ノ一個人若クハ一會社ト彼邦ノ一個人若クハ一會社トノ間ニ生ズル事件ニ關スルモノニシテ、本邦ノ政府ト彼邦ノ一個人若クハ一會社間ノ事件、或ハ彼邦ノ政府ト本邦ノ一個人若クハ一會社間ニ生ズル事件ノ規定ヲナセルモノニアルザルコト。

第三、本篇第一項ニ於テ論ジタルガ如ク、國際法上何人ガ敵ナルヤヲ決スルハ、現今ニアリテハ國籍ニ依ラズシテ住居ニ依リテ決スルノミナラズ、第二項ニ於テ論ジタルガ如ク敵國ノ軍事ニ服務スルトキハ必ズシモ住居ノ要素タル時日及目的ヲモ問フヲ要セズシテ、直ニ敵ノ性質ヲ有スルニ至リ、該申立人ヲ敵トシテ取扱フヲ得。

以上論ジタルガ如クナルヲ以テ、臨時海軍々法會議ハ、カメロンノ中立國人ナルニモ拘ラズ敵國

人ノ俘虜トナレルモノ、宣誓解放ヲ得タル後、該宣誓ニ背キ再ビ軍務ニ服シタルモノ、戰爭終局前更ニ俘虜トナレルモノトシテ取扱フヲ得。而シテ死刑ニ處スルハ國際法上必ズシモ之ヲ要スルニアラザルノミナラズ、政略上又策ノ得タルモノニアラザルヲ以テ、「ゼマリー」號件ノ先例ニ依リ、戰爭終局迄禁獄ニ處スルヲ至當トス。

カメロンノ陳述

余ハ玆ニ直誠ニ且ツ正直ニ余ノ自由意思ヲ以テ左ノ事ヲ宣誓シテ陳述ス

第一、余ハ千八百六十六年蘇格蘭ダンデーニ生レ千八百九十一年十一月三日亞米利加合衆國ノ市民トナレリ。

第二、余ノ名ハジョージ・エル・ハウキーナリ。又曾テジョージ・エル・カメロント稱セリ。年齡ハ二十九歳ニシテ、亞米利加ノ寄宿ハ紐育ブロードウエー街二百六番地オチスウキルキンスン方ナリ。

第三、余ノ職業ハ砲術水雷ニ係ル技術家ナリ。

第四、余ハ英國船ゲイリック號ニ乘ジ、日本横濱ニ來レリ。

第五、余ハ佛國船シドニー號ニ搭シ横濱ヲ去リ、神戸ニ來着シ、同船ヨリ黑岡大佐ニ拘留サレタリ。

第六、余ハ莫鎮藩及ヒワイルドノ兩氏ト共ニ日本ニ來レリ。

第七、余ハ神戸ニ於テ宣誓ノ上解放サレタリ。

第八、余ハ十一月下旬頃ワイルド氏ト共ニ香港ニ向ツテ神戸ヲ出立セリ。而シテ十二月一日、比同地ニ到着シ、尋テ同地ヨリ上海ニ向ヒ、三四日滯在後芝罘ニ到リ、二日間滯在後十二月十二日ヨリ十六日ノ間ニ劉公島ニ到着セリ。該島ニ一ヶ月滯在後、余ハ同國人ノ友人ニ寄リ丁汝昌ニ紹介サレタリ。同友人ハ是レヨリ前余ノ職業ニ付丁提督ニ語リタルモノヽ如シ。

第九、余ハ員外參謀ニ採用サレ、支那旗艦鎮遠ニ乘組ヲ命ゼラレ、食糧ノ供給ヲ受ケタレドモ俸給ヲ受ケズ。

第十、余ハ報酬ヲ受クルナラント希望セリ。

第十一、余ハ常ニ丁提督ト進退ヲ俱ニセリ。

第十二、余ハ二月十六日日本旗艦松島ニ引渡サレ、日本海軍士官ヨリ訊問ヲ受ケタリ。

第十三、該士官ガ余ニ曾テ日本ニ在リシヤ否ヤト問ハレタルトキ、余ハ曾テ日本ニ到リタルコトナシト答ヘタリ。

第十四、余ハ神戸ニ於テ解放サレタル時米國ヘ歸航スルノ旅費トシテ五百圓ヲ領收セリ。

ワイルド氏モ又同歸航旅費トシテ同額ヲ領收セリ。

第十五、余ハ支那ニ行キ支那旗艦鎮遠ニ乘組丁提督ヲ補助セシコトヲ深ク懺悔スル者ナリ。

千八百九十五年三月七日

吳ニテ

ジヨウヂ・エル・ホウキー　署名

（ホウキーハカメロンノ僞稱ナリ）

三國干涉ニ關スル露國諸新聞ノ意向

露國諸新聞ハ各國卽チ馬關契約ノ調印近日ニ迫レリトノ電報到達セシ頃ヨリ、該條ニ關スル種々ノ論評ヲ揭ゲ始メ、「ノウオスチ」新聞ハ四月十八日ノ紙上ニ於テ、獨國ノ意向上急遽ナル變化ヲ生ジタルハ、前淸國駐劄獨公使ブランド氏大ニ與テ力アリト說起シ、同氏ヲ以テ絕東ノ事情ニ通曉スル大家ト稱揚シ、同氏ヨリ獨帝ヘ提出シタル報告及其著述中ニ說ケル、「歐洲ノ爲メ恐ルベキ絕東ノ邦國ハ寧ロ日本ニシテ淸國ニ非ラズ」トノ意見ヲ轉載利用シテ、我邦攻擊ノ材料トナシ、各國共同干涉ノ必要ヲ主張シ、併セテ其持論ナル淸國分配問題ニ論及セリ。」其後馬關條約ノ調印愈々結了セリトノ風評世間ニ播布スルヤ、「ノウオエヴレミヤ」新聞ハ四月十九日ノ紙上ニ於テ條約ノ條件ヲ遂敍シ、遼東半島ノ讓與ニ關スルモノヲ除クノ外、總テ溫和ノ條件ノミナリト謂フコトヲ得ベシ。現ニ臺灣ノ讓與ハ最初ヨリ到底免ルベカラザルモノニシテ、戰債ノ金額モ亦割合ニ輕易ナリ。且ツ萬國貿易ノ爲メ、更ニ淸國ヲシテ五港ヲ開カシメタルハ、歐洲諸國モ一般其利益ニ均霑スルコトナレバ、獨リ日本ガ特利ヲ專有スルノ理ナシ。只ダ遼東半島ノ讓與ニ關シテハ默止スベカラザルモノアリト雖モ、追テ確報ヲ得タルノ後ニ非ラザレバ意見ヲ吐露シ難シト說ケリ。」續テ該條約調印ノ確報

ヲ接收スルヤ、同新聞ハ四月二十日ノ社說ニ於テ、日本ニ遼東半島ヲ割與スル一時ハ、絕東ト關係ヲ有スル歐洲諸國ニ取リ、頗ル重大ナル一問題ニシテ、殊ニ露國ハ同地方ニ於ケル固有ノ利益上、到底之ヲ等閑視スルヲ得ズ。英佛モ亦タ之ト同一ノ感情ヲ抱クベク、獨國ニ至テモ近年絕東ト巨額ノ貿易ヲ爲スガ故、其利益上共同干涉ニ贊成ヲ表スベケレバ必ラズヤ近日ノ內露國竝其他ノ邦國ハ相當ノ手段ヲ執ルコト疑ナカルベシ云々ト論ジ。次ニ「ノウオスチ」新聞モ同日ノ紙上ニ、日本ガ一旦遼東半島ト堅固ナル旅順口ヲ占有スルニ至ラバ、自然朝鮮滿洲ハ勿論、北京ヲ控制シ得ル好位置ニ立ツモノト謂ハザルヲ得ズ。是レ卽チ全淸國ヲ擧ゲテ日本ノ頤使ニ一任シタルト何ゾ擇バン。將來ノ情勢果シテ如此ナリトセンカ、歐洲諸國ハ其利益ヲ損傷セラルヽコト莫大ナルヲ以テ、寸時モ之ヲ等閑ニ付スベカラズ、云々ト痛論シ、露國ハ勿論英佛獨モ亦タ共ニ不利不便ヲ感ズル所以ヲ縷述シ、末段ニ至リ本問題ハ露國ノ爲メ最モ緊急ナルヲ以テ、此際他國ノ應接ノミニ倚賴セズ、獨力抗議ヲ爲スノ決心ナカルベカラズト論結セリ」

佛獨兩國ハ露國ト協同シ日本ヘ異議ヲ申込タリトノ事實判明スルヤ、「ノウオエウレミヤ」新聞ハ四月廿二日ノ紙上ニ於テ、英國ガ各國ト協同セザルハ全ク首鼠兩端ノ行爲ニ外ナラズ云々ト頻ニ馭擊シ、獨國ガ突然其意向ヲ轉ジ露佛ト提携シタルヲ以テ賢明ナル所置ナリト贊賞シ、日本ニ對シ抗議ヲ試ムルノ最モ必要ナル所要ヲ絕叫セリ。又「ノウオスチ」新聞ハ同日紙上ニ、日淸同盟ヲ論ジテ曰ク、日淸同盟ニ關スル風評ハ全歐洲ヲシテ杞憂ヲ抱カシメタルノ觀アレドモ、是レ決シテ實際ニ於テ深ク憂フルニ足ルノ價値ナシ。假令ヘ日淸ノ同盟成レリトスルモ之ヲ眞正ノ同盟ト稱スルヲ得ズ。寧ロ日本ガ淸國ヲ服從シタリト云ハバ却テ正當ナルベク、日淸間ノ戰爭モ亦タ之ヲ眞正ノ戰爭ト稱スルヲ得ズ。日本ノ軍兵ハ如何ニモ些少ナル抵抗ヲ受ケタル而已ニテ、到ル處風靡席捲ノ勢ヲ呈セリ。是レ寧ロ救援ナク且ツ軍備ナキ邦土中ヘ、武裝セル軍兵ノ侵入シタルニ過ギザルベシト說キ、露國軍艦ノ統計ヲ巨細ニ指示シ、其戰鬪力ハ他國ヲシテ默止セシムルニ充分ナルコトヲ說明シ、末段ニ於テ今日ノ事タル最早ヤ外交手段ニ依賴スルノ必要ナケレバ、速カニ兵力ヲ以テ干涉スルニ如カズ云々ト論ゼリ。「ノウオエ・ウレミヤ」新聞ハ同月廿四日ノ紙上ニ於テ、露佛獨三國ノ共同干涉ハ最早事實ト爲リ。馬關條約ハ絕東ノ均勢ヲ破ルヲ以テ、飽マデ之ガ訂正ヲ要求スルコト最モ緊急ナリ。日本ハ三國ノ提議ニ對シ果シテ同意ヲ表スルヤ否ハ未ダ之ヲ知ルニ由ナシト雖ドモ、絕東ニ於ケル三國ノ海軍力ハ、充分ニ日本ヲシテ各國ノ提議ニ對シ尊敬ヲ表セシムルニ足ルガ故ニ、日本ノ爲メニ謀ルニ速カニ之ヲ承諾シ、戰償金、臺灣ノ讓與及淸國ノ開港ヲ以テ滿足スルニ如カズ云々ト論ジ、其後モ同新聞ハ連日ノ紙上ニ於テ本問題ヲ再應論究シ、日本ハ暗ニ英國ノ應援ヲ望ムガ如ク見ユレドモ、英國ハ決シテ信用ヲ措クニ足ラズ、日本ハ三國ノ抗議ヲ受ケ、恰モ國家ノ威嚴ヲ毀損セラレタルモノヽ如ク、東京ニ於テ物議囂然タル由ナレドモ、日本ノ爲此際一步ヲ讓ルコト最

モ得策ニシテ、好シ此一條件ヲ讓リタリトスルモ、巨額ノ戰償金、臺灣及澎湖島ノ占有ハ捷戰ノ結果トシテ充分ナルベク、且ツ日本ガ今回ノ戰爭ニ由リ占有シタル一大海國タル名譽ノ地位ハ、勿論之ヲ永遠ニ保持スルヲ得ベシ云々ト說ケリ。

日本ガ三國ノ勸告ヲ容レ、遼東半島ヲ拋棄スルコトヲ約諾セリトノ事實判然スルヤ「ノウオスチ」新聞ハ五月七日ノ紙上ニ於テ、日本ガ三國ノ抗議ニ從ヒ、遂ニ遼東半島ノ確定占領ヲ絕念シタルハ全ク平和ノ手段ニ出デタルモノニシテ、日本ガ現時ノ情態ヲ了解シ、此如キ讓步ヲ爲シタルヲ證スルニ足ルベシ。然レドモ實際日本ノ軍兵ガ同地ヲ退去セザル限リハ、充分ニ嚴戒ヲ加ヘザルベカラズ。日本ノ外交官ハ頗ル巧智ニ長ズルヲ以テ、諸國ノ反對ヲ避ケンガ爲メ、一時確定占領ヲ拋棄セリト雖ドモ、淸國ノ領土ヲ無期限ニ占領スルヲ得ベク、英國ノ埃及ニ於ケル澳國ノ「ボースニ」「ヘルツオグニー」ニ於ケルガ如キ、其例證少シトセズ。若シ果シテ日本ハ時日ヲ遷延センガ爲メ、一時ヲ彌縫シ、以テ他國ノ同盟ヲ俟ツノ策ニ出デタリトセバ、露國ハ未ダ安座スベカラザルモノアリ云々ト論ジ「ノウオエ・ウレミヤ」新聞モ亦タ之ト殆ンド同一ナル意見ヲ吐露セリ。卽チ五月九日ノ同紙上ニ、日本ハ既ニ三國ノ勸告ヲ容レ、大陸ニ割據セントスルノ念ヲ絕チタリト雖ドモ、淸國ガ未ダ戰償金ノ義務ヲ果サザル以上ハ、日本ノ軍兵ハ依然同地方ヲ占領スルナルベシ。今回ノ事件ニ關シ三國ハ外交上ノ勝利ヲ博シタルモ、決シテ之ヲ以テ滿意安心スベキニ非ズ。將來益々日本ノ擧動ニ注意シ、終始警戒ヲ加ヘザルベカラズ云々ト說ケリ。」前記二新聞ノ外本問題ノ發生已降最モ激烈ナル論說ヲ揭ゲタルハ「モスコフスキヤ、ウエドモスチ」新聞ニシテ其論旨ニ至リテハ大同小異ナレドモ、只ダ「淸國境土ハ寸塊ト雖ドモ之ヲ日本ニ讓與スルヲ許サズ」「日本ノ淸國ニ對スル勢力ハ其影ダモ之ヲ止メシムベカラズ」「鮮血ヲ流スニアラザレバ到底事局ヲ結了スルコト能ハザルベシ」云々等ノ如キ頗ル過激ナル語調ハ其紙上ニ散見セラレタリ。「グラジダニン」新聞ハ之ニ比シ稍溫和ノ傾向ヲ有シ、五月四日ノ同紙上ニ於テ、日露交戰ノ利害ヲ說キ、三國共同干涉ニ論及シ、末段ニ至リ愛國主義ニ二種ノ別アリ、一ヲ奮激ト自愛ノ情深ク、急遽ナル決斷ト浮躁ナル行爲ヲ有シ、他ハ一問題ヲ決スルニ方リ、必ラズ沈思默考シ、未來ニ起ルベキ危機ト現在ニ於ケル政略上ノ變動ヲ豫察シ、賢明ナル斷案ヲ下スニ在リ。第一種ノ愛國者ハ輕躁ニシテ激昂シ易ク、「我名譽ハ毀損セラレタリ」「我ニ軍艦二十二隻アリ」「開戰スベシ」抔ト只ダ絕叫スルコトノミヲ知リ、若シ露國ノ準備完全ナラザルトキハ如何。若シ日本ガ露國ヨリ强カリシ場合ニ如何ナラン等ノ疑問ニ至テハ恬トシテ之ヲ顧ミザルナリ。然レドモ第二種ノ愛國者ハ前後ノ利害得失ヲ審査較量シ、前記ノ疑問ノ如キハ先ヅ最初ニ其結果如何ヲ豫見スルコトノ必要ヲ認メ、今日露國ニ於テ未ダ充分ノ準備ナキモノトセバ、斯ル暴進ヲ爲スハ頗ル危險ナルヲ以テ、若シ日本ガ三國ノ勸告ヲ拒絕シタランニハ、露國ハ先ヅ退イテ絕東ノ現領土ヲ保チ、其根據ヲ充分ニ鞏固ナラシムルノ策ヲ執ルニ如カズトノ意見

ヲ有ス。是レ寧ロ眞正ノ憂國者ナルベシ云々ト論結セリ。」其他ノ大小諸新聞ニ至リテハ概ネ前記ノ諸新聞ト大同小異ノ記事論說ヲ揭ゲタレドモ、獨リ「ネデリヤ」新聞ノミハ全ク之ト意見ヲ異ニシ、四月廿八日ノ紙上ニ於テ、三國ノ共同干涉ヨリ說起シ、露國諸新聞ノ激昂シタル情態ヲ敍述シ、世人ハ輕躁ニモ日本ト交戰スベシ云々ト喧傳スレドモ、絕東ニ於ケル戰爭ハ露國ニトリ最モ謹戒ヲ要スル重要錯雜ナル一大問題ナリ。抑モ今回ノ事タル、全ク露國ガ日本捷戰ノ結果ヲ見大ニ嫉妬ノ念ヲ生ジタルニ起因スルコト實際疑ヲ容ルベカラズ。日本ハ勇敢ニモ淸國ト戰鬪シ、容易ニ勝利ヲ博シ、露人ガ曾テ想像ニダモ畫カザリシ讓與ヲ得タレドモ、露國ハ何故歟今日迄成ルベク淸國トノ戰爭ヲ畏避シ、「カシガル」ヲ返還シ、「クルジヤ」ヲ讓與シタルノミナラズ、「バミール」ノ一部ヲモ拋棄シ、氷結セザル港灣ヲ有セント欲スル宿望ヲ絕念シ、遂ニ浦潮ニ根據ヲ固ムルノ已ムヲ得ザルニ至レリ。故ニ今日ニ於テ我憂國者連ノ嫉妬ハ自然ノ情勢ニ出デ理由ナキニ非ズト雖ドモ、日本ノ新地位ハ未ダ露國ノ爲メ甚ダ危險ナリト斷定スルノ基礎ナシ。日本ガ近來驚クベキ長足ノ進步ヲ爲シ、朝鮮及淸國ニ對シ勢力ヲ有スルニ至リタルハ、是レ自然ノ結果ニシテ、之ヲ厭抑スルコト甚ダ難シ。況ンヤ絕東ニ於ケル露國陸海軍ノ勢力ハ未ダ不充分ニシテ日本ト交戰シ必勝ヲ期スルノ成算ナキニ於テヲヤ。露國ハ地廣ク人多シ、內治未ダ整頓セズ。國內事業ノ振起ヲ計ルベキモノ枚擧ニ遑アラズ。加フルニ馬關條約ハ隣地ノ敵手タル淸國ノ勢力ヲ削減シタルモノニシテ、露國ノ爲メ或ハ却テ利益ナラン。故ニ今日ハ先ヅ日本ノ欲スルトコロニ一任シ、他日ニ至リ之ト提携シ、東洋ニ於テ大ニ經營センコトヲ望ムハ最モ策ノ得タルモノナリ云々ト論結セリ。」

明治二十八年五月十三日

日清事件ニ就テ

千八百九十四年七月五日發行「デーリ・テレグラフ」所載

過日來朝鮮問題ニ關スル世論ノ多クハ報道ノ確切ヲ缺キ、爲ニ英國輿論ノ趨ク所ヲ誤ルノ感ナキニアラズ。此際ニ方リ事實ノ眞相ヲ指摘シテ獨リ此ノ問題ノ重要ナルノミナラズ、日、英ノ間ニ利害ヲ一トスルノ跡アルヲ闡明スルハ亦以テ有益ノ業ナラン歟。

抑々朝鮮ハ日本ノ附近ニ横ハル一王國ニシテ、面積凡ソ八萬方哩、人口凡ソ八百萬。土地豐饒ニシテ礦物果菜ニ富メドモ、文化未ダ至ラザルヲ以テ、之ガ採取ノ方法甚ダ拙ナリ。此國元來支那ノ藩屬ト稱スレドモ、全ク有名無實ノ事ニシテ、清政府ハ既往幾多ノ事件ニ於テ未ダ曾テ韓廷ノ爲メ責任ヲ竭クシタル無ク、事ノ外國ニ關スル者ハ一切其政權ヲ韓廷ニ委セリ。千八百八十五年ニ締結シタル日清條約ハ、兩國今日ノ位置ヲ判ズル眞ノ標準ニシテ、此ノ條約ニ依テ朝鮮王國ヲ兩帝國聯合保護ノ下ニ置ク事ヲ約シ、且兩國均シク交互知照ノ上、京城ニ兵ヲ派遣スルノ權利ヲ定メタルナレバ、今回ノ日本ノ出兵シタル理由ハ職トシテ朝鮮半島ノ平安ヲ維持シ、或ハ一歩進デ該半島ノ獨立ヲ保護スルニ與カルベキ、此ノ絶對權利アルニ存スル而已。近來韓廷ノ暴政膺行ハ爲ニ賤民ノ叛逆ヲ惹起セシガ、斯ノ如キハ每々ノ事ニシテ、其ノ都度抑壓的ノ處置ヲ以テ、能ク鎭定シ畢リシモ、今回ノ叛亂ハ其ノ氣焰熾ニシテ、往々居留ノ外人ニ累ヲ及ボスニ至リシナリ。然ルニ其ノ上ニ立ツ所ノ韓廷ノ現狀ヲ察スルニ曩ニ日本ニ逃亡シタル知名ノ國事犯人ニ對シテ密使ヲ派シ彼ヲ上海ニ誘出暗殺セシメ（支那當事者ハ之ヲ默許シタルガ如シ）支那船ニ依テ暗殺者及犯人屍骸ノ仁川ニ送致セラルヽヤ、韓廷ハ更ニ其ノ屍骸ニ極刑ヲ加ヘテ辱ヲ公衆ニ曝ラシ、暗殺者ハ名譽ヲ負フテ一宮殿ニ宿泊セシメラルルニ至リキ。則チ斯ル政府ガ內亂ノ爲ニ脅迫セラルヽ外人ヲ保護スルノ意志ナク又其ノ勢力ナキハ論ナキ所ニシテ、苟モ日本商民ニシテ朝鮮ニ居留スル者一萬二千ニ上リ、支那ハ僅々二千ニ過ギザルヲ考察シナバ、日本　皇帝ガ居留人民ノ生命財產ヲ保護シ、且ツ朝鮮ニ於ケル帝國ノ利益ヲ維持センガ爲メ、至急艦船ト軍隊ヲ派遣セラレタルノ行爲ヲ怪ムベケンヤ。然ルニ支那ノ軍隊及ビ艦船ハ已ニ其地ニ著シ、且之ガ理由トスル所ハ朝鮮ノ秩序安寧ヲ回復スルニ在ラズシテ、寧ロ事變ニ備ヘンガ爲メ軍隊ヲ內地ニ駐ムルニ在リキ。而シテ支那ノ外交官ハ葛藤ノ已レニ利アラザルヲ悟リ、俄ニ叛徒ハ討滅ニ歸シタレバトテ日本兵ノ撤回セン事ヲ要求セリ。日本ハ此ノ要求ヲ拒絶シ朝鮮ニ於テ先ヅ秩序ヲ回復スルノ必要ヲ說キ、今後斯ル叛亂ヲ再ビセザラシメンガ爲メ日、清相携テ共同監督ノ下ニ韓廷ノ施政ヲ改革セント反求シタルハ洵ニ適理ノ擧動ト稱スベシ。要スルニ今回日本ノ對清策ハ李、伊、條約ノ解釋上一モ間然スベキ點ナク、其ノ唯一ノ目的ハ半島內

ニ蔓延スル蠻野ノ組織ヲ改新セント欲スルナリ。蓋シ朝鮮現在ノ非政ヲ不問ニ措カン乎。遂ニ無政府ノ境界ニ陷ランノミ。而シテ是レ恐ラクハ輙チ同國ヲシテ、東亞ニ於テ日、清、英ノ均シク防衞セザルベカラザル一野心國ノ好餌タラシムルニ至ルベキナリ。

固ヨリ吾人ノ念頭ニ銘スル其野心國ト云フハ露國ナリ。已ニ知ラルヽ如ク露國ハ今回ノ事件ニ就テ日清共ニ兵ヲ撤回シテ平和ニ局ヲ結ブベキ旨ヲ主張シタレドモ、安ゾ知ラン此ノ平和ヲ主トスル露ノ干渉ハ冥々ノ中疑惑ノ點ノ存在スルヲ。何トナレバ李伯ガ千八百八十五年ノ條約ニ違背シテ、露ト密約ヲ結ビタリトノ確說中ニハ、現事態ニ係ル眞正ノ危機潛伏スル事明白ナレバナリ。蓋シ外交ハ秘密ヲ尙ビ、其ノ含蓄スル所ヲ曝露スル者ニ非ザレドモ、右ノ密約ハ疑モナク現問題ノ鍵タルナリ。今日露國ハ東亞ニ於ケル其ノ經綸ヲ發表スベキ餘力アル者ニ非ズ。先ヅ第一着ニ西伯利ノ鐵道ヲ竣成セザル可カラズ。同鐵道ハ近來工事ノ進歩ノ熱心セラレ、重ナル區域ノ竣成期限ヲ早メテ、千九百四年ノ代リニ千九百一年ト爲シ、又バイカル湖畔ノ線路ハ千八百九十八年中ニ竣工ヲ見ルベシ。左レバ支那ハ露ト益々國境ヲ接邇スル近況ニ就テ覺悟スル所ナカル可カラズ。而シテ今日露ノ邊彊ハ空乏ノ地多キニセヨ、新ニ幾萬ノ哥撤克兵ヲ移植スルハ容易ノ業ナラズヤ。一旦此機熟セバ支那ハ露ノ南下策（卽チ手ヲ朝鮮ニ伸バス事）ニ對シテ到底朝鮮ヲ防禦スベカラザルヲ知ル。而シテ露ハ朝鮮東陸ノ永興港（日、清之ヲ元山ト通稱ス）ニ流涎スルヤ久シ。若シモ此ノ海港ニシテ露ノ手ニ入ラン乎、是レ露ノ亞細亞艦隊ニ氷結數月ニ亙ル浦潮ニ反シテ、年中開通ノ良軍港ヲ與フル者ナリ。是レ支那ニ自國ニ利益アル條約ヲ聖彼得政府ト結ブノ機會ヲ供スル者ナリ。而シテ日本ニ向テハ如何ニ。是レ正ニ日本海岸ヲ距ル數時間ノ航程內ニ巍然タルセバストポールヲ築出シ、日本海軍及通商ニ對シテ殆ド致死的ノ打擊ヲ下ダス者ニ非ザル莫カランヤ。曩ニ京城駐劄ノ露公使（代理公使）ハ第一着トシテ浦潮、永興間ノ海底電線沈設ニ盡力シタリシガ、其事竟ニ果シ得ザリシモ、露政府ガ朝鮮境內ニ足場ヲ鞏ムルノ素志ハ決シテ之ヲ放棄スル者ニ非ズ。現ニ昨日接手シタル在露京通信者ノ一封ハ、今回ノ日清事件ニ關シ露ハ決シテ許容スベカラザル性質ノ要求ヲ提起セシ由ヲ報ゼリ。斯ノ如ク一方ニ於テ日本ハ日清條約ノ規程ヲ遵守シテ飽クマデ朝鮮保護ヲ精神トシ、其ノ內政ヲ改革シ、露ノ蠶食ヲ免レシメント欲スルノ外、他ニ要求スル所ナキニモ拘ラズ、支那ハ日英ノ利益ニ反對スル陰謀ヲ抱テ、日清條約ヲ無視シ、朝鮮ヲシテ再ビ無政府ノ位置ニ陷ラシメントス。思フニ半島國ニ事物ノ良秩序ヲ打建テ支那ト提携シテ外部ノ野心ヲ抑ヘ、半島ノ安全ヲ維持スル事ハ、是レ日本政府ニ取リ寧ロ自衞自全的ノ任務トス。若シ支那ニシテ能ク獨リ半島國ヲ防衞スルヲ得タラバ、日本固ヨリ之ヲ甘諾スルナランカナレドモ、衆目ノ見ル如ク李伯政府ハ外交上ニモ又實力上ニモ決シテ斯ル重要ノ任務ヲ負擔シ得ベキ者ニ非ザレバ、日本ハ敢テ進デ之ニ任ゼシナリ。今ヤ日本ハ充分ノ兵力ヲ有ス。看ヨ其ノ海軍ハ已ニ贊嘆ヲ博スベキ程整頓シテ、大約一萬ノ將校兵員

ヲ以テ充備シ、尙ホ益々擴張ノ運命ヲ有ス。又陸軍ハ軍紀振肅、士卒勇敢一旦事アレバ二十五萬ノ精練兵ヲ發差シ得ベシト云フ。加フルニ對馬ノ外營ハ朝鮮ノ半日航程內ニ位ス。東京政府ハ如何ナル困難ヲ凌デモ千八百八十五年年ノ條約ヲ無ニシ、或ハ朝鮮ヲ虎口ニ投ズルヲ許サザルベキハ是レ實ニ疑ヲ容レザル所ナリ。

固ヨリ日淸間ニ衝突ナキハ尤モ希望スベキ所ナルモ、我ガ英國外務省タル者能ク事實ヲ按ジテ籌畫スル所ナクシテ可ナランヤ。曩ニ英國ハ巨文島ヲ放棄シタリ此ノ良海鎭、良海港ヲ決意放棄シタル所以ノモノハ偏ニ露國ガ今後日本海ニ於テ海港ヲ握ルノ企ヲ爲サズトノ明約アリシガ爲ナリ。

此故ニ今回ノ事件ニ會シ、英國ノ當ニ取ルベキ政略ハ卽チ名譽ト利益ヲ楯ニシテ、彼ノ朝鮮ノ獨立ヲ妨害スベキ危險、姦謀ニ向テ飽マデ該半島ヲ擔保セント欲スル日ノ正義ノ擧動ヲ支フルニ在ルベキハ昭々乎トシテ明ニ、而シテ現問題ニ於ケル支那ノ眞正ノ利益ハ、日、英ノ利害ト全ク一致スルヲ知ルベシ。倫敦駐劄ノ日本公使ハ此ノ事件ニ係ル或人ノ問ニ答ヘテ、本國政府ノ政略ヲ最モ肯繫ニ說示セリ。今其ノ要旨ヲ括約セバ、曰ク、日本ノ目的ハ朝鮮ノ施政ヲ改革シ、同國ニ於ケル日本ノ權利ヲ自衞スルニ在リ。日本ハ半島王國ノ安全竝ニ其ノ隣邦ニ於ケル平和ノ維持ノ外他ニ何ノ求ムル所モ無シ。日本政府ハ支那政府ニ向テ相共ニ朝鮮ノ施政ヲ改革セント勸說セリ。日本ハ王國腐敗ノ現狀ニシテ改ムルナクンバ、常ニ內憂外患ノ絕ツベカラザルヲ知ル、故ニ若シ支那ガ日本ノ厚意ヲ容レ、相携ヘテ所要ノ改革ヲ施スニ非ズンバ、日本ハ獨力ヲ以テ所要ノ改革ヲ斷行センノミト。サワレ超然夙ニ泰西ノ制度ヲ同化シタル日本帝國ガ、東洋方面ニ獨リ赫々文明ノ風光ヲ發揮スルヲ誰人カ疑フ者ゾ。日本政府ノ現對韓策ハ英國ノ利益ト反撥スル形跡一モ之レ無キナリ。若シ夫レ日淸間ノ衝突竟ニ免レザラン乎。是レ之ヲ稱シテ亞細亞ニ於ケル進步ト守舊ノ衝突ト謂フベシ。而シテ若シ露國ニシテ朝鮮海港ヲ占領スベキ支那ノ同意ヲ得ル事モ有ラバ我英國ハ更ニ他ノ艦隊ヲ增派スルノ覺悟ナカル可カラズ。敢テ問フキムバーレー卿ヲ襲ハレシ、ローズベリー卿ノ外交政略如何。我ガ當局者ニシテ朝鮮事件ノ成行ハ倫敦政府ニ於テ十分理會スルノ次第ヲ露淸兩國ニ知ラシムベキ、有ラユル手段ヲ盡サルルニ非ザレバ英國從來ノ先見ノ明ヲ忘却スルモノナラン歟。

清國媾和使節會談記要

第一回會談ハ二月一日廣島縣廳階上應接室ニ於テ開カレ我ガ出席者ハ全權辨理大臣伯爵伊藤博文同子爵陸奥宗光　內閣書記官長伊東巳代治　外務書記官井上勝之助　外務大臣秘書官中田敬義　外務省飜譯官陸奥廣吉ニシテ清國側ハ、欽差全權大臣張蔭桓　同上邵友濂　參贊官伍廷芳　同上瑞良同上梁誠　飜譯官羅庚齡ナリ。張邵兩全權大臣以下、午前十一時ヲ以テ登廳、暫ク別室ニ於テ休憩セル後、井上外務書記官案內シテ應接室ニ入ル。伊藤辨理大臣以下先ヅ座ニ在リ、張邵以下室ニ入ルニ及デ、互ニ握手ノ禮ヲ爲シ、列席官亦紹介ノ事終リ、一同着席シタルハ既ニ十分時ヲ過ギタル頃ナリ。其會談ノ要旨左ノ如シ。

伊藤伯　（日本語ヲ以テ）　今日ハ先ヅ互ニ全權委任狀ヲ交換スルコトナルガ、誰カ通辯セラルル人アルカ。

（此時羅庚齡席ヲ進デ小官通辯スベシト云フ）。

張　　國書ハ唯ダ今携帶シ居レリ。

伊藤伯　然ラバ先ヅ拜見セン。

（此時黃絹ヲ以テ包メル卷物樣ノ書ヲ卓上ニ安シ、伊藤伯ノ一覽ヲ乞ヒ、伯頓テ繙閱シテ再ビ卓上ニ置ク、之レト同時ニ陸奥子亦一書ヲ出シテ、是ハ我ガ　皇帝陛下ヨリ余等ニ賜リタル全權委任狀ナリト告ゲ、羅庚齡ニ向テ貴下ハ飜譯シ得ルヤト問ヒタルニ、羅ハ然リト答フ、陸奥子ハ尤モ英譯文モアリト云ヒ、伊藤伯ハ英譯文ヲ取リテ伍廷芳ニ示サル）

伊藤伯　（彼ノ所謂國書ヲ指シテ）是レガ全權委任狀カ（別紙第一號參照）

張　　（伍代リニ云フ以下概ネ皆然リ）國書ナリ。卽チ Credential ナリ……昨日賜リタル二通ノ尊翰ハ確カニ受領セリ。其時貴全權委任狀ノ寫ヲモ拜受シ夫々答復シ置キタリ。

（此間伍ニ於テ少シク誤解アリシモ、羅ガ日本語ヲ以テ通譯シタルニ因リ、二通ノ公文ノ一ハ任命通知、他ノ一ハ本日兩國全權大臣會合シテ其委任狀ヲ交換スルコトノ通知ナリシコト判明セリ）

伊藤伯　貴國ノ全權委任狀ハ如何。今一閱シタルモノハ國書ト云ヘルニアラズヤ。

張　　全權委任ハ國書中ニ包含シ居レリ。

陸奥子　（張ノ語絕ユルヤ否ヤ）此ノ全權委任狀ノ外ニ猶覺書ヲ作リ置キタレバ、之ニ對シテ速カニ回答セラレタシ（別紙第二號參照）

伊藤伯　（張ト伍ニ向ヒテ）貴國ハ近來ノ國際法上ノ慣例ヲ踐マザルモノナリ。凡ソ國書ト委任狀トハ別異ニシテ同物ニアラズ。卽チ國書トハ和交ノ存續スル時ニ於テ、一ノ帝王ヨリ他ノ帝王ヘ使臣ヲ送ルニ當リ Accredit スル爲ニ用ヒ、其國ノ帝王ニ謁見ヲ許サル、時捧呈スルモノヲ云フ。而シテ或ル特別ノ事件ニ付キ、特別ノ場合ニ於テスルノ full power ハ、通常和親國ノ間ニ行ハルベキ國書トハ其性質全ク異レリ。若シ閣下ガ和親ノ時ニ於テ我國ニ駐劄セラル、ナラバ、無論 Credential ヲ携帶セラルベキ筈ナレドモ、今日ハ現ニ兩國交戰中ニシテ、閣下ハ特別ノ目的ノ爲メニ、特別ノ任命ヲ帶ビテ前來セラレタルナレバ、卽チ特別ノ委任ヲ確認スルノ必要アリ。

張　閣下ガ特派大使トシテ我國ニ前來セラレタル時モ國書ヲ携帶セラレタリト覺ユ。別ニ全權委任狀ヲモ携ヘタルカ。

伊藤伯　素ヨリ國書ト全權委任狀ト二樣ニ携帶シタリ。當時余ハ北京ニ於テ拜謁ノ上、國書ヲ捧呈セントシタルモ、皇帝幼稚ノ故ヲ以テ謁ヲ賜ハラザリシカバ、余ハ遺憾ナガラ其儘携ヘ歸リ、其天津ニ歸リ、其天津ニ下リ李中堂ト會談スルニ當リテハ、乃チ全權委任狀ヲ互照シ、然ル後談判ヲ開始シタリ。之レ等行キ違ナカランコトヲ欲シ、昨日豫メ本日劈頭第一ニ全權委任狀交換ノ事ヲ申進置キタリ。

伍　然レドモ國書中ニ全權委任ノ事アレバ別ニ委任狀ヲ要セズト思考シタリ。

伊藤伯　既ニ述ブル如ク、國書中ニ如何ナル意義ヲ含メルモ、國書ハ和親國ノ間ニ於テ用ヒルモノニシテ、今日ノ如ク現ニ和親破レタル兩國間ニ特別ノ目的ノ爲メニ特別ニ派遣セラレタル使臣ノ携帶スベキモノニアラズ。今回ノ使命ニ於テハ互ニ特殊ノ全權委任狀ヲ以テ交換スル所ナカルベカラズ。

（此時張、伍、相私語ス）

張　國書ノミニテ事足ラントト思考シタルモ、是非トモ全權委任狀必要トアレバ、旅館ヨリ取寄スベシ。豫テ携帶シ居タルモ、其儀ニ及バラザント思ヒ只今懷ニセザリシナリ。

（此時伊藤伯ノ許諾ヲ得テ、梁誠委任狀ヲ齎シ來ル爲メ旅館洗心樓ニ赴キ暫時雜話ニ移ル）

伊藤伯　（伍ニ對シ）箇樣ノ不都合ナキ樣昨日態々書面ヲ以テ通知シ置キタルニ……

伍　實ハ自分ハ全權大臣ト同宿セザルヲ以テ、昨日貴翰ノ到來セルコトモ、此ノ席ニ來ルマデハ知ラザリシ。想フニ我全權大臣等ハ國書ニ於テ十分ナリト考ヘ居タラン。

（四五分時間互ニ語ナシ）

伍　前年天津ニ於テ拜別後御異狀ナカリシヤ。

伊藤伯　（微笑吹煙シ乍ラ）幸ニ健在、相變ラズ吹煙シ居レリ（Somking as usual）李中堂ハ其後

健全カ。氏ハ齡幾許カ。

伍　（點頭シテ）李中堂ヨリモ、芝眉ヲ拜スル時ニ於テ宜シク致聲セヨト申聞ケラレタリ。

中堂齡七十有三ナルモ、老健ニシテ食欲ノ如キ壯者ニ讓ラズ。

伊藤伯　羅典祿氏ハ起居如何。

伍　閣下ハ仍ホ羅典祿ヲ記憶セラルヽカ。彼亦幸ニ健全頗ル得意ナルガ如シ。

伊藤伯　（張ニ向ヒ）閣下ハ米國ニ在リシ由承知ス。

張　然リ。米國ニ公使タリシ。其赴任ノ途次貴國ニ來リ、閣下ノ一謁ヲ得、又閣下ヨリ李中堂ヘ贈與セラル、銃ヲモ一見スルヲ許サレタリ……徐公便ガ貴國ニ駐劄セル時ナリシ。

陸奥子　（張ニ向ヒ）米國ヨリ歸國ノ後再ビ外國ニ赴カレタルカ。

張　否何レヘモ出デズ……

陸奥子ト米國ニ於テ分袂シタルハ、鐵道停車場ナリシト記憶ス。

陸奥子　華盛頓ヨリ紐育マデ偶然同車シタリキ。

張　（陸奥子ニ向ヒ）閣下ハ其後外務省ニノミ在リシト覺ユ。

陸奥子　否二三省ニ出入シ、最後ニ閣下ガ總理衙門ニ入ラレタル頃ヨリ余ハ引續キ現職ニ在リ。

張　（陸奥子ニ向ヒ）閣下ハ衆望ニ副フノ快事業ニ終ラレ、實ニ欽羨ニ堪ヘズ。我國モ何ノ日カ其ノ如クセンコトヲ欲ス。

（陸奥子微笑シテ答ヘズ）

伊藤伯　當今總理衙門ノ首座ハ何人ナルカ。

張　恭親王ナリ。

伊藤伯　慶郡王ニハアラザルカ。

張　慶郡王ハ副ナリ、首座ニアラズ。

伊藤伯　恭親王ノ齡幾許カ。

張　六十三才ナリ。

伊藤伯　然ラバ李中堂ヨリ少キコト十年ナリ。

張　然リ。

（凡ソ十分間語ナシ）

伊藤伯　上海ヨリ長崎マデノ航海ハ格別困難ナラザリシカ。

張　少シク荒レタルモ格別ノ困難ヲ感ゼザリシ。余等ハ先月十一日起程シ（何レヨリトモ指サズ）山海關ヨリ鑛道ニ依リテ塘沽ニ出デ、同所ヨリ汽船ニ便シテ上海ヘ向ヒタレバ、案外日子ヲ費サザリシ。若シ天津ヨリ陸行セバ芝罘ニ達スルマデニ二十日間ヲ費サザルヲ得

ズ。且氣候モ稍同ジケレバ左マデ艱苦ヲ感ゼズ。

伊藤伯　北京ノ氣候ハ寒甚シカラン。人民生活ノ狀況全ク相同ジカラザレバ……

張　北京ノ寒氣ハ甚シト雖ドモ、貴國ニ接近セル地方ハ氣候概ネ同ジ。

陸奥子　旅館ハ貴意ニ適スルヤ否ヤ。

張　厚意多謝ス。殊ニ清潔ニシテ甚ダ好適ナリ。

伊藤伯（張ニ向ヒ）閣下ノ故鄉ハ何地ナルカ。

張　廣東省ナリ。

伊藤伯（邵ニ向テ）閣下ハ何レカ。

邵　浙江省ナリ。

伊藤伯　李經芳氏ノ近狀如何。

張　彼レハ丁喪ノ爲メニ其ノ生地ナル蕪湖ニ歸リ、今尙ホ閑居ス。

張（陸奥子ニ向ヒ）曾テ李經芳ヲ閣下ニ紹介シタリト記憶ス。彼ハ久シク貴國ニ駐劄公使タリシ。

陸奥子　氏ガ公使トシテ我ガ國ニ在リシハ短日月ナルモ、氏ハ神戸其他ニ客遊セルコト寧ロ長クシテ能ク日本語ニ通ゼリ。

張　余ハ李經芳ノ如キ人ノ閑散ニ居ルヲ惜ミ、我政府ニ推薦シ置キタリ。今日ノ如キ國家危急ノ場合ニ於テハ殊ニ人材ヲ要スルコト切ナルヲ應ズレバナリ。

（十分時間程亘ニ語ナシ。此時梁誠ハ二個ノ黃絹ニ包メル文書ヲ携テ室ニ入リ、恭シク張ニ渡シ、張ハ之ヲ伊藤陸奥兩全權大臣ノ面前ニ置ク）

張　委任狀ハ二通ナルモ、是レ余ト邵ト各自ニ與ヘラレタルモノニシテ一字一句ノ異同ナシ。

（別紙第三號參照）

陸奥子　全權委任狀ハ本書ヲ交換スルカ又ハ……

張　兩閣下ノ携ヘラルヽモノハ本書ナルカ。

伊藤伯　然リ本書ナリ（此時自ラ委任狀ヲ披展シ、恭シク　至尊陛下ノ御署名ヲ示サル、張モ亦其意ヲ領シテ捧載シテ敬意ヲ表ス。）

張　本書ノ交換ニテモ差支ナシト雖ドモ、事落着セバ返付セラルヽカ。

陸奥子　返付ヲ望マルヽナラバ、落着ノ上ハ如何樣トモ……

伊藤伯　交渉ノ事件ノ兩國全權大臣ノ手ニ存スル間ハ、委任狀ヲ交換シ置カザル可カラズ。是レ其通法ナレバナリ。而シテ事終局セバ貴需ニ應ジテ本書ハ直ニ返付スルモ宜シ尤モ……

陸奥子　本書ヲ返付スル場合ニハ謄本ヲ取換ハスヲ要ス。

張　事落着ノ上ハ證書ヲ取戻スハ我國ノ恒例ナリ。

伊藤伯　否貴國ノ恒例タリト云フコト余之ヲ信ズル能ハズ。余曾テ全權大使トシテ貴國ニ前往シ、李中堂ト談判シタル時李中堂ノ全權委任狀ハ其儘携ヘ歸レリ。

（此ノ時張ノ通譯者タル伍廷芳ハ呆然タリシ）

陸奥子　先ヅ互ニ全權委任狀ヲ交換シタル上ハ、提出シ置キタル覺書キニ對シ本日中ニ何分ノ酬答アリタシ。

張　承知セリ。何レトモ回答スベシ……

今回貴　皇帝陛下ハ謁見ヲ許サルヽカ。

伊藤伯　今ノ場合ニ於テハ謁見ヲ許サレズ。謁見ハ平生和親ノ存續スル時ニ於テスルコトニシテ、現ニ交戰中ノ貴國ノ使臣ガ特別ノ使命ヲ啣デ前來セラレタルニ付キ謁見ヲ許サルベキ謂レナシ。

張　假令和議成ルノ後ト雖ドモ今回ハ謁見ヲ許サザルカ。

伊藤伯　此度閣下等ハ特別ノ事件ノ爲ニ簡派セラレタルモノニシテ、其商議ノ成否如何ニ拘ラズ、敵國ノ使臣ニ謁見ヲ許サルヽコトナシ。

張　然ラバ國書ノ本書ハ此儘携ヘ歸ルベシ。但別ニ謄本ヲ用意シ居レバ之ヲ差上ゲ置カン。

陸奥子　覺書ニ對スル回答ヲ得テ後チ、更ニ第二回會談ノ時日ヲ決定セン。

張　最早今日ハ是マデニテ開談セザルカ。

伊藤伯　覺書ノ回答ヲ得ルマデニハ開談セザルベシ。

（此時張邵ハ今後會見ノ節ハ今日ノ如ク毛衣卽チ制服ヲ着スルコトヲ略シタシト乞ヒ、伊藤伯ハ开ハ貴意ノ隨フママナリト答ヘラル）

（談判ハ右ニテ一先ヅ休止トナリタルガ、梁誠ハ伊藤伯ニ對シ英語ヲ以テ左ノ如ク云ヘリ。曰ク、特ニ閣下ノ注意ヲ乞ヒ度キハ、昨夜來數回暗號電信ヲ發セントシテ電信局ニ依賴スルモ發信ヲ許サレズ。或ハ暗號タルノ故ヲ以テ然ルヤモ知ル可カラズト雖ドモ、其文意タル專ラ兩國ノ平和ヲ回復スルヲ望ムニアリ。通信ノ事柄亦皆之ニ關スルモノニシテ。決シテ他事ニ涉ラズ。唯ダ暗號ヲ使用スルハ本國總理衙門ニ達スルマデノ間、新聞紙或ハ其他ニ漏洩ヲ防グ爲メノミ、願ハクハ特ニ發信ノ自由ヲ許サレンコトヲ云々）

伊藤伯　或ハ然ル事情モアランカ、貴國ノ如キハ釁端未ダ啓カザルモ、危機一髮ノ際ニ當リテハ、在北京公使公使館ヨリ發スル暗號電信ハ一切杜絕セラレタリ。況ヤ今日ハ和親破レテ現ニ交戰中ナレバ、和親ノ日ト同論スベカラズ。今余等ハ閣下等ト一堂ニ會見スルモ、和親國ノ使臣ヲ以テ視ズ。却テ敵國ノ使臣ヲ以テ見ザルヲ得ザルハ、閣下等亦之ヲ諒トセザルベ

カラズ。左レバ閣下等ガ我國ニ在テ通信セントセバ、我ノ承諾ヲ得ザルベカラズ。貴國ハ和親將ニ破レントスルノ際ニ於テモ、不法ニ其發信ヲ止メラレタルナレバ、今日交戰中ノ形勢ニ於テ、我ノ閣下等ノ暗號電信ノ發送ヲ許サヾルハ決シテ不當ニ非ズト信ズ。

張　未ダ交戰ニ至ラザル時ヨリ、在北京貴國公使ヨリノ發信ヲ禁メタルコトハ果シテ信カ。余ハ少シク疑ハザルヲ得ズ。尤當時余ハ外ニ出テ北京ニ居ラザリシ故ニ、其事實ナルヤ否ヤヲ知リ難シ。兎ニ角余ガ北京ニ歸リタル後ハ各國公使館トモ均シク暗號電信ハ公許シアリ。

伊藤伯　閣下ノ云ハル、所ハ中立國ノコトナルベシ……中立國ニ對シテハ我國トテモ同樣ナリ……閣下等先ヅ日清兩國間ハ交戰中ナルヲ記憶セヨ。其平和ノ時ニ當テ平和ノ交際アル何ゾ言ヲ待タンヤ。

張　余等ハ現ニ其ノ平和ノ回復ヲ求ムル爲ニ前來シタルニアラズヤ。

伊藤伯　假シ平和ノ回復ノ爲ニモセヨ、目下兩國ハ交戰中ナルヲ如何セン。

張　電信ハ暗號ナルモ平和ノ爲メノ外ニ出デザレバ……

伊藤伯　事柄ノ如何ハ敢テ問フ所ニアラズ。今日ノ形勢ニ於テハ斷ジテ許諾シ難シ。若シ强ヒテ望マル、ナラバ、其暗號ヲ明白ニ開示セラレタシ、然ラバ許諾スルモ敢テ差支ナシ

張　暗號ト云フモ、實ハ單ニ余ト本國政府トノ間ニ用ヒルモノニシテ、且其符號帳ハ極メテ大冊ナルヲ以テ容易ニ謄寫シ難シ。

陸奥子　謄本ヲ製シテ渡ス能ハザレバ到底許諾シ難シ。

張　本日ハ是マデニテ辭別シ、早速覺書ニ對シテ回答スルコトヽセン。

右ニテ散會ス、時ニ午後零時三十分。

一請和使ノ携帶セル圖書兩國全權大臣ノ委任狀竝ニ我提出ニ係ル覺書ノ寫ハ左ノ如シ。

第二回會談

二月二日午後五時ヨリ廣島縣廳階上應接室ニ於テ開カレ、出席者ハ日清兩國側何レモ前回ト同ジク、是日張邵以上水色淡茶色ノ衣服ヲ着ケタリ蓋シ略服ナラン。一同互ニ握手禮ヲ施シ其座席ニ就キタルハ定時ヨリ後ル、コト凡ソ二十分時ナリシ)

伊藤伯　昨日更換セル兩閣下ノ委任狀ヲ査竅スルニ、國際法上ノ慣例ニ從ヘル、所謂全權委任狀トシテハ實ニ不完全ノモノナルヲ發見シ、余ハ玆ニ述ベントスル如キ言明ヲ爲スノ止ムヲ得ザルニ至レルヲ深ク遺憾トス。(此時伊藤伯ハ左ニ載スル演述手稿ノ英釋シタルモノヲ執リ、起テ朗讀セラレ、後チ其手稿ヲ伍廷芳ニ與ヘ、伍ヲシテ張邵二大臣ニ通譯セシメラレ

タリ。）

本大臣ガ今同僚ト俱ニ將サニ採ラントスルノ處置ハ、論理上止ムコトヲ得ザルノ結果ニ出ヅルモノニシテ、其ノ責素ヨリ本大臣ニ歸スベキニ非ズ。

從來清國ハ殆ンド列國ト全然聯離シ、時ニ或ハ列國ノ社團ニ伍伴スル爲メニ生ズル所ノ利益ヲ享受シタルコトアルモ、其ノ交際ニ伴フ責守ニ至テハ往々自カラ顧ミザルコトアリ。清國ハ常ニ孤立ト猜疑ヲ以テ其ノ政策トス。故ニ其ノ外交上ノ關係ニ於テハ善隣ノ道ニ必要トスル所ノ公明ト信實トヲ缺クヤ宜ナリ。

清廷ノ欽差大臣ガ外交上ノ盟約ニ付キ公然合意ヲ表セシ後、却テ飜然トシテ之レニ調印スルコトヲ拒ミ、或ハ儼然已ニ締結シタル條約ニ向テ更ラニ明白ナル理由モ無ク、漫然之ヲ拒否セルノ實績一ニシテ足ラズ。

右等ノ實績ニ就テ之ヲ徵スルニ當時清廷ノ意中操持スルノ誠實ナク、其ノ談判ノ局ニ當レル欽差ニ至テモ復タ必要ナル權利ヲ委任セラレザルコト比々皆然ラザル無キヲ見ルベシ。

故ニ今日ノ事アル、當初ニ於テ我帝國政府ハ先ヅ既往ノ事實ニ鑑ミ、全權ノ定義ニ協ハザル清廷ノ欽差トハ一切談判ヲ避クルノ決意ヲ以テ、斷然媾和談判ヲ開クニ當リ、清廷ノ委任者ハ媾和締結ニ對スル全權ヲ有セザル可カラザルヲ以テ豫メ一ノ條件ト爲シタリ。而シテ清廷ハ此ノ條件ヲ恪遵シテ、其ノ全權者ヲ我國ニ派遣セラレタリトノ確然タル擔保ヲ認メ、我日本　皇帝陛下ハ本大臣並ニ同僚ニ委スルニ、清廷ノ全權者ト媾和ノ豫定條約ヲ締結シ、之ニ調印スルノ全權ヲ以テシ給ヘリ。

清廷ハ既ニ此ノ擔保ヲ爲シタルニ拘ラズ。兩閣下ノ委任權ノ甚ダ不完全ナルハ、清廷ノ意未ダ和ヲ求ムルニ切ナラザルコトヲ確認スルニ足ルベシ。

昨日此席ニ於テ交換シタル双方ノ委任狀ハ一見以テ其ノ輕輕ノ甚シキヲ知ル、殆ド批判ヲ俟タズト雖、玆ニ之ヲ指摘スルモ肯テ徒爲ノ業ナラザルヲ信ズ。卽チ一ハ開明國慣用ノ全權ノ意ニ適フモ、他ハ全權委任ニ須要ノ諸項幾ンド悉ク缺乏シタルコト是レナリ。加之兩閣下ガ携帶セラレタル委任狀ハ、閣下等ガ談判セラルベキ事項ヲ明ニセズ。又何等訂約ノ權利ヲ與ヘズ。且兩閣下等ノ所爲ニ對スル清國皇帝陛下事後ノ批准ニ付テモ一言スル所ナシ。之ヲ要スルニ閣下等ニ委ネラレタル職權ハ、本大臣及同僚ガ陳述スル所ヲ聞テ之ヲ貴政府ニ報ズルニ止マルモノト謂ハザルベカラズ。事既ニ玆ニ臻ル。本大臣等ニ在テハ此上談判ヲ繼續スルコト決シテ能ハザル所ナリ。

或ハ云ハン。今回ノ事ニ於テハ、敢テ從來ノ慣例ニ背キタルモノニ非ラズト。

本大臣ハ斷ジテ如此キ說明ヲ以テ足レリトスル能ハズ清國內地ノ慣例ニ至リテハ、本大臣素ヨリ之ニ容喙スルノ權ナシ。然リト雖トモ我國ニ關連スル外交上ノ案件ニ至テハ、清國特殊ノ慣例ハ國際上ノ法則ニ凌駕セラレ、裁抑ヲ受ケザルベカラザルコトヲ主張スベキハ獨リ本大臣ノ權利ナルノ

ミナラズ、又本大臣ノ義務ナリト信ズ。

抑々平和ノ克復ハ至重至大ノ事タリ。今再ビ輯睦ノ道ヲ啓カントセバ、固ヨリ之ヲ目的トシテ條約ヲ締結スルノ必要アルノミナラズ、其ノ互ニ締約スル所亦必ズ之ガ實踐ヲ期スルノ誠衷ナカルベカラズ。

媾和ノ事ニ關シテハ、我帝國ヨリ進ンデ清國ニ求ムベキ理由ヲ見ズト雖ドモ、我帝國ハ其代表セル開明ノ主義ヲ重ズルヲ以テ、清廷ガ至當ノ道軌ヲ履ミ、其ノ緒ヲ開クニ於テハ、之ニ應ズル義務アリト信ズ、然リト雖モ無効ノ談判、若クハ紙約ニ止マルノ媾和ニ參與スルガ如キハ、將來堅ク謝絶スル所ナリ。我帝國ハ一旦締約シタル所ノ條件ハ、必然之ヲ實踐スベキヲ明言スルト同時ニ、清國ニ向テモ亦此ノ如ク其履行ヲ確メザルベカラザルナリ。

此ノ故ニ清國ガ切實信誠ニ和ヲ求メ、其使臣ニ委ヌルニ現實ノ全權ヲ以テシ、且其締結セル條約ノ實踐ヲ擔保スルニ足ルベキ名望官爵アル者ヲ擇ンデ此ノ任ニ當ラシムルニ於テハ我帝國ハ更ニ談判ニ應ズルヲ拒マザルベシ。

（伍ガ伊藤伯ノ演述手稿ヲ通譯セル中、張邵二大臣ハ迭ニ密話シツヽアリ）

陸奥子　唯今伊藤伯ヨリ演述セラレタル次第ニ付、余ハ此ニ覺書ヲ提出セン。但シ英譯アレバ伍氏ヲ煩サントス（此時伍ハ覺書英譯ヲ受取リ備ニ通譯ス原文左ノ如シ）

節　略

大日本帝國政府ハ、東京駐劄及北京駐劄亞米利加合衆國特命全權公使ニ由テ、和ヲ講ズルニハ、和約ヲ締結スルニ足ルベキ全權ヲ帶有スル委員ヲ簡命スベキコトヲ屢々聲明スルヲ經タリ。

然ルニ本月一日大清帝國欽差全權大臣ヨリ、大日本帝國全權辨理大臣ヘ知照セラレタル所ノ命令狀ハ其ノ之ヲ發セラレタル所以ノ目的ニ對シ、極メテ妥當ヲ缺クモノト爲サヽルヲ得ズ。何ントナレバ、該命令狀ニハ普通ニ全權委任狀ニ缺クベカラザルモノト知ラレタル所ノ要素ヲ殆ンド具備セザレバナリ。

而シテ大日本帝國政府ノ所見ハ、今尙ホ前キニ亞米利加合衆國特命全權公使ヲ經テ聲明セシ所ト相異ナルコトアルナシ。因テ大日本帝國皇帝陛下ヨリ授與セラレタル、適當且ツ完全ナル全權委任狀ヲ帶有スル所ノ大日本帝國全權辨理大臣ハ、單ニ事件ヲ會商シ、總理衙門ヘ咨報シ、旨ヲ請フテ遵行スベシトノ命令狀ノミヲ帶有セラルル所ノ大清國欽差全權大臣トハ會議スルコトヲ肯諾スルコト能ハズ。

是ヲ以テ大日本帝國全權辨理大臣ハ、今回ノ會議ハ此ニ止メザルヲ得ズト宣言スルノ外ナキニ立至レリ。

明治二十八年二月二日　廣島ニ於テ

張　（伍代テ言フ以下概ネ同ジ）唯今伊藤伯ノ御演述ノ中「名望官爵アル者ヲ擇デ此任ニ當ラシムルニ於テハ」云々トアルハ直ニ本大臣ノ一身ニ對シテ不滿アル爲ニ此言アルカ。一應貴意ヲ問ハン。

伊藤伯　（冷笑シテ）然ラズ。

張　然ラバ今後派遣セラル、人ヲ云フカ。

伊藤伯　然リ。

陸奥子　事茲ニ至ル上ハ、何時發程セラル、モ貴意ノ隨マナリ。我方ニハ聊差支ナク且成ルベク鄭重ニ保護スル所アルベシ。閣下等ノ知ラル、如ク、當市ハ大本營所在地ナレバ、固ヨリ永ク閣下等ハ何レヨリカ速ニ便船ヲ求メラル、ノ外ナシ。兎ニ角長崎マデ汽船ヲ備ヘテ送ルベケレバ、同地ヨリ歸國セラル、ヲ便トス、其迄ノ煩勞ハ我等素ヨリ辭セザルナリ。

伊藤伯　長崎マデ赴カレナバ、同地ヨリハ上海定期航海船アリ、歸國ニハ至便ナリ。

邵　貴諭ノ如クナレバ今ハ如何トモ爲シ難シ。然レドモ仍一言センコトヲ欲スルハ、本大臣等ハ我皇帝ノ敕諭ニ由リ、貴國全權ト會同商議スルタメニ簡派セラレタルナレバ、本大臣等此地ヲ去ルニ於テモ、須ク我皇帝ノ勅許ヲ請ハザルベカラザルコト是レナリ。就テハ本大臣等早速北京ニ打電シ勅許ヲ得ルノ後ニ於テ此地ヲ發センコトヲ望ム。

伊藤伯　閣下等若シ貴皇帝ノ勅許ナケレバ荏苒此地ニ留マラントスルカ。元來兩閣下ハ全權ヲ帶ビテ會同商議スル爲ニ前來セリト云フニ、所謂全權委員ニシテ不完全ノモノナランニハ、會同商議スルノ要ナシ。既ニ此ノ如クナルニ於テハ、閣下等ハ速ニ發程スルノ外ナキモノニアラズヤ。

張　貴諭ニ依レバ全權委任不完全ナルヲ以テ、會同商議スルヲ得ズトセラル。然レドモ本大臣等ハ平和ヲ求ムル爲メニ來リタルモノニシテ、既ニ其目的ノ明白ナル以上ハ、今ヨリ在北京米國公使ニ打電シ、同公使ヨリ我政府ニ招議セシメ、閣下ガ不滿足トセラル、事項ヲ增補セバ可ナラン。

伊藤伯　貴諭ノ如ク談何ゾ容易ナランヤ。閣下ハ如何ニシテ直チニ全權ヲ完全ニスルコトヲ保證シ得ルカ。

伊藤伯　（伍ニ向ヒ）足下ハ國際法上ノ full power ハ如何ナルモノカハ熟知セラレン。而シテ全權委員ハ勿論皇帝ノ親署ヲ要スルモノタリ。既ニ然ルニモ拘ラズ、在北京米國公使ヲ介シテ、不完全ナルノ全權委任狀ヲ完全ナルモノタラシメント云フヲ得ルカ。元來本大臣等ハ米國公使ヲ經由シテ、十分ナル保證ヲ得、閣下等ノ全權ヲ有スルヲ信ジテ之ヲ接遇シタ

リ。然ルニ其全權委任ナルモノハ、保證ニ反シ國際法上ニ所謂全權委任ニアラズトセバ最早會談ヲ繼續スルヲ得ザルナリ。

張　兎ニ角此地ヲ發スル前ニ於テ、一應本國政府ニ打電シ、我皇帝陛下ノ勅許ヲ得ザルベカラズ。然ラザレバ余等ハ恣ニ歸國スルノ責ヲ負ハザルヲ得ズ。

伊藤伯　(伍ニ向ヒ)足下ヨリ兩閣下ニ此等ノ事理ヲ詳和セヨ。苟クモ全權大臣トシテ此ニ會見スル以上ハ、其全權ハ必ズ完全ナラザルベカラズ。而シテ其商議妥協セル事項ニ付テハ、直チニ平和條約ヲ締結シ、且ツ其條約ヲシテ實功アラシムルモノニアラザレバ、會同商議スルモ其詮ナキヲ以テ、斷然談判ノ繼續ヲ拒否スル所以ナリ。此ノ如ク互ニ一堂ニ會見スルニ於テハ兩閣下ハ清國ヲ代表シ、本大臣等ハ大日本國ヲ代表スルモノニシテ、卽チ國ト國トノ會同ナリ。然ルニ閣下等ハ貴皇帝ノ勅許ヲ得ザレバ此地ヲ發スルヲ得ズト云フモノヽ卽チ貴帝ト閣下等トノ關係ニ止マリ、事兩國ニ涉ラザル自意ヲ主張セントスルモノナルヲ思ヘ。

張　然レバ在北京米公使コロネルデンビーマデ電報スルヲ許サルヽカ。

伊藤伯　若シ北京米公使ヘ打電セントナラバ、在日本同國公使ヲ經由倚賴セバ可ナラン。

張　在東京米公使ニ打電シテ北京政府ニ轉達セシメヨト云ハルヽカ。

伊藤伯　然カスル方宜シカラント考フ。

張　余等ガ貴國ニ前來スルマデニハ、在北京米國公使ト我政府トノ間、往復數次ニ及ベリ。今其寫ヲ貴覽ニ供シ置カン。

(此時伍ヲ經テ漢文ノ謄寫ヲ伊藤伯ニ遞ス。)

伊藤伯　余モ亦我政府ト米國公使トノ往復中重モナルモノ一二ヲ朗讀セン。

(朗讀本文ハ略ス)

張　在北京デンビー公使ハ全權ハ圖書中ニ包含シアレバ足レリト言ヒ、北京政府ハ其如クシタルナラン。

陸奥子　米公使ハ何ト云ヒタルニセヨ。其事我ニ通知ナキ以上、我ハ米公使ニ對シテ果シテ全權ヲ帶ビタル人ナランニハ會見ヲ嫌ハズト云ヒタル一時ヲ固信スルモノナリ。

張　米公使ハ漢文ヲ解セザルヲ以テ、一々英譯ノ上示サヾルベカラザルヨリ此間此ノ如キ訛謬ヲ生ジタルナラン。

陸奥子　然レドモ明白ニ事ヲ議シ、事ヲ決ストアルヨリ觀レバ、一面北京政府ニ電達シテ旨ヲ請フノ意義ニアラズト解スルニ於テ何ノ不可ガアル。

張　貴國ノ異論點ハ一々北京ニ電達シテ旨ヲ乞フニアルガ如シ。果シテ然ルカ。

陸奥子　此期ニ及デ最早議論スルノ必要ナシ。即過刻貴閣ニ供シタル覺書ハ我ノ故障ノ要點ヲ擧示シタルモノナレバ、就テ熟讀セラル、ナラバ、直チニ我意ヲ解セラルベシ。

張　事既ニ茲ニ至レバ余等ハ早晩發程センガ、仍ホ一言辯明シ置カンコトヲ欲スルハ、事ノ訛謬ハ畢竟東京ト北京トノ電信ノ行違ニ起因スル是レナリ。結局余等ハ平和ヲ求ムルニ急ナルモ、貴國ノ要求ハ果シテ何邊ニ存スルカヲ知ラザルヲ以テ、先ヅ大體ヲ知ルノ必要アリ。而シテ一タビ大體ニ付キ知ルヲ得バ委任ノ範圍瞭然タルベシ。唯ダ其大體未ダ判明ナラザルニ於テハ一々電達シテ旨ヲ請ハザルヲ得ザルナリ

伊藤伯　貴國ガ近來國際法上ノ慣例ヲ重ンゼザルヨリ、事ノ此ニ至リタルハ深ク遺憾トスル所、凡ソ國ト國トノ間ニ這般ノ商議ヲ爲ストキハ、互ニ確然タル全權委員ヲ以テ之ニ臨マザレバ、會同商議スルノ要ナシ。閣下等ハ國際法上ノ慣例ヲ邈視シ、漫ニ大體ノ要求ヲ知ラズト云フモ、現ニ兩國ハ交戰中ニシテ、其媾和條件ノ如キ戰爭ノ進行如何ニ因リテ形勢變ゼバ、隨テ條件變ゼザルヲ得ズ。左レバ今ノ時ニ於テ使命ヲ啣デ前來スル者ハ、一タビ議熟サバ直ニ約ヲ訂スルノ全權ヲ有セザルベカラズ。然ルニ閣下等ノ言フ所ハ唯ダ我ノ意向ヲ窺測スル爲メノ如クシテ、口ニ平和ヲ求ムルノ功實ヲ言フモ、事ヲ議シ事ヲ決シ事ヲ行フノ權能ナキモノナリ。

張　兩閣下ノ全權委任狀ヲ閱スルニ、其未文貴帝ノ批准ニ關シ、其事正當ナルニ於テハ云々トアレドモ若シ不正當ト思惟セラル、時ハ批准セラレザルナラン

伊藤伯　最早議論スルノ要ナシト雖ドモ、貴意默シ難ク一言シ置カン。抑々批准權ハ君主ノ掌中ニ保有スベキモノナルヲ以テ、其批准スルト否トハ君主ノ特權ニ屬スト雖ドモ、苟モ兩國全權委員ノ議定シタルモノノ批准ヲ拒否スルコトハ、明白重大ノ理由ナカルベカラズ。然ラズシテ委リニ批准ヲ拒否セラル、コトナシ。故ニ批准ハ君主ノ權利ヲ重ジ、履踐セザルベカラザルノ正式トス。

張　我清國ハ此ノ如キ事柄ニ付キ、屢々外ニ使ヲ差遣セザルヲ以テ、自ラ國際法上ノ慣例ニ迂濶ニシテ、此行違ヲ致セリ。閣下少シク諒恕シテ可ナリ。

（此時伊藤伯微笑ヲ漏ス）

陸奥子　貴國ノ慣例ハ如何ナルニモセヨ。今ヤ兩國ニ涉ル事柄ハ宇内ノ瞻望スル所ナレバ、國際法上ノ慣例ニ從ハザルヲ得ズ。

伊藤伯　貴國ノ慣例ハ貴國内ノ慣例ニシテ、列國ノ慣例ニアラズ。凡ソ寰宇ノ間、國ト國トノ交際ニハ其法アリ。其例アリ。今貴我兩國案件ヲ商議スルニ於テ、貴國内ノ慣例ニ循由スルヲ得ザルハ想フニ閣下等モ了解セラレン。

伍　貴諭洵ニ然リ。然レドモ我國ノ平和ヲ求ムルニ專ラナルヲ諒セラレタシ。苟クモ然ラズシテ遠ク貴國ニ前來シ、使命ヲ齎ス所以ナケレバナリ。張邵二大臣亦國ニ在テ劇職ニ居ル人ナリ。

伊藤伯　今回ノ會同商議ハ實ニ事重大ニ屬ス。然ルニ兩閣下ノ全權ノ不完全此ノ如クナルハ、余ノ案外トスル所ナリ。其瑣末ニ至テハ措テ論ゼザルモ、主要ノ全權委任ニシテ茫漠捕捉スベカラザルガ如キハ、決シテ假借スルヲ容サズ。假令何等ノ隆位顯官ノ人ト雖モ相當ノ全權ヲ有セザルニ於テハ斷ジテ再ビ會見スルヲ得ズ。而シテ貴皇帝親ラ車馬ヲ旋サルヽニアラザレバ遂ニ商議スルヲ得ザルニ至ランカ。

陸奥子　來ル十一日長崎開帆ノ便船アリ。之ニ搭ゼラルヽナラバ可ナラン。當市ハ大本營所在ノ地故ナク敵國ノ使臣ヲ駐留セシムルヲ許サズ。閣下等ニシテ準備成ラバ明日若クハ明後日ヲ以テ、此地ヲ發セラレタシ。其ノ長崎ニ屆ルマデノ爲ニ我政府ニ於テ、豫メ一汽船ヲ用意シ置キタリ。

張　長崎マデノ汽船アラバ何日ニテモ差支ナシ。

伊藤伯　汽船ハ既ニ準備シ置キタレバ何時ニテモ貴意ニ應ジ解纜セシムベシ。閣下等ノ準備直ニ成ルカ。

張　明日ニテモ、明後日ニテモ發程ニ妨ゲナシ其行李ヲ理裝スル易々タリ。

（右ニテ散會時ニ午後六時四十分）

朝鮮事件ニ付キ日清ノ兵力ヲ論ズ

（倫敦デーリーテレグラフ抄譯千八百九十四年七月九日發刊）

嘗テ日本政府ノ雇聘ニ應ジ、近頃同國ヨリ歸朝シタル有名ノ海軍士官某、一日日本陸海軍ノ性質及員數ニ付キ左ノ如ク論ジ、併セテ支那ノ兵力ニ論及セリ。同海軍士官ハ久シク日本ニ在留シタルヲ以テ殊ニ此ノ感激スベキ人民ノ兵力ニ通曉ス。其話說中ニ曰ク、余ハ此ノ度日清兩國ガ朝鮮ノ事ニ付キ葛藤ヲ起スニ當テ支那ガ露國ニ仲裁ヲ依賴シタリトノ說ニ信ヲ置カザルモノナリ。支那ハ決シテ露國ト和セズ。且支那人ハ元來傲慢ノ人民ナレバ、露國ト協議シ、若ハ其補助ヲ乞フ如キ事ハ無カルベシ。又日本ニ付テ論ゼンニ日本ハ近來屢〻內亂ニ遭ヒタレバ頗ル軍事ニ慣ルヽ所アリ。去ル二十年來日清兩國ハ大ニ兵備ノ擴張ヲ圖リ、今日ニ於テハ兩國共ニ西洋式ヲ以テ陸海軍ヲ組織編制セリ。此ノ點ニ於テ支那ハ勵精西式ヲ採用セリト雖モ日本人更ニ其上ニ出デ、政體ノ組織ヨリ人民日常ノ事ニ至ルマデ西洋ニ模倣シテ改良スルコトニ務メタリ。抑日本ガ斯ノ如ク西洋ノ風俗ニ模倣スル所以ノ者ハ、唯ダ新奇ヲ好ムノ僻ニ由テ然ルニ非ズ。深思熟慮ノ上ニ出デタル事ニシテ、行政事務及其他ノ事項ニ於テ西洋諸國ガ自己ノ上ニ出ル事ヲ覺知シタルニ由ルナリ。譬ヘバ其洋服ヲ着シ洋帽ヲ被ルハ兵卒水兵及其他立働ヲ爲ス者ニ於テ此ノ服裝ノ最モ輕便ナルニ因リテナリ。今日日本ニ於テ戰爭起レバ日本人ハ其兵士ノ軍規精肅勇氣勃々タルヲ信任スルニ由リテナラン。朝鮮ハ日本海岸ヨリ半日ノ船路ニ在ル所謂一葦帶水ノ國ナリ。而シテ支那ハ一度其領地トナシタル國ハ寸地ヲモ之ヲ他人ニ讓ル事ヲ肯ンゼザル可シ。現狀ハ如何ナル有樣ナルヤ之ヲ知ラザレドモ、日清兩國ノ協同シテ之ヲ管理スルコトヲ相互ニ許セシモノノ如シ。蓋シ支那ノ朝鮮ヲ管理スベキ權利ノ言前ハ歷史ニ基キ、日本ノ言前セリモ更ニ上位ニ在ルガ如シト雖ドモ、元ト是レ確乎タル證據有リ、又タ論據有ルニモ非ラズ。而シテ日本ノ言前ハ三百年或ハ三十年前ノ歷史ニ溯リテ之ヲ求ムルヤ知ラザレドモ、畢竟戰ヲ以テ決スルニ非ザレバ其落著ヲ見ル事難カルベシ。

支那ノ陸軍ハ稍ヤ其數ヲ知ルニ苦シム。其ノ組織ハ無論完全ナラズ。其中稍ヤ訓練ヲ經タル者無キニ非ザレドモ其大半ハ紀律整ハズ。而シ良好ノ兵器ヲ所持スル者多ケレバ統率ノ法宜キヲ得バ用フルニ足ルト雖モ、適當ノ將帥ヲ缺クガ故ニ、整々堂々ノ戰ヲ爲スコト能ハズ。如此場合ニ臨メバ散逸シテ物ノ用ヲ爲サヽルベシ。然ルニ日本ノ陸軍ハ歐洲ノ軍隊ニ比シテ耻ヅル所ナク。平時ニ於テ諸科ノ兵ヲ合スレバ其數十萬ニ達スベク、而シテ徵兵ノ法ヲ用ヰ三四年間現役ニ服シ、夫ヨリ豫備役ニ移ルモノナリ。其常備兵組織ノ兵裝完全ニシテ事アレバ瞬時ニシテ戰ニ應ズベシ。兵士ノ體格ハ短小ナレドモ、堅强ニシテ健脚ナルノミナラズ能ク上官ノ命ニ服シ亦智勇有リ、兵器ハ日本陸

軍士官某ノ發明ニ係ル後裝銃ヲ用ヒ、又連發銃ヲ製造中ナリ。而シテ戰時ハ其兵數二十萬ニ增加スベシ。兵科中最モ薄弱ナル者ハ騎兵科ナレドモ日本ノ地勢騎兵ニ適セズ。併レドモ日本人ハ一日三十哩或ハ四十哩ヲ步スルヲ恐レザルベシ。軍馬ハ矯小ニシテ丈ケ十三ニ過ギザレドモ、能ク久シキ勞働ニ堪ユベシ。

日本人ハ軍隊ノ素養アリ。而シテ馬術ハ馬術學校ニ於テ教習シ、田野兵陵ヲ乘廻ルコトニ長ジ、軍隊ノ操練ハ絕エズ之ヲ行ヒ、秋季大演習ヲ爲スコト我英國及其他歐洲諸國ニ於ケルガ如シ、大砲ハ山砲及克兒伯野砲ヲ用ヒ、山砲ハ三頭ノ馬ニ引カシメ我國ニ於テ驢馬ヲ用フルガ如シ。而シテ實際演習ノ時ハ一分四十五秒ヲ以テ砲臺ヲ構成スベシ。又野砲ハ之ヲ丘陵ニ引上ゲテ或ハ壕ヲ越ユル其狀況日本人ハ恐怖ノ心ナキモノノ如シ。今日本人ノ軍人ニ適スル性情ヲ概言スレバ、東洋人ノ耐忍力ト佛國南部人民ノ勇敢トヲ併有スルモノト云フベシ。日本兵ハ數時間佇立セシムルモ嘗テ不平ヲ唱フルコト無ク、而シテ「進メ」ノ號令ヲ聞ケバ驚クベキ敏活ヲ以テ突進スベシ。又其ノ他ノ美質ハ能ク嚴格ノ規律ニ服從スルコトナリ。此點ハ恐ラクハ歐洲中多ク其比ヲ見ザルベシ。而シテ交戰中「打方止メ」ノ號令ヲ傳ヘラルヽトキハ、敵ト奮戰格鬪スル間ト雖モ忽チ之ヲ中止スベシ。士官ハ戰場ニ在テハ呼笛ヲ用ヒ、之ヲ以テ兵士ニ令ヲ傳ヘ、又軍隊休息ノ間ハ靜肅ニシテ曾テ喧噪スルコトナシ。「サージョンマリネール」氏嘗テ曰ク、日本兵ハ其行進ノ神速ナルコト伊國ノ「ベルサスリエクリー」ノ如シト。日本人ハ概ネ車ヲ推シテ遠距離ヲ行クコトニ慣ル、故ニ其四肢極メテ堅强ナリ。陸兵ノ食物ハ概ネ歐洲人ノ如クニシテ其米ヲ食フヲ以テ唯ダ異ナル所ト爲スノミ。其食物ノ調理法ハ簡便ナルヲ以テ、中夜ト雖ドモ直ニ之ヲ調フベク、而シテ場合ニ依リテ僅々三時間ノ眠ニ就ケバ以テ足レリトセリ。又衞生隊及輜重隊ハ能ク整理ス。日本陸軍ノ狀態斯クノ如クナルガ故ニ、日本人ハ之ニ依賴シテ戰ハント欲スルナリ。故ニ一旦支那ト交戰スルニ至テハ、其兵數ハ支那ニ劣ルベキモ日本軍ノ勝ヲ制スルコト疑フベカラズ。而シテ數年交戰ノ後結局ハ如何ナルベキカ。又支那ガ數百萬ノ兵ヲ戰場ニ持來スベキカハ別問題ナルベシ。

又玆ニ其海軍力ヲ揭ゲザル可ラズ。是レ實ニコノ成敗ヲ決スベキモノナリ。前記スル如ク朝鮮ハ一葦帶水ノ國ト雖ドモ、支那ニシテ若シ强盛ノ海軍ヲ有スレバ、日本ハ如何トモスル能ハズ。支那ハ自由自在ニ朝鮮ヲ掌握スベシ。然ルニ日本ノ海軍ハ比較的ニ强勢ナルト、支那ヲシテ朝鮮ヲ攻擊スルニ不便ナラシムルニ足ルトハ少クトモ初ニ於テ日本ニ勝利ヲ得セシムル傾向アリ。日本ノ陸軍固ヨリ精銳ナリト雖モ其海軍ノ兵員亦規律及膽力ニ於テ陸軍ニ劣ルモノ非ズ。日本ノ海軍ハ三十三隻ノ船艦ヲ以テ成リ、其中老朽戰ニ堪ヘザル者アリト雖ドモ、他ハ皆近世式ノ良艦ニシテ加フルニ水雷艇三十隻ヲ有ス。又運送船ハ日本郵船會社ノ商船ヲ用フレバ其數六十隻許ヲ得ルヲ以テ朝鮮ニ軍隊ヲ送ラント欲シ、之ヲ用フレバ直ニ其用ヲ便ズベシ。右ノ運送船長及機關長ハ歐洲人ヲ用フル

者モアレドモ、海軍ハ全ク日本人ノミヲ以テ組織セリ。而シテ右ノ商船中速力最モ大ナル者ハ十四節ニ達ス。海軍大臣ハ西郷伯ニシテ材幹アリ、中牟田中將亦有識ノ人ナリ。甲鐵艦ハ千八百七十九年「リード」氏ノ計畫ニ成レル軍艦扶桑ニシテ其製式我國ノ「ヘルキユール」號ノ小ナル者ナリ。是ヨリモ一層良好ニシテ戰鬪用ニ堪ユベキモノハ「ユルヘツト」形ノ艦ニシテ其數七隻有リ、其中二隻ハ稍ヤ大ナル者、他ノ五隻ハ小形ニシテ「ゼム」號ノ形式ナリ。安氏會社ニ於テ製造シタル「エスメラダ」形ノ巡洋艦二隻ハ速力十八節半ヲ有シ、十吋砲二門六吋砲六門ヲ備フ。此二艦ノ勢力ハ殆ド我「インペリユーズ」ニ比ス可シ。又海防艦三隻有リ皆排水量四千餘ニシテ六十六噸ノ佛國加氏巨砲ヲ備ヘ、四七伊砲若干ヲ備フ。又千代田ナル巡洋艦アリ、「グラスゴー」ノ製造ニ係ル。又吉野ト稱スル艦アリ、安氏會社ノ製造スル所ニシテ速力二十二節半ニ及ブト云フ、是等ハ皆良艦ナリ。

日本海軍ノ情勢ハ極メテ良好ニシテ水師準備ヲ令セシ時、航海ノ準備成ラザジ者ハ唯々二隻ニ過ギザリキ。而シテ今ヤ本國及外國ニ於テ新艦ノ製造ニ着手セル者數隻有リ、又日本軍艦ハ上甲板ヨリ艦底ノ龍骨部ニ至ルマデ極メテ清潔ニシテ、他ニ其比ヲ見ズ。且水兵ハ操練ヲナスニ擧動活潑ニシテ砲ヲ操作スルニ秩序整然トシテ、未ダ曾テ亂雜ヲ見ルコトナシ。又射擊ニ巧ニシテ距離ヲ測ルコトニ熟セリ。日本人ノ巨砲ヲ發射スルニ巧妙ナルハ殆ド佛國人ニ次グベク、概シテ其海軍ハ亞細亞的ニ非ズシテ歐洲的ナリ。水兵又陸兵ノ如ク規則正シク且從順ナリ。演習中ノ如キハ鋭意之ニ從ヒ、終夜砲ノ側ニ立テ倦ムコト無シ。嘗テ演習ノ際終夜艦務ニ從事セル爲翌朝端艇ニ駕シテ上陸シ、鐵道ノ架橋ヲ爆裂スルヲ命セラレタルコト有リケルガ、强雨中ナルニモ係ラズ、鋭意之ニ從ヒ他艦ノ端艇ト共ニ其職ヲ盡シ、歸艦ノ後一言ノ不平ヲ唱フルモノナクシテ毫モ倦勞セザルモノヽ如シ。而シテ海上ニ在テハ命令有レバ直ニ其職ニ就キ、午前一時ニ集合シテ端艇ヲ卸シ、反裝水雷ヲ布設シテ都府ノ攻擊ヲ努メタリ。此夜ハ殊ニ風雨烈シク、殆ド作業ニ苦シムト雖モ、其職ヲ執テ倦マザルコト恰モ日常ノ業ニ從フガ如シ。抑日本ノ歷史ハ悲慘ノ事多ク、而シテ之ガ爲メ自ラ國民ヲシテ寧ロ死スルモ耻辱ヲ受ケザランコトノ觀念ヲ懷カシムルニ至レリ。故ニ日本ニシテ朝鮮ニ干涉スル權利有リト爲シ、一度之ヲ決スル以上ハ戰ヲ辭セザルベシ。此四千萬ノ島國民ハ稍ヤ我英國ニ類似スル位置ヲ占ムルヲ以テ必ズ他ニ打擊ヲ加フルノ慨アルベシ。惟フニ日本ハ支那ト異リ陸軍或ハ海軍ニ於テ戰事上ノ過誤ヲ爲スコト無カルベシ。其膽力及豪氣ニ就テ云ヘバ、千八百八十五年露國ノ軍艦橫濱ニ於テ英國軍艦「アカメーン」入港シタル時砲口ヲ栓脫シ英艦ト戰ハントスル形勢ヲ顯セシニ、日本軍艦一隻露艦ノ側面ニ至リ、戰鬪準備ヲ爲シテ以テ其中立權ヲ侵害スルヲ抗拒セリ。玆ニ於テ露國軍艦ハ日本ノ輕ンズベカラザルヲ知レリ。何トナレバ其港ヲ以テ海戰ノ戰場ト爲スコトヲ許サヾレバナリ。又日本水兵ハ艦外職務ニ於テ鋭敏活潑ニシテ、支那人ノ如ク擧動痴鈍ナ

ルモノニ非ズ。日本支那共ニ露國ガ朝鮮ニ垂涎スルヲ知レリ。而シテ浦潮斯克ハ冬季ニ於テ氷結スルガ故ニ「ラゼール」ノ如キ一港ヲ得ント露國ガ渇望スルコトモ亦之ヲ知レリ。蓋シ露國ヲシテ朝鮮ヲ併有セシムレバ、日清ノ害固ヨリ大ニシテ、英國モ亦戰爭ニ於テ該方面ノ海軍力ニ不利ヲ見ルベシ。

日韓交渉略史

目　次

雲揚艦砲擊、日韓修好條約締結竝朝鮮屬邦論ニ關シ淸政府ト交渉ノ事（自八年九月　至九年二月）
修信使金綺秀來朝ノ事（九年五・六月）
修好條規附錄竝通商章程締結ノ事（自九年六月　至同八月）
始メテ釜山ニ我管理官ヲ置キタル事（九年十月）
開港地撰定等ノ事（自十年九月　至十一年二月）
帝國政府花房公使ヲシテ禮曹判書ノ書ヲ斥ケシメタル事（自十一年五月　至同十一月）
豆毛鎭ノ課稅停止ノ事（自十一年九月　至十二年一月）
元山、仁川開港談判竝徵稅償害ノ事（自十二年三月　至同九月）
花房代理公使辨理公使ニ昇任、修信使金綺秀來朝竝朝鮮政府米政府修好ノ求メニ應セサル事（自十三年四月　至同九月）
花房辨理公使謁見竝仁川開港ノ事（自十三年十二月　至十四年六月）

修信使趙秉鎬來朝稅則設定商議ノ事　（十四年十・十一月）
朝鮮國官制改革、花房辨理公使渡韓、稅則協定ノ前議ヲ繼ク事　（自十五年四月至同七月）
世子冠婚式ニ關スル祝賀ノ御親書御贈物ノ事　（十五年五月）
十五年京城事變ノ事　（十五年十月）
修信使朴泳孝等來朝ノ事　（自十五年十一月至十六年一月）
花房、竹添兩公使交任ノ事　（自十六年一月至同三月）
海底電信線架設條約締結ノ事　（自十六年十四月至同十二月）
朝鮮國貿易規則間行里程取極書及犯罪ノ日本漁民取扱條規結約ノ事　（十七年五月）
朝鮮內閣軋轢ノ事　（十七年十月）
塡補金返還ノ事　（自十七年十二月至十八年七月）
十七年京城變亂ノ事　（十八年六月七月）
護衞兵撤回ニ關シ朝鮮政府ヘ照會ノ事　（十八年）
朝鮮政府金玉均ノ引渡ヲ請ヒ我政府應セサリシ事　（十九年）
朝鮮人金玉均ノ本邦退去竝刺客池運永送還ノ事　（廿年）
朝鮮國歐米諸國ヘ使節派遣ノ事　（自十八年六月至廿三年一月）
日韓通漁規則訂約ノ事　（自十一年七月至廿五年一月）
日韓通商章程竝通漁規則改訂ノ事　（自廿二年六年）
元山防穀令ノ事　（自廿四年九月至廿六年十月）
朝鮮政府貨幣鑄造事業ニ關スル事　（自廿七年三月至同十月）
金玉金均謀殺、朴泳孝謀殺未遂竝朝鮮國臨時代理公使兪箕煥ニ關スル事

雲揚艦砲擊日韓修好條約締結竝ニ朝鮮屬邦論ニ關シ清政府ト交渉ノ事

八年九月ヨリ九年二月ニ至ル

維新ノ際、朝廷宗對馬守義達ヲシテ我國大政復古萬機親裁ノ事ヲ朝鮮政府ニ報告シ、尋交舊ニ依ランコトヲ通牒セシム。朝鮮ノ官吏專ラ舊規ヲ墨守シ、此書ノ例格ニ殊ナルヲ疑ヒテ之ヲ其政府ニ送達セズ。爾來外務權少丞吉岡弘毅ヲ始メ使員ヲ派スル八九回、前後八年ノ久キ務メテ辨疏懷柔ノ方法ヲ講セシモ、彼レ頑トシテ對ヘズ。遂ニ明治八年九月二十日我雲揚艦ヲ江華灣ニ砲擊スルノ擧アルニ至レリ。

是ヨリ先我雲揚艦長井上良馨海路測量ノ命ヲ奉ジ、既ニ朝鮮東南海ヲ經、將ニ西海ヨリ淸國牛莊

ニ及バントス。沿途淡水ヲ得ンガ爲メ月尾島ニ沿ヒ江華島ニ抵リ、小艇ヲ啣シテ川ヲ溯ラシム。傍ニ砲臺アリ、俄ニ我ニ向テ砲擊ヲ始ム。我艦應擊良久キ後、水兵二十二名ヲ上陸セシメ、奮戰ノ後遂ニ永宗城ヲ略取ス。敵死者三十五名生擒十六名我兵傷ク者僅ニ二名アルノミ。砲銃劍槍號旗等ノ分捕品ヲ本船ニ運搬セシメ、而ル後城ヲ火キ本艦ヲ轉ジテ長崎ニ歸リ、變ヲ東京ニ報ズ。

此ニ於テ我政府特ニ參議兼開拓長官黑田清隆ヲ特命全權辨理大臣ニ、議官井上馨ヲ其副大臣ニ任ジ、兵艦五艘ヲ率ヒ戒嚴シテ江華灣ニ至ラシム。明治九年一月六日右一行品川解纜、二月十日江華府ニ入リ、朝鮮國接見大臣判中樞府事申櫶及ビ其副官都總府副總官尹滋承ト會同シ、戊辰以來無禮ヲ我ニ加ヘタル事ヲ責メ雲揚艦砲擊ノ暴舉ヲ詰リ、國際上必要ナル修好條約ヲ結バン事ヲ提議シ、十日間ヲ期シテ局ヲ了セン事ヲ要求セリ。

維新以來我政府ノ朝鮮ニ對スル政略ハ專ラ舊交ヲ尋キ和親ヲ敦セン事ヲ望ムニアリ。故ニ彼レ我書ヲ斥ケ我理事官ヲ接セザルニモ拘ハラズ、常ニ平和ノ手段ヲ以テ良好ノ結果ヲ得ン事ヲ務メシナリ。然ルニ今回不幸ニシテ事此ニ至ルト雖モ、我國ノ政略ハ仍ホ依然平和ヲ主トスルニアリテ、此使節發遣ニ際シ之ニ與ヘラレタル訓令ニハ尙ホ此意ヲ失ハズ。彼能ク我和交ヲ修メ貿易ヲ宏ムルノ求ニ順フトキハ、卽チ此ヲ以テ雲揚艦ノ賠償ト看做シ、承諾スル事ヲ明ラカニ我使臣ニ委任セラレタリ。

斯クテ我使臣ハ開談辨論十有餘日ヲ經テ遂ニ和平ノ局ヲ結ビ、同月二十六日現行修好條約ヲ締結シ朝鮮ヲ認メテ獨立自主ノ邦ト爲セリ。

其第一欵ニ曰ク、

第一欵　朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ嗣後兩國和親ノ實ヲ表セント欲スルニハ彼此互ニ同等ノ禮義ヲ以テ相接待シ毫モ侵越猜嫌スル事アルヘカラス先ツ從前交情阻塞ノ患ヲ爲セシ諸例規ヲ悉ク革除シ務メテ寬裕弘通ノ法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠ニ期スベシ

朝鮮ハ清國ノ屬管タルガ如キ名アルヲ以テ、事或ハ清國ニ交渉セン事ヲ慮リ、我政府今回ノ使節ヲ朝鮮ニ派スルト同時ニ、森全權公使ヲ清國ニ遣リ事件ノ起因ト派使ノ趣旨トヲ清國政府ニ聲明セシム。其訓條ノ末段ニ曰ク、

但事隣竝ニ係ルヲ以テ大清政府ニ告クルニ此一案ノ起因ト我カ趣意ノ向フ所ヲ以テシ以テ我政府ノ大清政府ト誠ヲ推シテ隱スコト無ク悃誼ニナキノ主意ヲ表スルヲ須要トス使臣宜ク此意ヲ體シ辭命ヲ愆ルコト勿レ

森公使ハ右訓條ノ趣旨ヲ體シ、明治九年一月十日總理衙門ニ往テ王大臣ニ面會シ、口述ニ代ユルニ一ノ覺書ヲ作リテ之ヲ王大臣ニ示シ、本件ノ起因派使ノ旨趣及ビ事隣竝ニ係ルヲ以テ、我政府告グルニ實ヲ以テスル等ノ意ヲ通ズ。右對話中王大臣ヨリ「朝鮮國ハ我國ノ屬菅禮部衙門ニ隷ス」ト云

フヲ起因トシテ遂ニ屬邦ノ名實如何ヲ論究スルニ至レリ。而シテ其論究ノ結果彼ノ云フ所約左ノ數言ニ出デザルナリ。卽チ

「朝鮮ハ淸國ノ屬邦タリト雖モ其土地ハ淸國ノ所領ニ非ス故ニ內治外交共ニ其自主ニ任ス」ト云フニ過ギザルナリ。而シテ一月十四日王大臣ハ曩ニ森公使ヨリ示サレタル所ノ覺書ニ對スル一ノ覺書ヲ作リ、其末段ニ至リ修好條規ノ「所屬邦土不二相侵越一」トノ言ヲ守ランコトヲ望ム旨ヲ陳述セルヲ以テ、翌十五日森公使ハ一書ヲ總理衙門ニ送リ「既ニ內治外交其自主ニ任ズト云ハ、是則チ一ノ獨立國ナリ。貴國ノ之ヲ屬國ト謂ヘルハ徒ニ空名ノミ。因テ凡ソ事ノ朝鮮日本ノ間ニ起ル者ハ淸國ト日本トノ條約上ニ於テ關係スル所ナシ」ト斷言セリ。事頗ル重大ノ關係ヲ有スルヲ以テ今其顚末ヲ明カニセンガ爲メ玆ニ其照會往復ヲ列叙スル事卽チ左ノ如シ。

森公使ヨリノ照會

大日本國欽差全權大臣森照會ヲ爲ス事本大臣明治九年一月十日ニ於テ貴王大臣ニ晤會シ朝鮮約ニ背キ使ヲ拒ミ況ンヤ江華ニ在テ我船ヲ砲擊ス今我政府猶主和ノ使臣ヲ遣シ彼ニ往テ事ヲ問フ其仍前芥蔕シテ事ヲ憤ルヲ恐ルヽヤ本大臣ニ命シテ之ヲ貴國ヘ告ケ以テ兩國鄰竝ノ誼ヲ昭カニスル等ノ情ヲ詳述セリ貴王大臣ノ云フニ據レハ朝鮮ハ屬國ト曰フト雖トモ地固ヨリ中國ニ隸セス故ヲ以テ中國曾テ內政ニ干與スル無ク其ノ外國ト交涉スルモ亦タ彼國ノ自主スルニ聽セタレハ相强ユ可ラストノ語ナリ由是觀之朝鮮ハ是レ一ノ獨立スル國ニシテ貴國ノ之ヲ屬國ト謂ヘルハ徒ニ空名耳ミ彼既ニ鄰ト爲リ我ニ暴戾ヲ加フ而今使ヲ遣シ以テ之ヲ責メ且我國人民ノ爲メニ自ラ海彊ヲ保安スルノ義ヲ盡サヽルヲ得ス此ニ因テ凡ソ事ノ朝鮮日本ノ間ニ起ル者ハ淸國ト日本國トノ條約上ニ於テ關係スル所ナシ玆ニ本大臣事ニ臨ミ意ヲ決シ本國ヘ回明スル如此相應サニ文ヲ備シ貴王大臣ヘ照會シ查照セハ可也須ク照會者ニ至ルヘシ右

大淸欽命總理各國事務王大臣ヘ照會ス

明治九年一月十五日

總理衙門ヨリノ回答

大淸欽命總理二各國事務一和碩恭親王九大臣。　爲二照復一事。光緒元年十二月十九日。准二

貴大臣照會一件。以二日前

貴大臣來二本衙門一。議及

貴國欲二與二朝鮮一和好一各情一。謂本大臣曾有二地朝鮮雖一曰二屬國一。地固不レ隸二中國一。以レ故中國曾無レ干二預內政一。其與二外國一交涉。亦聽二彼國自主一。不レ可二相强一等語。本王大臣查。朝鮮爲二中國屬國一。隸卽屬也。既云二屬國一。自不レ得レ云不レ隸二中國一。且日前回二復貴大臣一。竝無不レ隸二中國一之說。修好條規內載。所屬邦土。朝鮮實中國所屬之邦之一。無二人不レ知。至中國向不二勉强一各情。已於二本月十八日一。其

復節略中。備言其義。今准

貴大臣照會。本王大臣仍應聲明。合照修好條規。所屬邦土不相侵越之意。彼此同守。不敢斷以己意謂於條約上無所關係。相應照會

貴大臣查照可也。須至照會者。

右　照……會ス

大日本國欽派駐京全權大臣森。

光緒元年十二月二十二日

森公使ヨリノ照會

大日本國欽差全權大臣森照會ヲ爲ス事明治九年一月十八日貴王大臣ノ覆文ヲ接准ス內ニ修好條規內ニ所屬邦土ト載セタルハ朝鮮ハ實ニ中國ヘ屬セル邦ノ一ナル事人ノ知ラサル無シ合サニ修好條規ノ所屬邦土不相侵越之意ヲ照シテ彼此同守シ敢テ斷スルニ己ノ意ヲ以テシ條約上ニ關係スル所無シト謂ハサルヘシ等ノ語ヲ稱シタリ本大臣實ニ未タ其意ノ所在ヲ明解スル能ハス因テ思フ貴王大臣條規ノ所屬邦土不相侵越之意ヲ引ク所以ノ者ハ蓋シ將來我國與朝鮮國交涉ニシテ凡ソ該國政府及其人民ヨリ我ニ向テ爲ス所ノ事有ルニ就テ卽チ貴國ヨリ自ラ其責ニ任スルノ謂ナル歟若シ自ラ其責ニ任スル能ハスト謂ハヽ屬國ト云フト雖トモ徒ニ空名耳ミナレハ則我國自ラ其理ヲ伸ヘサルヲ得ス條規ニ於テ何ノ關係スル事有ラン哉相應サニ貴王大臣ヘ照會ス希クハ卽チ明復セハ可也須ク照會者ニ至ルヘシ　右

大清欽命總理各國事務王大臣ヘ照會ス

明治九年一月十九日

總理衙門ヨリノ回答

大清欽命總理各國事務　王大臣

貴大臣照會一件。以本王大臣前此照覆未能明解其意。因思所引條規所屬邦土不相侵越之意。蓋就將來交涉。凡有該國政府及其人民所爲之事。卽任其責之謂。若不任其責。雖云屬國。徒空名耳。於條約有何關繫等情。查朝鮮爲中國屬國。中外共知。屬國有屬國分際。古今所同。本王大臣前次照會所稱。朝鮮寔中國所屬之邦之一。卽中國之自任也。豈得謂屬國爲空名。豈得謂於條約無所關繫。

貴國既與中國和好。訂明修好條規。理應彼此同守所屬邦土不可稍有侵越之約。前月十八・二十二・等日所覆節略照會。業已詳哉言之。所期於

貴大臣者。祇在按照修好條規所言永遠遵守不違。其用意甚平。其措詞甚顯。相應照復

貴大臣一竝查照可也。須至照會者。

右　照……會

大日本國欽派駐京全權大臣森

光緒貳年　正月　初肆　日

森公使ヨリノ照會

大日本國欽差全權大臣森。照會スル爲メノ事、明治九年一月廿九日貴王大臣ノ覆文ヲ接准ス內ニ朝鮮ノ中國ノ屬國タル事中外共ニ知ル屬國ハ屬國ノ分際アル古今ノ同キ所ロ朝鮮ハ實ニ中國ニ屬スル所ノ邦ノ一ニシテ卽チ中國之レ自ラ任スル也豈屬國ヲ空名ト爲スト謂フヲ得ン豈條約ニ於テ關繫スル所無シト謂フヲ得ン等ノ語ヲ稱ス本大臣查スルニ謂フ所ノ中國自ラ任スルノ一語言短ク意微ニシテ其自ラ任スル所ノ者果シテ何事モ實ニ猶未タ明カニ其意ヲ悉クス能ハス又屬國空名ナラスト謂フ而シテ其空名ナラサルノ實亦曾テ見サルニ似タリ又頻リニ兩國屬スル所ノ邦土稍々侵越アル可カラサル等ノ語ヲ以テ敎ヘラル是レ何ソ劇カニ侵越ヲ以テ言ト爲ンヤ此等ノ處本大臣實ニ未タ解スル能ハス又敢テ己ノ意モ自ラ解セス惟タ本大臣前次ノ照會ニ稱スル所ノ我國ト朝鮮國ト交涉ス其該政府及ヒ其人民我ニ向ヒ爲ス所ノ事貴國能ク自ラ其責メニ任スルヤ否ヤノ處其前後嘗テ未タ一ノ確斷ノ言ヲ獲サレハ則チ本大臣仍テ當サニ前次稱スル所ノ朝鮮ハ是レ一ノ獨立國貴國之レヲ屬國ト謂フモ亦タ徒タ空名而メ凡ソノ事朝鮮日本間ニ起ル者斷シテ淸國ト日本國トノ

條約上ニ於テ關係スル所無シト謂フ等ノ語ヲ以テ准ト爲ル耳仍テ貴王大臣ニ照會シ希フハ卽チ分別示復スヘクメ可ナリ須ク照會ニ至ルヘシ右大淸欽命總理各國事務王大臣ヘ照會ス

明治九年二月一日

總理衙門ヨリノ回答

大淸欽命總理各國事務王九大臣

爲

照復事。光緒二年正月初七日。接准

貴大臣照會。仍謂中國自任一語。未能明悉其意。屬國不空名之實。似不曾見。又以前引修好條規。謂可劇以侵越爲言。而以事起於朝鮮日本間者。於條約上無所關係等因本王大臣查。朝鮮爲中國所屬之邦。與中國所屬之土有異。而其合於修好條規。兩國所屬邦土。不可稍有侵越之言者則一。蓋修其貢獻。奉戒正朔。朝鮮之於中國。應盡之分也。收其錢糧。齊其政令。朝鮮之所自爲也。此屬邦之實也。紓其難。解其紛。期其安全。中國之於朝鮮。自任之事也。此待屬邦之實也。不肯强以所難不忍漠視其急。不獨今日中國如是。伊古以來。所以待屬國旨如是也。本王大臣照會所引不稍侵越之言。正以不侵越者。厚期於貴國。非劇以侵越爲言也。

貴大臣謂事起於朝鮮日本間者。斷爲與條約無與。則修好條規言之甚明。末能諱也。惟中國

之於貴國友邦也。鄰國也。朝鮮則中國屬國也。中國之望其相安無事則一也。今貴國之於朝鮮猶期無事。而與我中國先開辨難之端。揆之事理似非所宜。至於中國苟有可爲之處自由本王大臣早籌酌辨。以期彼此相安。正不待貴大臣再三言之也。相應照會

貴大臣查照。須至照會者

右　照……會

大日本國欽派駐京全權大臣森

光緒二年正月十八日

森公使ヨリノ照會

大日本國欽差全權大臣森照復ノ爲メニスル事明治九年二月十二貴王大臣ノ復文ヲ接准シ逐層閱悉セリ本大臣査ス前ニ朝鮮ノ一節ヲ論シ極メテ本國使ヲ遣シ以テ無事ヲ期スルヲ稱セリ夫ノ朝鮮ヲ原スルニ實ニ獨立ノ體ヲ具シ其內外ノ政令悉ク自主ニ由レハ我國モ亦自主ヲ以テ之ニ對ス是ヲ以テ該國自主ノ政令ヲ除クノ外其貴國トノ間ニ所有關係事理ハ我國決シテ顧及セス貴國モ亦條規中侵越等ノ字ヲ引テ我國ヘ加諸スルヲ得ズ故ニ所謂屬國トハ徒ニ空名ノミ凡ソ事朝鮮日本ノ間ニ起ル者ハ條約上ニ固ヨリ與カル無シト曰ヒシナリ今來文ヲ閱スルニ既ニ難ヲ紓ヘ紛ヲ解クヲ以テ中國自任之事トナシ復タ中國苟ニ爲ス可キノ處有レハ自ラ本大臣ヨリ早籌酌辨シ以テ彼此相安スルヲ期ス等ノ語ヲ稱ス是レ本大臣ノ隣國ヘ期望スル所ノ者ト正ニ相符合セリ曷ソ額慶セサランヤ現在本國已ニ欽使ヲ派シテ韓ニ往タレハ自ラ其成レヲ樂ミ觀ル可キナリ相應サニ貴王大臣ヘ照復シテ査照ス須ク照會者ニ至ルヘシ右

大清欽命總理各國事務軍機大臣協辨大學士兵部尚書沈　工部左侍郎成
頭品頂戴兵部左侍郎崇
軍機大臣大學士管理吏部事務寶
和碩親王文
軍機大臣大學士兵部尚書董
三品頂戴通政使司副使夏　戶部左侍郎郭　照會ス

明治九年二月十四日

此ノ如ク清國ニ於テハ總理衙門ト森公使ノ間互ニ辯難抗議未ダ要領ヲ得ザルニ拘ハラズ、我遣韓使節ハ早ク既ニ韓庭ト商議ヲ開キ咄嗟ノ間遂ニ本文ノ條約ヲ締結セシモノナリ。

修信使金綺秀來朝ノ事　九年五月、六月

九年五月朝鮮修信使金綺秀渡來六月一日參朝謁見シテ方物ヲ上リ、又タ禮曹判書ヨリノ書ヲ外務卿ニ致シテ修謝ノ意ヲ述ベ、同十八日東京ヲ發ス是レ維新已後朝鮮ノ使節來朝ノ始メナリ。

修好條規附錄竝ニ通商章程締結ノ事　九年六月ヨリ八月ニ至ル

曩ニ締結セシ修好條規第十一欵ニ「兩國既ニ通好ヲ經タレバ、別ニ通商章程ヲ設立シ、兩國商民ノ便利ヲ與フベシ。且現今議立セル各欵中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニスベキ條件、共自今六ケ月ヲ過ズシテ兩國別ニ委員ヲ命ジ、朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議定立セン」トノ約ヲ揭ゲタルヲ以テ、我政府ハ明治九年六月七日外務大丞宮本小一ヲ以テ理事官ト爲シ渡韓セシム。右理事官ハ七月三十日京城ニ抵リ其講修官刑曹參判趙寅熙ト會同シ、八月廿四日ヲ以テ修好條規附錄十一欵及ビ朝鮮議定諸港日本人民貿易規則十一則ヲ議定調印ス。

初メ帝國政府ハ修好條規附錄第一欵ニ、

嗣後兩國都府ニ設置スル使臣館舍ハ隨處人民ノ房屋ヲ賃借スルモ或ハ地基ヲ賃借シ館舍ヲ建築スルモ時宜ニ從フベシ

又タ其第二欵ニ、

使臣竝ニ眷屬隨員及朝鮮各口在留ノ日本管理官ハ朝鮮國內地ヲ經過スルヲ得ベシ

等ノ條欵ヲ明記セシムベキ考案ナリシモ、朝鮮政府未ダ交際ノ通義ヲ曉ラズ。且ツ切ニ外人ノ內情ヲ偵知スルヲ恐ルヲ以テ、種々ニ口實ヲ設ケテ之ヲ拒ミタリ。顧フニ使臣駐京ノ事其大綱ハ條規中既ニ明文アレバ、其細件ハ實際他日公使派遣ノ時ニ議スルモ尙ホ遲カラズ、又タ內地經過ノ事ハ假令之ヲ揭グルモ旅行ノ困難ナル等ニ依リ實際其効ナカルベキヲ認メテ兩條共茲ニ揭ケザリキ。

始メテ釜山ニ我管理官ヲ置キタル事　九年十月

明治九年十月三十一日朝鮮釜山ニ管理官ヲ置キ、十一月十三日外務省七等出仕近藤眞鋤之レニ任ゼラル、此ヲ朝鮮ニ領事官ヲ置クノ始メトス。

開港地撰定等ノ事　十年九月ヨリ十一年二月ニ至ル

明治十年九月十日外務大書記官兼代理公使花房義質ヲシテ渡韓セシム。其要ハ修好條規第五欵ノ豫約ニ從ヒ彼ノ政府ニ議シ、地名ヲ指定シテ開港セシメ、且ツ修好條規附錄第三欵ノ旨ニ從ヒ、遊步規程、居留規則等必要ノ諸條規ヲ議立スルニ在リ。然ルニ朝鮮ニ於テハ尙ホ國際ノ要義ヲ曉ラズ、使節ノ派遣ハ全ク交聘通信ノ事ヲ限ラント務メシ際ナルヲ以テ、今回公使ノ突然京城ニ入ルヤ、韓廷頗ル物議ヲ起シ、遂ニ受クベシ否ナ受クベカラズトノ論アルニ至レリ。然レドモ受ケザレバ自ラ約ニ背キ交際ヲ絕ツニ當ルヲ以テ、已ムヲ得ズ遂ニ我公使ト必要ノ談判ヲ開クニ至リタリ。其談判中尤モ重要ナル開港ノ事ハ、第一土地未ダ確定セザル事ナレバ、到底今回ノ談決ニ至ラズ、

更ニ搜索ヲ行フテ後チ地名ヲ指定スベキニ決シ、其搜索ニ便スル爲メ石炭ヲ咸鏡道文川郡松田、全羅道巨文島及珍島ノ三所ニ置クノ約ヲ定メ、十二月二十日之ニ調印シ、又タ是迄屢々彼ヨリ提議スル所ノ駐京使臣ヲ要セズトノ論、及ビ使臣往來通津一路ニ限ラントノ事ニ至リテハ彼ノ專ラ歎訴ニ拘ラズ十分之ヲ說破シ、他日之ヲ拒ムニ辭ナキ迄ニ止メ翌年（十一年）二月東京ニ歸着セリ。

十二月二十一日花房代理公使京城ヲ出ルニ臨ミ、故ラニ器什ヲ其館內ニ委置シ、以テ除口ニ他日ノ地ヲ爲セリ。韓官使ヲ馳セ書ヲ飛バシテ途中ニ追ヒ致ス、公使顧ミズシテ去ル。

帝國政府花房公使ヲシテ禮曹判書ノ書ヲ斥ケシメタル事　十一年五月ヨリ十一月ニ至ル

明治十年ノ末ニ當リ、朝鮮政府再ビ佛國宣教使四五名ヲ捕拿シ之ヲ獄ニ投ジタリ。十一年五月政府此報ニ接スルヤ、直チニ書ヲ禮曹判書ニ贈リ、一ニハ友國ノ人ヲ救護セント欲シ、又タ一ニハ朝鮮政府ノ不法遂ニ佛國ト不測ノ禍ヲ啓カンコトヲ憂ヘ、慘刑ヲ加ヘズシテ之ヲ放還スベキ事ヲ同政府ニ忠告セリ。既ニシテ右宣教使ハ淸國政府ノ手ヲ經テ放還セラレタリト雖モ、禮曹判書ヨリ我外務卿ニ贈リシ回答書中「上國禮部、上國指揮」等ノ字アリ、加之擡頭ノ書法ヲ用ヒタルヲ以テ、我外務卿ハ花房公使ニ命ジ條約ノ本旨ニ背キ自主國ノ體ヲ失スルモノナリトテ之ヲ其政府ニ斥還セリ。

豆毛鎭ノ課稅停止ノ事　十一年九月ヨリ十二年一月ニ至ル

十一年九月朝鮮政府稅關ヲ豆毛鎭ニ設ケ、貨稅ヲ其商民ニ課ス。其稅極メテ苛細ナリ。蓋シ以テ貿易ノ道ヲ沮抑セントスルニアリ。是ニ於テ釜山ノ貿易頓ニ熠ミ、我商民騷然タリト、報聞ス。十一月十八日我政府ハ花房代理公使及ビ近藤管理官ヲ釜山ニ遣リ、之ガ停止ヲ議セシメ、特ニ比叡艦ヲ以テ護送セシメタリ。右一行十一月二十日東京ヲ發シ同二十九日釜山ニ達シ、直ニ屬官山之城祐長ヲ命ジテ管理官ト爲シ、該管理官ヨリ書ヲ東萊府伯尹致和ニ投ジ云ハシメテ曰ク、豆毛鎭ニ稅關ヲ設ケ貿易貨物ヲシテ一ニ此路ニ由ラシメ、苛稅ヲ課シテ貿易ノ道ヲ沮抑ス、是レ明カニ明治九年八月二十四日宮本理事官趙講修官ト議定スル所ノ寬祐弘通ヲ主トスル約文ノ旨趣ニ戾ル。我政府將サニ其廢稅償害ヲ要セントス。先速カニ其徵稅ヲ停止シ、以テ商議ノ地ヲ爲セト。而シテ翌三十日該管理官ヲシテ府使ニ面晤シ停稅ノコトヲ議セシム。府使肯カズシテ曰、此レ政府ノ令ナリ、私ニ處分シ難シ、且ツ課稅ハ固ヨリ我國民ニ止ル、貴國人ニ關カルルニ非ズ。之ヲ京城ニ稟シ然ル後チ答ヘント、而シテ翌十二月一日照覆ヲ來シ、課稅ハ恰モ當然ノ權利ニ出デ、而シテ其結果毫モ我國ニ關セザルモノ、如キ說ヲ爲セリ。同二日管理官ヲシテ重テ照覆ヲ送リ、兩國協議シテ數年間ノ免リ。

稅ヲ約シ、而シテ猥リニ稅ヲ課スレバ是明ニ條約違反ナリ。又タ其稅ヲ貿易品ニ課スル以上ハ、豈國ニ關セザルノ理アランヤトノ意ヲ詳說セシメ、同四日公使比叡艦長ト謀リ、水兵二小隊ヲ上陸セシメ、豆毛鎭ニ行軍シ、其後山ニ躋リテ散兵操練ヲ爲シ、或ハ空砲打發ヲ行ヒ、或ハ艦上ヨリ發砲シ、或ハ絕影島ニ大砲射的ヲ試ミ、以テ兵威ヲ示シ、其回答ヲ促ス。是ニ於テ韓官大ニ恐レ、私カニ先ツ徵稅ヲ止メ、同月二十五日京城ヨリ停稅ノ訓令ノ至ルニ及ビテ公然之ヲ我管理官ニ告知セリ。釜山ノ貿易ハ是ニ於テ漸ク舊ニ復シ、花房公使一行ハ則チ十二年一月九日ヲ以テ東京ニ歸着セリ。

元山、仁川開港談判竝ニ徵稅償害ノ事　十二年三月ヨリ同年九月ニ至ル

十二年三月十四日又花房代理公使ヲ朝鮮ニ遣ル、元山仁川等ノ開港ヲ議シ且設關徵稅ノ償害ヲ求ムルガ爲メナリ。

十年已降測量ノ結果ニ據レバ、開港スベキ地ハ東海岸ニ於テハ元山津、西海岸ニ於テハ仁川ヲ以テ之レニ適當ナルモノトス。卽チ元山津ハ啻ニ貿易ニ肝要ナルノミナラズ、接壤隣邦ノ兵備ニ關シ大ニ將來兩國ノ利害ニ係ル所アリ。仁川ハ水路京城ニ往來スルノ門戶ニシテ、船艦時々繫泊セザルベカラザルノ地ナレバナリ、我政府ノ議此二港ニ決ス。

六月十三日、公使京城ニ抵リ、講修官洪祐昌ト之ヲ議スルニ當リ、元山ニ付テハ格別ノ異議ナシト雖モ、仁川ニ至リテハテハ地京城ニ近ク、人心安カナラズトノ辭柄ヲ以テ容易ニ肯ゼズ。依テ仁川ノ事ハ暫ク之ヲ他日ニ讓リ、先ヅ元山ノミ來年（十三年）五月ヲ以テ開港スベキ旨ノ豫約ヲ爲セリ。

又タ設關徵稅ニ係ル損害要償ハ金額ヲ以テスレバ我政府ノ好ム所ニアラズ。由テ之ニ代フルニ七件ノ要求ヲ以テセリ。此七件中東萊貿易貨幣混通等ノ五件ハ修好條規附錄及ビ貿易章程ニ載スル所ナルニモ拘ハラズ、彼之ヲ實行スルヲ欲セズ。又曾テ異議アリシモノナリ。他ノ二件ハ一ハ學術研究ノ日本人ニ內地旅行ヲ許可シ、又他ノ一ハ慶尙道大丘春秋兩度ノ大市ニハ日本人モ貨物ヲ齎ラシ、行テ之ニ加ハルヲ得セシメントナリ。當時ノ事情悉ク之ヲ行ハシムル能ハザリシモ、內最後ノ二件ヲ除キタル他ノ五件ハ此際悉ク我要求ニ應ゼシメタリ。

花房公使ハ九月三日京城ヲ發シ、一旦長崎ニ歸リ、更ニ元山ニ抵リ德源府使金綺秀ニ會シテ新開居留地及ビ埠頭築造ニ關スル諸事ヲ協議シ十一月二日東京ニ復命セリ。

花房代理公使ニ昇任、修信使金綺秀來朝竝ニ朝鮮政府米政府修好ノ求ニ應ゼザル事　十三年四月ヨリ同年九月ニ至ル

十三年四月十七日朝鮮京城ニ公使館ヲ創設シ、花房代理公使ヲ辨理公使ニ昇任シ、京城ニ駐在セシムルノ命アリ。適マ修信使金宏集來朝ノ報アルヲ以テ未ダ赴任セズ。

是ヨリ先キ北米合衆國朝鮮ト好ヲ通ジ貿易ノ道ヲ開カン事ヲ欲シ、其水師提督「シヱフヱルド」ヲシテ軍艦チユンヂラゴ號ヲ以テ釜山ニ航シ、我近藤領事ニ就イテ書ヲ東萊府使ニ通セシム。府使受ケズ、米公使ビンハム紹介ヲ我ニ請フ、依テ井上外務卿ハ米國軍艦ニハ六十日間長崎ニ在リテ其回答ヲ待ツコトヲ勸告シ、五月二十九日爲メニ一書ヲ裁シ、花房辨理公使ノ書ト米國ノ書函トヲ併セテ之ヲ禮曹判書尹滋承ニ送レリ。其書ノ大要ニ曰ク、米國ノ求ムル所ハ修好通商ヲ欲スルノ外他意アルニアラズ、而シテ鎖國ノ今日ニ行フベカラザルハ我國清國與ニ之ヲ實驗セリ。一朝誤リテ邊釁ヲ啓カバ恐ラクハ不測ノ害ヲ來サン、宜ク其請ニ應ズベシト。要スルニ外悔ヲ禦ヒテ自主ノ權ヲ固フスルヲ忠告スルニ在リ。然ルニ斯書ノ朝鮮ニ達スルヤ、外交ハ固ヨリ其忌ム所ナルヲ以テ、新ニ他國トノ交際ヲ開クコトヲ欲セズ。禮曹參議金宏集ヲ修信使ト爲シ我公使ノ回謝ヲ致シ、且其照覆ヲ齎ラシ來ラシム。即チ同使ハ八月十一日東京ニ至リ、十三日其回謝照覆ヲ致シテ米國使ノ本函ヲ封還セリ。書中云フ所ハ即チ單ニ日本ヲ除クノ外朝鮮外洋各國ト初メヨリ聲氣相通ズルコトナキハ天下萬國ノ共ニ知ル所ナリ。

今米國書契ノ外封書スルニ大高麗ヲ以テス。高麗ハ即チ勝國ノ國號、國號各異ナリ、設ヒ書スルニ大朝鮮ヲ以テスト雖トモ、其御覽ト云フ何ゾ至尊ニ呈納スベケン。如シ通書ノ事アラバ邊臣又ハ禮曹ニ於テモ亦宜シ、事體捧納スベカラザルヲ以テ茲ニ之ヲ封還ス云々。書意甚ダ我忠告ノ旨趣ニ違ヘリ。金宏集九月八日東京ヲ辭ス、其還ルニ臨ンデ外務卿復タ書ヲ同氏及ビ尹滋承ニ與ヘ、懇々清露兩國ノ關係ヲ述べ、速ニ米、英、佛等ノ諸國ト交ヲ結ヒ藉リテ以テ自衛ノ策ヲ講スルノ必要ヲ諭シ歸韓ノ後能ク其政府ノ議ヲ定メンコトヲ忠告セリ。

花房辨理公使謁見竝ニ仁川開港ノ事　十三年十二月ヨリ十四年六月ニ至ル

初メ花房ノ辨理公使ニ任ゼラルヽヤ、直チニ京城ニ赴任スベキ筈ナリシモ、適マ修信使ノ至ルニ會シ、姑ク其期ヲ緩フス。是ニ至リテ十一月二十四日東京ヲ發シ十二月十七日京城ニ着シ、二十七日國主ニ重熙堂ニ謁見シ我國書ヲ捧呈セリ。

我ガ　至尊ノ璽書ヲ朝鮮ニ通スルモ亦タ蓋シ此ヲ始ト爲ス、是ニ於テ使臣駐京ノ事全ク定ル。

初メ宮本理事官ノ韓ニ在ルヤ、我公使ハ代理公使ヲ派シ、大事ハ兩政府、小事ハ外務卿禮曹判書ノ書狀ヲ用ヒント乞ヒ、概シテ國書ハ用ヒザラントス。蓋シ國書ハ皇帝陛下等ノ寫面アルヲ忌ミテナリ。是行ヤ辨理公使ヲ派シ、國書ヲ奉ゼシメタルニ至リテ韓廷ノ論議紛興シ三日間ニシテ三タヒ禮曹判書ヲ更換スルニ至レリ。

二十二日公使禮曹判書ニ面會シ、曩ニ貴政府ノ請アリト雖トモ、之ヲ約スルニアラズ。而シテ貴國ト交誼ヲ敦フスルハ我　皇帝陛下ノ叡旨ナリ。速ニ奏聞スベシト翌日議決シ、新ニ謁見捧書ノ儀式ヲ講定シ、務メテ煩ヲ省キ進退六揖國書ハ使節ヨリ親ク君主ニ進奉スルコトトシ、遂ニ廿七日ニ於テ之ヲ行ヒシナリ。蓋シ朝鮮國主ガ外國ノ使臣ヲ引見セシハ是ヲ始メトシ、又タ謁見ノ事了ルヤ公使ハ直チニ久シク懸案ニ屬スル仁川開港ノ議ヲ提出ス、適マ國內物議沸騰大院君陰ニ之ガ聲援ヲ爲シ、或ハ外交ヲ非議シ、或ハ開港ヲ拒ミ、投否ノ如キ比々絕ヘズ、朝野騷然頓ニ亂民ノ蜂起セシコトヲ是レ懼レ延期ヲ請フテ已マズ。使臣駐京ノ如キモ併セテ延期ヲ請フニ至ル、公使東洋ノ大勢竝ニ兩國利害ノ關係ヲ說テ之ヲ容レズ、韓廷亦タ到底我決意ノ動カスベカラザルヲ知リテ、十四年一月廿八日終ニ仁川開港ノ議ヲ決ス。而シテ開港ノ期ハ事情ヲ酌量シテ少シク之ヲ緩フスルコトトナシ、此年二月ヨリ起算シ、二十ケ月ヲ以テ限ト爲シ卽チ（十五年）九月ヨリ開港スベキコトヲ議定セリ。

仁川開港ノ期已ニ定マルヲ以テ、直チニ間行里程、居留地基等ノ節目ヲモ併セテ商訂シ、且ツ久シク懸案ニ係ル內地ノ旅行、大丘行商ノ件等ヲ協定スベキ筈ナレドモ、如何セン物議益沸キ、講習官金宏集モ亦タ退職セルヲ以テ、姑ク時機ヲ待チ幸ニ今回彼國ヨリ我國ニ派遣セシ視察官ヲ開導シ、其方向ヲ定メシムルニ如カズト認メ、公使ハ六月三十日ヲ以一先東京ニ歸レリ。

修信使趙秉鎬來朝稅則設定商議ノ事　十四年十月、十一月

十月二十八日朝鮮修信使趙秉鎬從事官李祖淵等ヲ率ヒ至ル、朝鮮ニ於テハ是迄稅則ノ設ケ之ナリ、輸出入共ニ免稅ナルヲ以テ、久ク既ニ通商章程ヲ改正シ、稅則ヲ講定セン事ヲ我ニ求メタリシガ、今回右使節國書ヲ齎ラシテ來朝セルハ主トシテ之ガ爲メナリ。我政府亦タ花房公使宮本大書記官等ヲ委員ニ命ジ、相議スルコト凡ソ五回、議遂ニ合ハズ、其合ハザルハ第一右信使ニ於テ商議結約ノ全權委任狀ヲ有セズ、第二彼ニ於テ總テ一割ノ高稅ヲ課セントスルノ二點ニアリ。井上外務卿懇ロニ貿易未ダ盛ナラザル時ニ於テ高稅ヲ課スル極メテ不可ナルヲ說キ、追テ商議スベキコトヲ諭ス。信使亦敢テ此議ヲ合セントスルノ意ナク、十一月十七日悠然退歸ス。

朝鮮國官制改革花房辨理公使渡韓、稅則協定ノ前議ヲ繼ク事　十五年四月ヨリ同年七月ニ至ル

曩ニ朝鮮ニ於テハ事大、交隣ノ兩司ヲ設ケ、取扱上我國ト淸國トヲ區別セシニ、近頃官制ヲ改革シ一ニ同文司ニ併セ復タ輕重ヲ分タザルニ至レリ。

四月二十六日花房辨理公使復朝鮮ニ往ク、前議ヲ繼イデ通商章程ヲ改修シ、稅則ヲ議定センガ爲

メナリ。是ニ於テ韓廷通商司經理事金輔鉉金宏集ニ擬議ノ全權ヲ與ヘ、會同シテ互ニ商量スル所アリ、後チ事變ニ遭フテ果サズ。

世子冠婚式ニ關スル祝賀ノ御親書御贈物ノ事

十五年五月

是ヨリ先朝鮮王ノ世子冠婚ノ禮アリ、五月二十九日花房辨理公使同國王ニ熙政堂ニ謁見シ、祝賀ノ御親書ヲ捧呈シ山砲二門小蒸汽船一艘ヲ贈リテ賀儀ヲ致ス。

十五年京城事變ノ事

十五年七月廿三日朝鮮ノ亂民黨ヲナシ、先ヅ下都監ニ入リテ我陸軍中尉堀本禮造等ヲ亂殺シ、後チ我公使館ヲ襲フ。公使其支フベカラザルヲ知リ、館員二十八人ヲ率ヒ正門ヲ出、敵數十名ヲ斃シ、血路ヲ開シテ王宮ニ赴カントス。已ニシテ南大門ニ至レバ鐵扉嚴鎖外ヨリ開クニ由ナシ。公使是ニ至リテ意ヲ決シテ仁川ニ至ル。亂民追擊府兵亦タ亂民ニ屬ス、公使等踊躍奮起濟物浦ニ至リ、小舟ヲ得テ海上ニ浮ビ、終ニ歸國ノコトニ決ス。恰モ好シ英國測量船飛魚號(フライングフイシ)ノ南陽灣ニアルヲ認ム、卽チ國旗ヲ竿頭ニ揭ゲ目標トス。船近クニ及ンデ艦長國旗ヲ認メ、小蒸汽船ヲ卸ロシ乘セテ本船ニ移ラシメ、直チニ錨ヲ拔テ長崎ニ達ス。

是ニ於テ卽時東京ニ電稟シ、事變ノ概略ヲ報ス。本省此報ニ接スルヤ、井上外務卿ハ山口縣赤間關ニ出張シ、直チニ花房公使ニ訓令ヲ附與シ、再ビ京城ニ赴カシム。公使八月十日馬關ヲ發シ同十六日京城ニ達シ、同廿日國王ニ進謁シ、承命辨事ノ主趣ヲ面陳シ、三日ヲ期シ決答アルベキヲ約ス。其二日ニ至リ領議政書ヲ寄セテ曰ク、別ニ王命アリ他處ニ赴任ス、本件ハ歸來ノ後之ヲ議セント、公使其邦交ヲ蔑視シ使命ヲ辱ムルヲ怒リ、奏章一本ヲ作リ國王ニ呈シ、袂ヲ揮テ京城ヲ發シ、濟物浦ニ至リ船ニ移ル。領議政書ヲ致シテ止メ重ネテ商辨ノ地ヲ爲スヲ望ムノ情アリ。依テ兩日間船ヲ停メ其來議ヲ待ツ、是ニ於テ國王更ニ李裕元、金宏集ヲ正副全權大臣トナシ、船ニ就テ事ヲ議サシム。二十八、二十九ノ兩日ニシテ商辨全ク了ル、是ニ至テ其條約ニ蓋印ス。但シ右條約中亂民事件處分條章ハ之ヲ世ニ公ニセズト雖モ、修好條規續約二欵ハ同年十月三十一日其批准ヲ交換シ之ヲ公布セリ。

右處分條章ノ條項卽チ左ノ如シ。

第一　自今期二十日。朝鮮國捕獲兇徒。嚴究渠魁。徒重懲辨スル事

日本國派員眼同究治ス。期內未能捕獲。應由日本國辨理。

第二　日本官胥遭害者。由朝鮮國優禮瘞葬。以厚其終事。

第三　朝鮮國撥支五萬圓給與日本官胥遭害者遺族竝負傷者以加體卹事。

第四　困兇徒暴擧。日本國所受損害及護衞公使水陸兵費內五拾萬圓由朝鮮國塡補事
　毎年支拾萬圓。待五箇年清完。

第五　日本公使館置兵員若干備警備事。
　設置修繕兵營朝鮮國任之。

若朝鮮國兵民守律一年之後。日本公使視做不要警備不妨撤兵。

第六　朝鮮國特派大官修國書以謝日本國事。

又タ別訂續約ニ曰ク。

第一　元山釜山仁川各港間行里程。今後擴爲四方各五十里。朝鮮里法期二年後。自條約批准之日起算因歲爲一年更メテ爲各百里事。自今期一年後以楊花鎭爲開市場事。

第二　任聽日本國公使領事及其隨員眷從遊歷スルニ朝鮮內地各處事
　指定遊歷地方。由禮曹給照地方官勘照護送。

初メ變報ノ東京ニ達スルヤ、井上外務卿之ヲ各國公使ニ通報シ、次テ我政府ハ公使及ビ居留人民ヲ保護スル爲メ軍艦兵員ヲ發遣スルニ決スルト同時ニ、外務卿又之レヲ各國公使ニ通報シ、其他意ナキ旨ヲ知ラシメタリ。清國公使黎庶昌此通報ヲ得、急ニ之ヲ天津李總督ニ報シ、同總督ノ電答ヲ得テ清國居仲調停セントスルノ意アル旨ヲ告グ、然ルニ朝鮮ノ國タル、清國ヨリ待ツニ屬邦ヲ以テスト雖モ、我國ハ認メテ獨立自主ノ邦ト爲シ、曾テ清國ニ經由スルコトヲ爲サズ、九年二月彼我直接ニ議定シテ對等ノ條約ヲ締結セリ。吉田外務大輔直ニ此意ヲ以テ覆書ヲ裁シ、其調停ヲ辭謝セリ。續テ黎公使又書ヲ致シ、總理衙門ノ電報ヲ傳ヘテ曰ク「日本ハ我條約國ニシテ其使館ハ我屬邦ニ在リ亦應ニ一竝護持スベシ云々」ト吉田大輔又之レニ覆シテ曰ク「我國朝鮮ト約ヲ立ル待ツニ自主ヲ以テス、仍テ須ラク約ニ據リテ照辨スベシ。使館ニ至リテハ國々各々自ラ護ス（中略）貴國兵ヲ派シテ代辨護持セバ或ハ翻テ葛藤ヲ添ンコトヲ恐ル云々」ト、黎公使尙ホ屈セズシテ葛藤ヲ添フルノ理ナキ旨ヲ再覆ス、吉田大輔又タ之レヲ再覆シテ「本國ハ約ニ據リテ朝鮮ト議辨ス本ト貴國ト竝テ相關ルナシ」ト云ヒテ之ヲ峻拒セリ。

八月廿四日馬建忠花房公使ヲ追隨シテ仁川ニ至リ、居仲調停ノ意ヲ通ズ。花房之ヲ謝絕ス。今回ノ亂ハ專ラ大院君等ノ釀成セシ所ナルヲ知リ、馬建忠ニ於テハ疾クニ同君ヲ斥クルノ念アリ、由リテ翌廿五日直チニ京城ニ還リ、卽日兵ヲ以テ王宮及四大門ヲ護衞シ、大院君ヲ拉シ直ニ南楊ニ送リ、丁汝昌之ヲ護シテ天津ニ歸ル。此時ニ當リ清國ハ若干ノ文武官ヲ朝鮮ニ派シ、頗ル其ノ內政ニ干涉スルノ形ヲ顯ハセリ。

條約調印ノ後チ卽チ九月三日陸海軍諸將校ヲ會シテ堀本禮造等十二人ノ遺屍ヲ濟物浦ニ禮葬シ、同十一日兇匪ノ處分ヲ了リ我公使ハ九月二十九日東京ニ復命ス。

修信使朴泳孝等來朝ノ事　十五年十月

十月十三日朝鮮全權大臣兼修信使朴泳孝副大臣金晩植東京ニ至ル、其禮曹判書李會正ヨリ我外務卿ニ致ス所ノ照會及ヒ另具ヲ呈シテ謝罪保和ノ意ヲ寓ス。

同三十一日井上外務卿ト右使節トノ間ニ於テ各々ヲ奉シ修好條規續約ノ批准書ヲ交換セリ。

花房竹添兩公使交任　十五年十一月ヨリ十六年一月ニ至ル

十一月六日辨理公使花房義質ヲ外務省三等出仕ト爲シ、外務大書記官竹添進一郎ヲ以テ其後任辨理公使ト爲ス。同公使ハ十六年一月七日京城ニ抵リ、十日國王ニ謁見シテ國書ヲ捧呈セリ、儀式總テ花房公使初メ赴任ノ時ノ如シ。

是時ニ當リ朝鮮モ亦屢々內政ヲ釐革シ、曩ニ設ケタル統理機務衙門ヲ廢シテ書束ノ往復ハ總テ其舊ニ復スルコトナシ、後又更ニ統理衙門ヲ設ク、前年十二月清國ハ中書馬建常、觀察陳樹棠等及獨逸人「モルレンドルフ」ヲ京城ニ遣リ、頗ル計畫スル所アリシガ、此際趙寧夏ヲ督辨事務ニ、金宏集ヲ協辨事務ニ「モルレンドルフ」ヲ參議事務ニ任シテ外交事務ヲ專管セシム。既ニシテ閔泳翊洪英植ヲ以テ協辨交涉通商事務。馬建常金玉均ヲ議政府參議兼協辨通商事務ト爲ス是ニ於テ清國益朝鮮ノ內政ニ干涉スルニ至レリ。

海底電信線架設條約締結ノ事　十六年一月ヨリ同年三月ニ至ル

竹添公使ハ十五年十二月二十六日附ノ御委任狀ヲ以テ長崎釜山ノ間ニ丁抹國大北部電信會社ノ海底電線ヲ沈設シ、之ヲ陸揚スル爲メ朝鮮政府ト協議締結スベキ委任ヲ受ケタリ。依テ之ヲ同政府ニ議ルニ、彼固ヨリ海外電信ノ何物タルヲ知ラズ。苟モ地ヲ他邦ニ貸サバ國權ヲ毀損シ又タ他日ノ禍アルヲ疑ヒ、因循決セズ、後チ年期ヲ限リ、或ハ我要求スル所ノ特權三十年ヲ半減シ、局用地ノ地租ヲ要求シ、官報遞送料ヲ減少セントスルノ約案ヲ示ス。是レ馬建常ノ起草スル所ニ係ル。

是ヨリ先キ韓人暗箭ヲ我護衞兵營ニ狙射スル者アリ、公使之ヲ朝鮮政府ニ照會シ、三日內ヲ期シテ拿捕懲辨センコトヲ求メタリ。彼之ヲ承ケテ慢然處理セズ、又タ仁川居留地ヲ區畫スルニ彼ノ十二月ヲ限リ官吏ヲ派シ檢定スルノ約アリシニ、又タ其約ニ違ヘリ是ニ於テ竹添公使ハ先ヅ趙寧夏ヲ斥ケ馬建常ヲ挫クニアラザレバ約成ルベカラズト認メ、二月十四日趙寧夏、金宏集ニ馬氏ノ寓館ニ會晤ス、初メ其門ニ入ルヤ、馬氏ノ門兵我衞兵ヲ阻攔セリ。公使其兵ヲ室內ニ拘引シ、目ヲ瞋ラシテ馬氏ヲ切責シケレバ、馬氏忙シク其敬ヲ失フコトヲ辭謝セリ。馬建常ハ韓官ノ常ニ畏敬スル所ナレバ、其切責セラルヽヲ見テ一座爲メニ肅然タリ。公使乃チ趙寧ノ違約ヲ誚メ、又約案ノ不當ヲ詰

リ、殆ト辭謝スルニ所ナカラシメ、直チニ起チテ去ラントスルニ當リ、趙氏、金氏、共ニ遜言辨謝スルヲ見テ方ニ留リテ商議ヲ開キ、期限ヲ二十五年ニ縮メ、而シテ其期限內ノ免稅ヲ約シ、朝鮮ノ官報ハ其料金ヲ半減ニシ、私信ヨリ先發スルヲ議定ス既ニシテ趙寧夏督辭ヲ辭シ閔泳穆之ニ代リ三月三日遂ニ海底電信條約ヲ締結セリ。

朝鮮國貿易規則、間行里程取極書及ヒ犯罪ノ日本漁民取扱條規結約ノ事

十六年四月ヨリ同年十二月ニ至ル

初メ修信使趙鎬ノ稅則改正ヲ請求スルヤ、彼專ラ一割稅ノ說ヲ固執セシカバ、其議合ハズシテ遂ニ今日ニ至レリ。此ニ至リテ稅則ノ議又起リ、我政府ハ竹添公使ニ商議結約ノ全權ヲ委任シ、朝鮮政府ハ督辨交涉通商事務閔泳穆ニ其全權ヲ與ヘ、七月十八日公然商議ヲ開キ、同廿五日右貿易規則及間行里程取極書竝ニ犯罪ノ日本漁民取扱條規ヲモ併セテ記名調印スルニ至レリ。抑モ此案ヲシテ此ノ如ク慥ニ協定ニ至ラシメタルモノハ、固ヨリ其局ニ當リタルモノ、斡旋宜キヲ得タルノ致ス所ナリト雖モ、其要ハ又タ主トシテ我政府立案ノ公平ニ歸セザルヲ得ズ。初メ我政府此商議ヲ開カントスルニ方リ、米國公使フード氏ハ既ニ京城ニ在リテ將サニ米韓條約ヲ締結セントシタリキ。而シテ米政府ノ對韓政略ヲ見ルニ、終始其獨立ヲ維持シテ東洋ノ和平ヲ保チ、以テ他國ノ併呑ヲ豫防セントスルニ在リ、故ヲ以テ貧弱彼ノ如キハ務メテ之ヲ啓誘シ、利益ノ與フベキハ之ヲ與ヘテ吝マザルノ本旨ナルガ如ク、恰モ我政府ノ宿圖ニ相合ス、依テ約案ノ如キモ成ルベク米國ト矛盾セザルヲ要シ、東京ニ於テハ密ニ之ヲ米公使「ビンハム」ニ示シタルニ其公明正大ナルヲ見テ頗ル滿足ノ意ヲ表シ、又タ京城ニ於テ「フート」氏ニ示シタルニ、是亦格別ノ異見ナシ。依テ公然ノ開談ニ先チ進ンデ之ヲ「モルレンドルフ」ニ內示シタルニ頗ル其縝密周到ナルニ感ジ、且ツ先ヅ我ト約ヲ立ツレバ各國復タ異議ヲ容レズト認メ、反テ彼ヨリ速ニ議定センコトヲ促スニ至レリ。是其速ニ締結セラレタル所以ナリ。

九月二十七日朝鮮國ト貿易規則ノ批准書ヲ交換ス。

同三十日仁川港居留地借入約書ニ調印ス。

是ニ於テ朝鮮各國通商ノ規約粗ホ成ルヲ以テ公使ハ十二月六日京城ヲ發シ同二十一日東京ニ復命セリ。

朝鮮內閣ノ軋轢ノ事

十七年五月

十七年五月朝鮮郵政局ヲ設立シ洪英植ヲ以テ總辨ト爲シ、沿海各港ノ郵信ヲ管理セシム。是時ニ方テ淸官陳樹棠益朝鮮ノ內政ニ干涉シ、閔臺鎬、金炳始、趙寧夏ヲ起シテ督辨ト爲シ金充植、

尹泰駿ヲ協辨ト爲シ、魚允中ヲ參判ト爲シ、閔泳穆、洪英植、李祖淵ハ皆外ニ出ヅ、獨リ金宏集ハ協辨タル舊ノ如シ。久クシテ宏集、炳始ニ代リテ督辨ト爲レリ蓋シ皆ナ內閣ノ軋轢ニ困リテナリ。

塡補金返還ノ事　十七年十月

十五年京城ノ變亂ニ困リ我國受クル所ノ損害及ビ公使護衞海陸兵費ノ內、朝鮮政府ヨリ塡補スベキ分五拾萬圓ハ年々五萬圓ヲ納ムベキ約ニシテ、十六、十七、兩年ニ於テ納附ヲ了リタルモノ拾萬圓ナレバ、向フ八年間ニ完淸スベキ殘額尙ホ四拾萬圓アリ。然ルニ朝鮮目今ノ情勢ヲ觀ルニ國力疲弊毫モ步ヲ開明ノ事業ニ進ムル能ハズ、故ニ我政府ハ深ク恤隣ノ意ヲ表シ、一ハ以テ其觀心ヲ收、一ハ以テ其實力ヲ養成セシメンガ爲メ、殘額ヲ殘ラズ同政府ヘ返還スルコトニ決セリ。

竹添公使ハ十月二十日東京ヲ發シ、同三十日京城ニ歸任シ十一月二日國王ニ便殿ニ進謁シテ奏言シテ曰ク。

我　皇帝陛下ノ聖諭ヲ奉スルニ大君主宇內ノ大勢ヲ洞鑒シ制度ヲ更革シ政敎ヲ作新シ霄肝厲精以テ開明ノ治ヲ圖ラルヽヲ傳聞ス玆ニ塡補金四十萬圓ヲ還繳シ以テ凡百開明ノ貲ニ轉用セラレンコトヲ冀フト恭ク之ヲ奉奏ス。

ト國王曰ク、厚誼篤摯感謝ニ堪ヘズ、卿宜ク斯意ヲ轉奏スベシト、後チ公使ハ之ヲ督辨金宏集ニ照會シ、同督辨ヨリ深ク我皇帝誠ヲ友邦ニ推スノ至意ニ感ジ、將來銳意益隆盛ヲ謀ルベキ旨照覆セリ。

十七年京城變亂ノ事　十七年十二月

明治十七年十二月四日朝鮮京城郵政局開業ノ際、暴擧ヲ企ツモノアリ、火ヲ近傍ノ家屋ニ放チ大臣閔泳翊ヲ傷ケ、其災延テ王宮ニ及ブ。我辨理公使竹添進一郎國王ノ請ヒニヨリ兵ヲ率ヒテ王宮ヲ護衞ス。同六日淸兵韓兵ト共ニ王宮ヲ襲フ、我兵擊テ之ヲ退ク、後國王王大妃ニ侍スルコトヲ欲シ、後門ノ外ニ出ヅヽコヽニ於テ公使兵ヲ率ヒテ公館ニ歸ル、是ヨリ先キ淸韓ノ兵我公使館ヲ攻ム、兵又擊テ之レヲ退ク。敵又我南山ノ營ヲ燒キ其糧食ヲ掠ム。公使乃チ意ヲ決シテ仁川ニ退キ、急ヲ本邦ニ報ズ、是ニ至テ大使ヲ派シ、其事ヲ處辨セシム。

朝鮮ニ於ケル我國ノ勢力漸次發達ノ程度ニ從ヒ、同國ニ於テモ自ラ開明進步ヲ希圖スル少壯有爲ノ士ヲ輩出シ、遂ニ日本黨ト稱スル一種黨派ノ形ヲ呈スルニ至レリ。然レトモ之ニ反對スル支那黨ハ近々淸國大院君ヲシテ淸兵ヲ以テ入リテ內政ヲ革メントスルノ說アルヲ賴ミ、益權力ヲ得、遂ニ日本黨ノ巨魁朴泳孝金玉均ヲ流刑ニ處セントスルノ勢アルニ至レリ。朴金等禍機ノ迫ルヲ察シ、寧

ロ先シテ奸黨ヲ戮センコトヲ欲シ、竊ニ我公使ニ告グ、公使痛ク其輕舉ヲ誡ム、然レドモ其意ノ既ニ決スルヲ察シ、他日ノ處分ヲ誤ランコトヲ慮リ、之ニ對スル政略甲乙二案ヲ具シ政府ニ稟請スル所アリ、甲案ハ到底朝鮮ニ於テ日清兩立ヲ保シ難トスレバ、寧ロ內亂ニ乘ジ王ノ請ニ由リ之ヲ援ケ、王ニ敵スル清兵ヲ擊退シテ以テ彼ノ虛傲ヲ抑スルニ如カズ、乙案ハ專ラ東洋ノ和局ヲ保持スルヲ主トスルトキハ、成ルベク日本黨ノ大禍ヲ受ケザル迄ニ保護ヲ加フルヲ要スト云フニアリ。我政府乙案ヲ可トシ、十一月二十八日電信ヲ以テ回訓ス未タ達スルニ及バズシテ亂作ル。

亂治ルヤ、朝鮮官吏竹添公使ノ亂徒ニ通謀スルノ跡アルヲ疑ヒ、之ニ暴慢不敬ナル責問書ヲ送ルヲ始メトシ、往復繁劇前後二十六通ノ多ニ至リ、遂ニ歸着スル所ナシ。初メ變報ノ到ルヤ外務卿ハ先ヅ十二月十五日ヲ以テ栗野外務書記官ヲ派シテ仁川ニ至ラシメ、同十六日續テ又タ井上參事院議官ヲ派ス。要ハ紛鬧ノ起因及ビ事實ヲ查竅シテ我政府他日朝鮮政府ニ開談スルノ基礎ヲ得ントスルニアリ。

十二月廿一日朝議參議外務卿伯爵井上馨ヲ特派全權大使ニ任ジ、清韓兩國交涉ノ事宜ヲ辨理セシメラル、卽チ清國ニ關シテハ日清兩兵相鬪ノ事ヲ辨ジ、朝鮮ニ對シテハ我辨理公使ヲ襲擊シ、火ヲ放チ公館及該兵營ヲ燒キ且ツ在留人民數十名ヲ殺害シタルハ我國ニ對シ和好ヲ壞ルモノナレハ之ガ罪ヲ問フニ在リ。

翌廿二日大使東京ヲ發ス、初メ事變ノ清國ニ聞ユルヤ、總理衙門モ亦焦心措カズ、急ニ之ヲ在東京ノ清公使黎庶昌ニ電通シ、兩國互ニ大員ヲ派シ朝鮮ニ於テ商辨セシメンコトヲ請求セシメ、北洋副大臣吳大徵及ビ續昌ヲ欽差會辨トセリ。故ニ我大使ニ清國辨理ノ委任ヲモ併セテ之ヲ附セラレシナリ、大使ノ發スル朝議固ヨリ和平ヲ主トシ、又タ駐清榎本公使ヨリ清國使臣兵ヲ帶ビザルヲ報ズルニ及デ遂ニ議ヲ決シテ護衞兵ヲ大使ニ附セザリシガ、既ニシテ清國又護兵四百名軍艦三隻ヲ以テ大徵ヲ派シ、又韓地ノ人心穩妥ナラザルノ報アルヲ以テ、大使馬關ニ駐リ二大隊ノ護兵ヲ得ンコトヲ電請シ、再三往復ノ末朝議始テ之ヲ可ス。大使朝鮮ノ獨立不獨立ニ關シ電信ヲ以テ伊藤參議ニ議スル所アリ、之ニ對シ三條太政大臣ヨリ電訓セラル。

其冒頭ニ云ク、

足下ヨリ伊藤ヘノ電信ヲ接收シ朝鮮ノ獨立不獨立ニ付內閣ノ會議ヲ開キ再應ノ細議ヲ盡セリ從來ノ關係ニ依リ我ニ在リテハ獨立ヲ認メザルヲ得ズ云々

大使遂ニ馬關ヲ發シ、十二月廿八日仁川ニ着シ、十八年一月三日護兵一大隊ヲ隨ヘテ京城ニ進ム。吳大徵續昌既ニ前日ヲ以テ京城ニ入リ、是日謁ヲ通ズ、六日文武官ヲ隨ヘテ國王ニ謁見シ、使命ノ要領ヲ奏シ、御前商議又ハ否ラザレバ十分ノ權力ヲ與ヘラレタル全權大臣ニ商議センコトヲ乞フ、王後者ヲ諾ス。此日左議政金宏集ヲ其全權大臣ニ任ゼラル。七日議政府ニ造リ宏集ニ會シ、先

其委任狀ヲ觀シコトヲ求ム、既ニシテ文中「京城不幸ニシテ逆黨ノ亂アリ、以テ日本公使誤テ其謀ヲ聽キ進退據ヲ失ス、館焚ケ民戕ハル、ヲ致ス」等ノ文字アルヲ認メ、大使ハ是等ノ文字アレバ勢ヒ瑣末ノ論議ニ涉ラザルヲ得ザルヲ以テ殆ト妥結ノ期ナカランコトヲ諭シ刪除セシム。翌八日又會ス宏集委任狀ヲ改示ス可ナリ。乃チ我約案ヲ示シ商議ヲ始ム。大使我要求ハ專ラ朝鮮ノ情勢ヲ酌量シテ勘査シタルモノナレバ、決シテ難案ニアラザル旨ヲ辨ジ、談公館再建ノ項ニ移ル。宏集其人民ノ燒ク所ニ非ザルヲ擧證ス。大使モ亦證ヲ擧テ其自燒ニ非ルヲ辨シテ曰ク、予ガ昨日ノ辨明ハ卽チ此等ノ爲メノミト言未終ラザルニ吳大徵外ヨリ來テ大使ニ見ント請ヒ、直チニ其室內ニ闖入ス。大使望ミ見テ起立握手シ、告ゲルニ本日ハ韓官ト議辨中ナリ、晤談ニ便ナラザルヲ以テセシカバ大徵筆ヲ把リ書示シテ當然議事ニ列スベキ資格ヲ具有スルガ如キ意ヲ通ズルヲ始メトナシ、數次筆對結局我大使ハ事韓ニ係ルモノハ韓官ト辨ジ、事淸ニ係ルモノハ卽チ淸官ト辨ズベシ、混同スベカラズ、又タ彼ノ書示中全權ノ字樣ナシトアルヲ以テ、果シテ然ラバ商議スルモ益ナシ、私晤ハ之ヲ他日ニ附スベシト答ヘ、遂ニ大徵ノ干涉ヲ絕ツ。大徵玆ニ於テ又タ一書ヲ示シ、宏集ガ先ヅ亂黨ヲ查辨セザルヲ詰責シ出去レリ。大使亦タ求メテ一讀ス、殆ト朝鮮ハ隱然淸ノ屬國ナリト謂フガ如シ。因テ極メテ之ヲ宏集ニ詰リタルニ、宏集反覆決シテ他國ノ干涉ヲ受ケザルコトヲ誓言ス。是ニ於テ議再ビ前ニ復シ、少時間ニシテ全案ヲ議定シ、約書ハ明日ヲ以テ鈴印スルヲ期ス。

九日大使隨員ヲ率ヒ議政府ニ造リ、約書ニ調印シテ之ヲ交換シ、國書ノ草案ヲ閱定シ、又從前ノ往復照會啟文ノ論辨ニ係ル者二十五通ヲ互ニ繳還スベキコトヲ約シテ還ル。其條約ニ曰

此次京城ノ變係ル所小ニ非ス大日本皇帝深ク宸念ヲ軫セラレ玆ニ特派全權大使伯爵井上馨ヲ簡ヒ大朝鮮國ニ至リ便宜辨理セシメラル大朝鮮國大君主宸念均シク敦好ヲ願フ乃金宏集ニ委スルニ全權議處ノ任ヲ以テシ命スルニ懲前毖後ノ意ヲ以テセラレ兩國ノ大臣和衷商辨シ左ノ約款ヲ作リ以テ好誼ノ完全ヲ昭カニシ又以テ將來ノ事端ヲ防ク玆ニ全權ノ文憑ニ據リ各々名ヲ簽シ印ヲ鈴スル左ノ如シ。

約款

第一　朝鮮國國書ヲ修メテ日本國ニ致シ謝意ヲ表明スル事

第二　此次日本國遭害人民ノ遺族竝ニ負傷者ヲ恤給シ暨ヒ商民ノ貨物ヲ毀損掠奪セラル、者ヲ補塡シテ朝鮮國ヨリ拾壹萬圓ヲ撥交スル事

第三　磯林大尉ヲ殺害シタル兇徒ヲ查問捕拿シ重ニ從ヒテ刑ヲ正ス事

第四　日本公館ハ新基ニ移シ建築スルヲ要ス當ニ朝鮮國ヨリ地基房屋ヲ交附シ公館暨ヒ領事館ヲ容ルニ足ラシムベシ其修築增建ノ處ニ至テハ朝鮮國更ニ二萬圓ヲ撥交シ以テ工費ニ充ツル事

第五　日本護衞兵辨ノ營舍ハ公館ノ附地ヲ以テ擇定シ壬午續約第五款ヲ照シ施行スル事

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵　井　上　馨印

印大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特　派　全　權　大　臣　左　議　政　金　宏　集印

別章

一、約款第三第四條ノ金圓ハ日本銀貨ヲ以テ算ス須ク三個月ヲ期シテ仁川ニ撥完スベシ

一、第三條兇徒ヲ處辨スルハ立約後二十日ヲ以テ期ト爲ス

大日本國明治十八年一月九日　、

特派全權大使從三位勳一等伯爵　井　上　馨印

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特　派　全　權　大　臣　左　議　政　金　宏　集卽

十日大使公使及ヒ文武官ヲ帶ヒテ國王ニ樂善堂ニ謁シ、和議ヲ賀シ辭見ノ意ヲ奏ス。是日宏集照會ヲ致シ罪人ノ交附ヲ乞フ、翌日照覆ヲ送リ兩國未タ犯罪互交ノ約ナキ旨等ヲ以テ之ヲ拒絶ス。

商議ノ定マルヤ、大使近藤眞鋤ヲ外務書記官ニ任ジ、代理公使ト爲シ、護衞兵一大隊ヲ京城ニ留メ、十一日公使ヲ率ヒテ仁川ニ還ル。是日議官井上毅ニ意ヲ授ケ、淸官吳大徵ニ造リテ辭別ノ意ヲ通セシム。要ハ使臣ノ進退ハ一ニ訓令ニ依ル、今貴我ノ權限均シカラズ、爲メニ善後ノ事宜ヲ商議セント欲スレトモ能ハザルハ遺憾トスル所ナリト云フニアリ。

一月十二日大使仁川ヲ發シ十九日東京ニ復命セリ。此行ヤ大使命ヲ奏セショリ此ニ至ルマデ僅カニ三十日ナリ、二十一日條約書ヲ公布ス。蓋シ國民ノ疑惑ヲ解ンガ爲メナリ。

二十八日朝鮮約ニ由リテ兇犯二名ヲ處刑ス。

二月十六日朝鮮出使徐相雨モルレンドルフ東京ニ至リ、二十日入見シ國書ヲ上ル、謝罪ノ意ヲ表スルナリ、其書ニ曰ク。

大朝鮮國大君主敬白之良友大日本國大皇帝。朕深惜朝有逆臣。致有十月十七日之事。一時變亂延及于隣國官商。幾使兩國失和。乃承大皇帝惠顧邦交。不忘素好。簡派全權大使伯爵井上馨前來會議。現已一切妥協。朕以貌躬凉德。化導無方。重貽友邦之戚。曷勝惋惜。玆遣禮曹參判徐相雨兵曹參判穆麟德充出使正副大臣。前往東京。覲見大皇帝。覲呈國書。以展懲毖之意。恭稔大皇帝政治綦隆。純嘏無彊。深願後此兩國官商相安無事。庶萬民無不平之心。以後兩國上下和洽。不致再啓紛爭。此我兩國朝廷之福士民之幸也。

大朝鮮國開國四百九十三年朕卽位二十一年十一月　日於漢城昌德宮親署名鈐國寶

御　名

奉　勅　　議政府領議政沈舜澤

是ニ於テ朝鮮ノ和好全ク成ル。

然ルニ今回朝鮮京城ノ變延テ日清兩國ニ交渉シ、事至重ニ屬ス。始メ井上大使ノ京城ニ赴クヤ、同地ニ於テ清國欽差ト會同辨理スベキ全權ヲ附セラレタルモ、奈何セン該欽差ニ我ト同樣ノ資格ナキヲ以テ、該大使ハ單ニ使務ヲ對韓事宜ヲ辨理スルニ止メテ歸朝セリ。是ニ於テ二月廿四日參議兼宮內卿伯爵伊藤博文ヲ特派全權大使ニ任ジ清國ニ派遣スルノ擧アリ。又參議兼農商務卿伯爵西鄕從道ヲ別遣シテ使事ヲ協辨セシメ內訓ヲ附ス、曰

參議兼宮內卿伯爵　伊藤博文
參議兼農商務卿伯爵　西鄕從道

今度日清交渉ノ件ハ事至重ニ屬スルニ困リ兩國和好ノ大局ニ關シ深ク宸慮ヲ勞セラレ宮內卿ヲ特派全權大使トシ竝ニ御用ヲ以テ農商務卿ヲ派遣セラレ候ニ付テハ兩官ニ於テ聖意ヲ奉體シ使務ヲ協議シ辨理可有之此段勅旨ヲ奉シ內訓ニ及候事

明治十八年二月二十四日

太政大臣公爵　三條實美印

二十五日國書及ビ委任狀ヲ大使ニ授ケ、又訓令ヲ大使及榎本公使ニ付シ、榎本公使ヲシテ大使ノ使務ヲ帮辨セシム大使委任狀ノ末段ニ曰ク、

便宜事ニ從ヒ訂約蓋印セシム其訂定スル所ハ朕ガ親ラ臨テ處分スルト異ナルコトナシ更ニ批准ヲ行フヲ要セサルベシ

京城ノ變アリシ以來國ヲ擧テ清兵ノ無狀ヲ憤リ、征清ノ必要ヲ說キ朝野騷然タリ。同二十七日太政大臣三條實美叡旨ヲ以テ各長官ニ內諭ス。

昨年十二月朝鮮漢城ノ變ニ於テ清國ト交渉ノ事件ニ付今度伊藤參議ヲ特派全權大使トシテ清國ニ派遣セラレ辨理ノ全權ヲ御委任有之候抑外國交渉ノ件タルヤ事體重大ニ付各國現在ノ形勢ト將來ノ結果ヲ觀察シ國家永遠ノ大計ヲ誤ラス隣好ヲ全クシ善後ノ方嚮ヲ取ルヘシトノ叡慮ニ有之候各官宜ク朝意ヲ體認スベシ此旨內諭候事

明治十八年二月二十七日

太政大臣公爵　三條實美

三月十四日伊藤大使長崎ヨリ天津ニ達ス。文武官之ニ隨フ者二十一人、清廷素ト我大使ノ北京ニ進ムコトヲ欲セズ、之ヲ天津ニ留メントシ、既ニ李鴻章ニ商議ノ全權ヲ與ヘ、着津ヲ待テ直チニ開談ニ及バントス。然レドモ大使ハ此行國書ヲ奉ズルヲ以テ、北上謁見ヲ請フテ之ヲ親捧セザルヲ得ザル旨ヲ述ベ、十七日天津ヲ發シ二十一日北京ニ入リ、越テ一日榎本公使ヲシテ總理衙門ニ至リ、

謁見奉書ノ儀ヲ議シ照會ヲ致サシム。清官其君上ノ幼冲ヲ以テ辭ト爲シ謁見ヲ辭ス。大使爭ハズ、遂ニ其理由ヲ書面ニ作リ、以テ復答スルコトヲ約ス。二十七日大使總理衙門ニ造テ初テ王大臣ヲ見、宇內ノ大勢ヲ論ジ、益日清兩國ノ誠ヲ開テ相待チ東洋ノ和局ヲ維持シ、且其振興ヲ圖ルノ必要ヲ說キ、尙ホ其意ヲ盡サン爲メ之ヲ書ニ筆シ、以テ王大臣ニ示セリ。李鴻章受クル所ノ全權ヲ證明セシメ、後又王大臣ニ向ツテ使命ノ大要ヲ議シ三十一日北京ヲ去リ、四月二日天津ニ至ル卽日書ヲ裁シテ明日ヲ期シテ會同商議ヲ擬ス。

三日大使榎本公使等ヲ以テ直隷總督衙門ニ往テ鴻章ニ晤ス、吳大徵續昌之ニ參ス。議開ク大使乃今日者商議ノ主腦トスル所ハ兩國和好ノ情誼ヲシテ益鞏固ナラシメムトスルニ在リ、議案ヲ分ツテ二項トス。一ヲ既往ト爲シ二ヲ將來ト爲ス。請フ先將來ヨリ說起サントス、我國ノ兵ヲ朝鮮ニ置クハ韓民ノ橫暴ニ原因シテ訂約シタルモノニ係ル、之ヲ永遠ニ存セントスルニアラズ、既近ク其半ヲ減セシカバ僅ニ一中隊ニ過ギザリシ、而ルニ今回ノ變不幸ニシテ貴我兩兵ノ間ニ交涉セリ、推テ之ヲ云フトキハ今後兩兵ノ韓地ニ駐ムルハ交際ノ間危險ヲ滋シ和好ヲ破ル炳焉火ヲ觀ルガ如シ。苟兩國ノ交誼ヲ保タント欲セバ貴國駐韓ノ兵ヲ撤回セラレンコトヲ望マザルヲ得ズト、又既往ニ就テ曰ク、漢城變ニ我ガ公使ハ韓王ノ請ニ困リ、兵ヲ率キテ王宮ニ入リシナリ、貴國將官其王宮ニ在ルヲ知リ、大兵ヲ縱ツテ突入ス。是ニ於テカ爭鬪起レリ、將官倘シ時間ヲ酌量シ善ク協議ヲ盡サバ難ヲ避クルモ難カラズ。當時我ガ兵內ニ在リ、貴國ノ兵ハ外ヨリス、外ヨリスル者ハ進攻ノ地ニ立チ、內ニ在ル者ハ防守ノ位ニ居レリ。以テ其勢ヲ證スルニ足ル、我ガ政府ハ此ノ攻擊ヲ認メテ國威ヲ損害スルノ大ナル者ト爲シ、貴國將官ヲ責罰スルコトヲ要求セザルヲ得ズ。而シテ貴國兵ノ我ガ臣民ヲ暴殺シ、財物ヲ掠奪シタルガ如キモ亦應分ノ塡補ヲ求メントス。是皆將官ガ職權ヲ盡サヾルノ致ス所ナレバ閣下斯ノ要求ヲ以テ穩當ト爲スナラン。

爾來十五日ニ至ルマデ談判ヲ重ヌルコト凡ソ六回、互ニ討論爭議スル所アリ、此日議漸ク合フ、鴻章乃チ曰ク「今回ノ議タル貴國　皇帝之ヲ閣下ニ命ゼズ、我皇帝本大臣ヲシテ商對セザラシメバ恐ラク妥協ノ局ヲ結ブコトヲ得ザラン、是レ諛辭ニ非ズ、又誇言ニ非ズト、蓋兩國互相曲ル所アリテ能ク此難件ヲ料理スルヲ謂フナリ。三月十八日大使迎賓館ニ赴テ鴻章ト約書ヲ訂結シ、各記名調印ヲ爲シ而メ將官戒飭兵員審辨ノ照會文ヲ領セリ其約欵ニ曰ク。

大日本國特派全權大使參議兼宮內卿勳一等伯爵　伊　藤

大淸國特派全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣兵部尙書直隷總督一等肅毅伯爵　李

各々奉スル所ノ諭旨ニ遵ヒ公同會議シ專條ヲ訂立シ以テ和誼ヲ敦クス有ル所ノ約欵左ニ臚列ス。

一、議定ス中國朝鮮ニ駐紮スルノ兵ヲ撤シ日本國朝鮮ニ在リテ使館ヲ護衞スルノ兵辨ヲ撤ス畫押蓋印ノ日ヨリ起リ四個月ヲ以テ期トシ限內ニ各數ヲ盡シテ撤回スルヲ行ヒ以テ兩國滋端ノ虞アル

コトヲ免ル中國ノ兵ハ馬山浦ヨリ撤去シ日本國ノ兵ハ仁川港ヨリ撤去ス。

一、兩國均ク允ス朝鮮國王ニ勸メ兵士ヲ教練シ以テ自治安ヲ護スルニ足ラシム又朝鮮國王ニ由リ他ノ外國ノ武辨一人或ハ數人ヲ選僱シ委スルニ教演ノ事ヲ以テス嗣後日中兩國均ク員ヲ派シ朝鮮ニ在リテ教練スルコト勿ラン。

一、將來朝鮮國若シ變亂重大ノ事件アリテ日中兩國或ハ一國兵ヲ派スルヲ要スルトキハ應ニ先ツ互ニ行文知照スベシ其事定マルニ及テハ仍卽撤回シ再ヒ留防セス。

大日本國明治十八年四月十八日　　特派全權大使參議兼宮內卿勳一等伯爵　伊藤博文　花押

大清國光緒十一年三月初四日　　特派全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣兵部尚書直隸總督一等肅毅伯爵李鴻章　花押

照會ニ曰、

大清欽差全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣兵部尚書直隸總督一等肅毅伯爵李照會ノ事ヲ爲ス照シ得タリ上年十月朝鮮漢城之變中國ノ官兵ト日本官兵ト朝鮮ノ王宮ニ在リテ爭鬪ノ一節ハ實ニ兩國國家意料ノ外ニ出ツ本大臣殊ニ惋惜ヲ爲ス惟念フ中日兩國ノ和好年久シ中國ノ兵官等一時情急ニ已ムヲ得スシテ爭鬪スト雖究ニ未小心ニ事ヲ將フ能ハス應ニ本大臣ニ由リ文ヲ行リ戒飭スヘシ貴大使ノ送リ閱スル日本ノ民人本多收之輔委等ノ供狀ニ漢城內ニ在リテ華兵屋ニ入リ掠奪シ人命ヲ戕斃スル情事アリト謂フニ至リテハ但中國竝ニ的確ノ證據ナシ自應ニ本大臣ニ由リ員ヲ派シ訪查シ明確ニ供證ヲ取具シ果シテ當日實ニ某營ノ某兵アリテ街ニ上リ事ヲ滋シ日民ヲ殺掠セシコト確トシテ見證アレハ定メテ中國ノ軍法ニ照シテ嚴ニ從ヒ拏辨スヘシ此ノ爲メニ備ニ具シ貴大使ニ照會シ查照ヲ煩スヲ請フ須ラク照會ニ至ルヘキ者右照會ス大日本特派全權大使參議兼宮內卿勳一等伯爵伊藤

光緒十一年三月初四日

約書ハ清國全權大臣ノ需ニ應ジ記名調印ノ日ヨリ二ヶ月以內ヲ期シ兩國皇帝陛下ノ批准ヲ經唯タ交換ヲ要セスシテ兩國駐劄公使ヲ以テ相互知照スルヲ約ス。

是ニ於テ兩國交涉ノ一大難事件ニ妥穩ニ局ヲ結ビ、伊藤大使ハ十九日天津ヲ發シ二十八日東京ニ復命ス。西鄕農商務卿モ亦還ル。五月廿一日條約ノ批准成ル、前日之ヲ北京ニ電報シ榎本公使ヲシテ清政府ニ照會セシメ、清政府ハ其廿三日ヲ以テ照覆セリ、卽チ前日ノ約ニ從フナリ。

七月廿一日ニ至テ我兵ハ仁川港ヨリ清國兵ハ馬山浦ヨリ數ヲ盡シテ一齊ニ撤去セリ四ヶ月期限ノ約ヲ踐ム所以ナリ。

護衞兵撤回ニ關シ朝鮮政府ヘ照會ノ事　十八年六月七日

京城ノ變アルヤ我護衛兵ヲ增シテ一大隊ヲ置ケリ、天津條約成ルノ後チ先一中隊ヲ撤回ス、近藤代理公使六月十四日ヲ以テ朝鮮政府ニ照會シテ十五年締約ノ條款ニ據リ置ク所ノ護衛兵現ニ許多ノ兵備ヲ要セズト認メ之ヲ減撤スル旨ヲ通報シ、朝鮮政府承諾ノ旨ヲ照覆ス。

抑モ我國ガ護衛兵ヲ朝鮮ニ置クハ十五年ニ締結ノ濟物浦條約ニ原因シ撤置ノ自由ハ全ク我ニ在ル者タリ。今撤兵ノ事アリト雖モ舊約ヲ消滅スルニ非ラザルヲ表明セントス。故ニ文中故ラニ日清條約ノ項ヲ揭ゲザリシナリ。七月十八日高平代理公使全兵撤回ノ事ヲ朝鮮政府ニ報ズルヤ、尙ホ益此意ヲ申辨シ、啻ニ十五年締約云々ヲ揭グルノミナラズ、加フルニ目下警備ヲ要セズト認メ、暫ク撤回ヲ行フ。將來如シ事アルニ遇フテ再ヒ護衛スベキニ至テハ仍ホ當ニ時ニ隨テ兵ヲ派シテ護衛スベシ、此次警備ヲ撤スルニ困リテ誤テ前約ヲ廢滅スト謂フヲ得ズ」トノ明文ヲ揭ゲ、朝鮮政府又承諾ノ照覆ヲ爲セリ。撤兵ノ一事ハ清韓ノ關係各異ナリ、仍テ玆ニ之ヲ特書ス。

朝鮮政府金玉均ノ引渡ヲ請ヒ我政府應セサリシ事　十八年

十八年三月朝鮮政府モルレンドルフ、徐相雨ヲ我國ニ遣シ、王均等ノ罪ヲ鳴ラシ之ヲ查拿交出センコトヲ望ミタリ。然レトモ兩國間ニ犯罪人交還ノ約ナク、又公法ニ國事犯ヲ交出スルノ例ナキヲ以テ吾政府ハ之ヲ峻拒セリ。

朝鮮人金玉均ノ本邦退去竝ニ刺客池運永送還ノ事　十九年

朝鮮政府池運永ナル者ヲ遣ハシ、竊カニ金玉均ヲ窺ハシム。金玉均ハ在韓知己ノ密報ニヨリ早ク既ニ之ヲ知リ警戒怠ラズ、同年五月書ヲ外務卿ニ呈シ彼ノ池運永ナル者ハ國王ノ委任ヲ受ケ已ヲ刺殺センガタメニ來リタル趣ヲ報ジ、警視廳モ亦其事狀ヲ探偵シテ之ヲ申報セリ。依テ外務卿ハ六月七日電信ヲ以テ、駐韓高平代理公使ニ命ジ、其實否ヲ朝鮮政府ニ糺シ、尙ホ告グルニ玉均ハ該委任狀ヲ證トシテ我法庭ニ對シ公然一身ノ保護ヲ請求セントスルガ故ニ、我政府ハ內地ノ安寧竝ニ日韓間ノ交誼ヲ保タンコトヲ慮リ、玉均ニ退去ヲ命ゼンコトヲ以テシ、併セテ池運求召還ノ事ヲ該政府ニ勸告セシメタリ。是我政府ハ玉均ノ本邦ニアルハ始終日、淸、韓間ノ交誼ヲ砥礪スルノ一大素因ト認メタルヲ以テナリ。依テ日ヲ期シテ之ヲ國境外ニ放逐スルノ議ニ決シ、六月十二日神奈川縣知事ヲ經テ右命令書ヲ本人ニ交付セリ。然ルニ玉均因循曠日期ニ臨ミテ發サザルヲ以テ、更ニ帝國政府ノ命ヲ用ヒザルヲ名トシテ八月九日之ヲ小笠原島ニ放置シ、以テ我國內ノ治安ヲ保全シ外交上ノ障碍ヲ除却スルノ地ヲ爲セリ。

朝鮮政府亦我勸告ヲ容レ、池運永ヲ召還シ、其命令執行ヲ我政府ニ依賴スル旨高平公使ヨリ回電アリタルヲ以テ、我政府ハ特ニ神奈川縣知事ニ訓令シ、池運永ニ朝鮮政府ノ命令ヲ傳達セシメ六月廿三日之ヲ本國ヘ護送セリ。

朝鮮國歐米諸國ヘ使節派遣ノ事　二十年

二十年朝鮮政府ハ締盟國ニ修信ノ意ヲ表センガタメ、歐米諸國ヘ使節派遣ノ議ヲ決シ、同年八月十九日協辨內務府事朴定陽ヲ米國駐劄全權大臣ニ任命セリ。

是ヨリ先袁世凱ハ該政府財政困難ノ際、此ノ不急ノ擧ヲナシ、更ニ一層ノ巨費ヲ生ズルノミナラズ、任國ニ於テ費用給足セザルトキハ却テ他國ノ訾笑ヲ招クベシト詰問シ、併テ其事タル清國政府ノ協贊ヲ經ヘキモノナリト痛論シテ以テ其反省ヲ促セリ。

然ルニ國王ハ締盟國遣使ハ清國ニ關係ヲ及サヾルモノナレバ、特ニ協議スルヲ要セズト認メ、九月廿四日朴定陽ニ陛辭ノ式ヲ與ヘ、卽夜京城ヲ出立セシメタリ。袁氏之ヲ聞イテ大ニ怒リ、直チニ歸裝ヲ整ヘ强迫以テ已レガ意見ヲ達センコトヲ勉メ、又タ領事陳同書ヲ朴使ノ旅宿ニ遣シ、其歸京ヲ促カサシム。是ニ於テ遣外使節一案ハ頓ニ清韓間交涉事件トナリ、在京城各國公使モ亦タ連合運動ヲ試ミントスルノ景勢ニ至リシヲ以テ、我政府ハ十一月十四日近藤代理公使ニ清韓紛議ニ付テハ可成關係スルコトヲ避クベシ、但シ日韓條約上ノ權利貿易上我商人等既得ノ利益ヲ害スルモノト認定スル場合ニハ、政府ノ指令ヲ乞フベシト訓令シタリ。

而シテ朝鮮政府ハ此事ヨリ清國政府ノ歡心ヲ失ハンコトヲ恐レ、狀ヲ具シテ清國政府ノ裁可ヲ得、玆ニ漸ク朴定陽ヲ任國ニ出發セシムルヲ得タリ。清國政府ノ之ヲ裁可セシハ蓋シ各國ノ抗議ヲ憚リシ結果ナラン。

斯クテ朴定陽ハ任地在留清公使ニ對シテハ公務上ノ文書ハ呈文（卽チ清國吏牘上行文ノ一ニシテ下司ヨリ上司ニ致ストコロノ文體ナリ）ヲ用ヒ、清公使ハ硃筆照會（卽チ平行文ノ一ニシテ平常公文ノ往來ナキ官署ノ間偶然事アルニ遇シ用ユル所ノ文體ナリ）ヲ用ラル、ベシトノ清國政府ノ照會ヲ持シテ明治廿一年九日米國華盛頓府ニ安着シ、同月十七日ヲ以テ大統領ニ國書捧呈ノ儀式ヲ了シタリト雖モ、着府後第一ニ自ラ清館ヲ訪問セザル廉ヲ以テ米國駐在清公使トノ間ニ於テ更ニ一條ノ紛議ヲ生ジ、遂ニ其說明ヲ清公使ヨリ朝鮮政府ニ問フ所トナル。

朝鮮政府ハ其答辨ニ苦ミ病氣ノタメ歸國セシ朴定陽ヲ罷職ノ罪ニ處シテ以テ漸ク其局ヲ了セリ。

日韓通漁規則改訂ノ事　十八年六月ヨリ廿三年一月ニ至ル

十六年七月廿五日ヲ以テ朝鮮政府ト締約セル日韓通商章程第四十一款ニ「魚稅及其細則ハ該章程兩年間施行ノ後其情況ニ應シ酌定スヘシ」トアリテ、十八年六月ハ卽チ此通漁規則ヲ協定スベキ期

限ナレバ、朝鮮政府ハ六月十三日高平臨時代理公使ニ向テ其協辨ヲ請求セリ。爾來我政府ハ能ク其利害ヲ考査シテ草案ヲ作リ、十九年五月商議ノ爲メ之ヲ高平公使ニ送リ、併セテ濟州島往漁解禁ノ事ヲ確定スベキ旨ヲ訓令ス。帝國臣民ハ日韓通商章程第四十一款ニヨリ、濟州島ニ往漁スル權アリト雖モ、該島ハ風俗頑愚土民外人ノ來漁ヲ好マザルニヨリ、其情ヲ察シ我政府ノ好意ヲ以テ去ル十七年中九州近海ノ漁民ニ諭シテ暫ク該島ニ往漁スルコトナカラシメタリ。今ヤ通漁規則協定ノ議起ル、前キノ往漁停止ヲ解除セシムルハ固ヨリ當然ノ結果ナレバ、卽チ今回商議ノ際併セテ之ヲ確定セシメントセシモノナリ。然ルニ彼政府ハ漁業稅額原案（乘組員十名以上日本銀貨五圓／同五名以上九名以下同二圓五十錢／同四名以下同一圓五十錢）ニ三倍ノ增加ヲ與ヘントスルノ意見ヲ固持シ、加之濟州島ノ漁業解禁ヲ欲セザルヲ以テ議合ハズ、荏苒遂ニ五年ヲ經過セリ。其間駐朝我代理公使ノ時ニ至リ稅額ハ案ノ二倍トシ、濟州島ノ漁業ハ二十四年五月迄往漁停止ヲ諾シ、茲ニ議漸ク協ヒ、同月十二日ヲ以テ之ニ記名調印セリ則チ二十三年一月八日ノ勅令ヲ以テ公布セラレタル日本朝鮮兩國通漁章程是ナリ。

日韓通商章程竝ニ通漁規則改訂ノ事　廿一年七月ヨリ廿五年一月ニ至ル

日韓通商章程第四十二款ノ規定ニ從ヒ、明治廿一年七月廿一日外督辨趙秉式ハ近藤代理公使ニ向テ其改訂ヲ要スル旨ヲ告知セリ。然ルニ我政府ハ該章程竝ニ規則中未ダ改訂ヲ必要トスルノ條項ヲ發見セズト雖モ、彼政府ニ於テ改訂ヲ要スルノ條項アラバ速ニ案ヲ具ヘ提議セシムベキ旨ヲ訓示セリ。然ルニ該政府ハ其ノ發議者タルニモ拘ハラズ、爾來歲月ヲ空過シ、二十四年卽チ濟州島往漁停止滿期ノ年ニ至リ再度該問題ヲ提起シ、該島ハ全羅道ニ屬セザルガ故ニ、我人民ハ通漁ノ權ナキ旨ノ新口實ヲ設ケ、併セテ通商章程ヲ改正シ、其條項ヲ明晰ナラシメンコトヲ求ム。要スルニ章程改訂ノ請求ハ主トシテ、濟州島ノ漁業禁止ニアリテ他ハ恰モ其副目的物タルガ如シ。梶山辨理公使ハ該件ニ關シ商議ノ權ナキ旨ヲ回答シ、且ツ其提議ノ不當ナルヲ痛責ス。然リト雖モ該國々事多端ニシテ財政困弊ノ點ハ夙ニ我政府ノ諒知スル所ナルヲ以テ、數回誤判ヲ經廿四年六月一日ヨリ同年十一月迄更ニ六ケ月間ノ往漁停止繼續ノ事ヲ承認セリ。

二十四年十月中朝鮮政府ハ協辨內務府事李善得（リゼンドルフ）ヲ辨務使ニ任ジ、統理衙門主事李鉉相ヲ副トシ、來リテ改正談判ヲ東京ニ開カンコトヲ請フ。然ルニ帝國政府ハ豫テ駐鮮帝國公使ニ訓令ヲ下シ、京城ニ於テ商議セシムベキ筈ナルヲ以テ其請求ヲ拒絕セリ。

此際朝鮮代理公使モ亦大ニ請フ所アルヲ以テ、其ノ事情ヲ諒察シ、栗野政務局長ニ命ジテ豫備會議ヲ開カシメ、其云フ所ヲ聽クニ、結局濟州島ノ通漁ヲ禁ジ、其報酬トシテ大同江ヲ開クト云フニアリ、我政府ノ見ル所ハ濟州島漁業禁止ノ件ハ久シク朝鮮政府ノ請求シテ已マザルコトナレバ、其交誼ヲ重ンジ、或ハ其要求ニ應ズルモ妨ゲナシト雖モ、大同江ノ開港ヲ其報酬ニ充ツルハ容易ニ約

諾ヲ與フルヲ得ズ。何トナレバ往漁禁止ノ結果ハ我漁民ニ幾何ノ損害ヲ與フルヤモ知ルベカラズシテ、其報酬タル大同江開港ハ毫モ彼等ニ益スル所ナシト云フニアリ。此ノ如ク兩國ノ見ル所同ジカラズ、且大同江ノ實際ヲ視察セシムルノ必要ヲ感ジ、之ガ爲メ林交際官試補ヲ同所ニ發遣セリ。幾モナク林試補ハ歸朝ノ途次難船ニ遭ヒ、溺死シ該辨務使等ハ談判ノ要領ヲ得ズ徒ラニ淹留踰年シテ去レリ。

元山防穀令ノ事　二十二年ヨリ二十六年ニ至ル

明治二十二年ハ朝鮮國三十年來稀有ノ豐年ニシテ當時農民等ノ歡喜セシコトハ普ク人ノ知悉スル所ナルニモ拘ラズ、同年九月咸鏡道鹽司趙秉式ハ誤道ノ凶歉ヲ名トシ、諸州ニ防穀令ヲ布キシハ條約ニ違背シ制規ヲ破毀シタル行爲タルヲ以テ、近藤代理公使ハ朝鮮政府ニ向テ詰難セシモ、言ヲ曖昧模糊ニ付シ、翌二十三年四月廿二日漸ク此不法ノ禁令ヲ解クニ至ル。此不法ナル穀防令實行中、即チ二十二年九月ヨリ翌二十三年四月ニ至ル殆ンド八ケ月ノ間ニ於テ、元山在留ノ我商民ハ直接間接ニ莫大ノ損失ヲ蒙リシヲ以テ、狀ヲ具シ損害賠償要求ノ願書ヲ二十三年十月十三日在京城我公使館ニ提出セリ。實ニ其金額ハ十四萬千六百二十六圓九十五錢七厘ナリ。公使ハ互ニ之ニ意見ヲ付シテ之ヲ外務大臣ニ具申シ、二十四年一月下旬被害者モ亦總代委員梶山、田中等ヲ東上セシメ外務省ニ就テ請願スル所アリ。由テ我政府ハ二月下旬特ニ取調委員ヲ元山ニ派遣シ實際ヲ審査セシメシニ、其結果トシテ現出シタル元金額ハ九萬千七百八拾九圓七十四錢四厘ニシテ、之レニ利子ヲ附加シタルモノハ相當ノ賠償金額ト是認セザルヲ得ズ。二十四年九月六日帝國政府ハ朝鮮政府ニ對シ賠償要求談判ノ訓令ヲ梶山辨理公使ニ與ヘ、同公使ハ同年十三月初旬ヲ以テ之ヲ開談セリ。是ヲ本件談判ノ開始トス。而シテ當時京城ニ出張シタル被害者總代委員ハ更ニ同年十一月(談判開始ノ前月)迄ハ利子ヲ加算セラレンコトヲ我公使使ニ請求シ、是ニ於テ元利總計十四萬千四百四十二圓二十四錢七厘ト成ル、是レ今回彼政府ニ要求スル賠償金ノ總額ナリ。

然ルニ該政府ハ爾來種々ノ口實ヲ設ケテ其責任ヲ免カレンコトヲ謀リ、或ハ事實精確ヲ缺クヲ以テ兩國官吏ノ立會審査ヲ要スト云ヒ、到底速決ノ望ミナカリシモ、右再審査ノ如キモ其結果或ハ已ニ利ナラザルノミナラズ、却テ我政府ノ感情ヲ害シ利害相償ハザランコトヲ慮リ、同年六月俄ニ此立會審査ノ企テヲモ停止シ、尙ホ數回ノ談判ヲ重ネタル末同年八月十一日閔督辨ハ國情ノ困弊ヲ訴ヘテ六萬二千四百圓ヲ以テ遂ニ此ノ事局ヲ結ハンコトヲ我公使ニ確答シ來レリ。

然ルニ損害ハ人民ノ損害ニシテ政府ノマヽニ增減スベキモノニアラザルヲ以テ、先ヅ被害者ノ承諾ヲ促カサヾルヲ得ザル等ノ事情アリテ、其後原通商局長ヲ朝鮮ニ遣シ尙ホ梶山公使ノ歸朝大石公使ノ新任ヲ見ルニ至レリ。

大石辨理公使ハ二十六年一月下旬京城ニ赴任ノ後、數回强硬ノ談判ヲ重ネ、我政府モ亦タ他ニ多少斡旋セシ所アリ、遂ニ同年五月十九日黃海道防穀損害要償等數件ヲ併セ、都合賠償金十一萬圓ヲ以テ事局ヲ結ブコトヲ約諾シ、是ニ至リテ前後四年ノ懸案ニ係リシ一大要償事件ヲ無事ニ終了ス。

朝鮮政府貨幣鑄造事業ニ關スル事　自廿四年九月　至廿六年十月

十九年以來朝鮮政府ハ造幣事業ニ鋭意傾心セルモ、能ク其好果ヲ修ムルヲ得ズ。金嘉鎭安駉壽等之レヲ患ヒ韓廷諸大臣ノ異議ヲ顧ミズ、國王殿下ニ建議シ、其裁可ヲ得テ廿四年九月十九日在本邦朝鮮代理公使金嘉鎭ハ大坂府々會議長大三輪長兵衞ヲ以テ貨幣制度ノ改革竝ニ新錢貨鑄造等ノ事業ヲ委任センコトヲ欲シ榎本外務大臣ノ紹介ニ由リ同年九月二十九日委任條項ノ契約ヲ結ビ、金公使ハ大三輪ヲ同伴シテ歸國セリ。然ルニ韓廷諸大臣ハ素ヨリ同意ノ件ニアラザルヲ以テ、一旦同意ヲ表シタリシ閔泳駿ノ如キモ陰ニ當時ノ領議政ヲ教唆シテ反對ヲ試ミ、既ニ該事業モ水泡ニ歸セントスルニ至リシモ、金嘉鎭ハ國王ノ內命ヲ受ケ非常ノ斡旋ヲ以テ各大臣ヲ遊說シ、漸ク二十四年十二月六日銀貨鑄造交換局ノ設立ヲ見ルニ至リ、是ニ於テ朝鮮政府ハ大三輪ヲ交換署會辨ニ任ジタリ。是ヲ帝國臣民外國政府ノ官職ヲ受クルノ始トス。

是ヨリ先我政府ハ朝鮮政府ノ依賴ニ愈ジ正金銀行ニ謀リ金拾七萬圓ヲ該政府ニ貸スニ當リ、其利金中若干ノ步割ヲ積立テシメタリシガ、現今剩ス所貳萬七百餘圓アルヲ以テ、之ヲ彼政府ニ寄贈スルニ決シ、二十五年四月之ヲ該政府ニ交付セリ。蓋シ該政府ヲシテ速ニ從來ノ幣制ヲ革メ因テ以テ財政ヲ整理セントスルノ事業ヲ翼贊スルノ意ニ外ナラザルナリ。

仁川ニ於ケル典圜局ノ新築成リ、新貨幣造高モ亦頗ル多額ニ登ラントスルニ際シ、突然大三輪ト地金輸出者增田信之トノ間ニ典圜局地金及建物器械引渡方ニ關スル軋轢ヲ生ジ、工業中止ノ不幸ヲ見韓官中又タ之ニ乘ジテ私利ヲ謀ル等ノ內情ヨリ、大ニ事業ヲ阻滯セシメ、加フルニ淸國政府ヨリハ新貨幣面ノ用語中朝鮮ノ上ニ大字ヲ冠シ、開國五百一年ト記シテ光緖ノ年號ヲ加ヘザルハ均ク是レ屬國既往ノ慣例ニ違反セルノ行爲ナル旨ヲ痛責シ、朝鮮政府之ニ抗辨シテ大朝鮮開國年ヲ記スルノ例ハ我ヨリ之ヲ始メシニアラズシテ、卽チ往歲英國ト條約ヲ締結スルニ當ツテ斯ク記スベシトノ貴政府ノ勸告ニ基キ爾來其例ニ準依セリ。今ニ至リテ詰責セラルヽハ其當ヲ得ズト云ヒ、淸國政府ハ之ヲ反論シテ夫ハ單ニ外交上ノ場合ヲ指示スルモノニシテ、內政ニ至ツテハ未ダ此ノ如キ例ヲ許セシコトアラズト主張シ、紛議釀生ノ極遂ニ荏苒二歲ヲ空過シ、廿六年ニ至ルモ尙ホ內外一致調和ヲ缺クヲ以テ、同年十月大三輪長兵衞ハ遂ニ其職ヲ辭シ造幣事業モ同時ニ又タ全ク停止セラレタリ。

金玉均謀殺、朴泳孝謀殺未遂及ビ朝鮮臨時

代理公使兪箕煥ニ關スル事

自廿七年三月
至廿七年十月

曩ニ國外退去ヲ命ゼラレタル金玉均ハ去ル二十一年七月小笠原島ヨリ北海道札幌ニ移サレ、續テ翌年又東京ニ歸ルヲ聽サル、蓋シ金玉均ノ南島ニアルヤ瘴炎ノ犯ス處トナリ、北海道ニアルヤ又タ風土ノ爲メニ惱マサレ、屢々陳情書ヲ呈シ、我政府ニ轉地ノ恩命ヲ請フ政府其ノ情ヲ愍憐シ之レヲ許セシナリ。然ルニ二十七年三月廿三日突然上海ニ赴キ、同二十八日同所米租界東和洋行ノ階上ニ於テ同伴者刺客洪鐘宇ノタメニ銃殺セラル。金玉均生前ノ知己從僕ハ其死骸ヲ日本ヘ送附セストスルノ途次忽チ上海居留地警察ノ抑ユル所トナリ果サズ、其後清國政府ハ朝鮮政府ノ請ヲ容レ、刺客洪及玉均ノ屍ヲ其軍艦ニ搭載シ、四月九日朝鮮仁川ニ回送シ、洪ハ厚ク其官民ニ歡迎セラレ、玉均ノ屍ハ大逆不道ノ罪ヲ以テ同月十五日揚花津ニ於テ凌遲ノ刑ニ處セラレタリ。初メ我政府ハ變報ヲ聞クヤ之ヲ朝鮮政府ニ轉報シ、後チ凌遲ノ刑ヲ加ヘントスルノ報ニ接スルヤ、直チニ其慘刑ヲ行ハザルヲ勸告セシモ意徹セズシテ遂ニ茲ニ至ル。

金玉均ノ上海ニ於テ刺殺セラルルヤ、同時ニ朝鮮人李逸植ナル者我東京ニ是テ朴泳孝ヲ刺サントシ事顯レテ縛ラル。初メ李逸植國王ノ內命ヲ奉ズト稱シ、金朴二人ヲ窺フコト數年其意ヲ果サズ、適々佛國ヨリ洪鐘宇ヲ扼シテ玉均刺殺ノ任ヲ托シ、尙ホ當時本邦漫遊ノ朝鮮人權東壽權左壽竝ニ金泰元日本人川久保等ト約シ、奇策ヲ以テ權兄弟ト相應シテ朴泳孝ヲ斃サント欲セシモ、金泰元ノ漏謀ノタメ三月廿九日親隣義塾ニ制縛監禁セラル。時ニ權兄弟逃レテ朝鮮公使館ニ潛伏シ代理公使兪箕煥我引渡請求ニ躊躇逡巡確答ヲ與ヘザルヲ以テ、四月二日我外務大臣ハ萬國公法ノ通義ニ基キ、公力ヲ以テ引渡處分ニ及バントセシニ、漸ク翌三日館外ニ於テ我警官ノ逮捕ニ任セタリ。是ニ於テ兪公使ハ我政府朝鮮公使ヲ待ツニ禮ヲ以テセザルモノトナシ、暫留スルコトヲ得ズトテ單ニ一篇ノ通告書ヲ我外務大臣ニ送リ、公使館事務取扱人ヲ指定セズ、四月五日突然東京ヲ出發セリ。仍テ我外務大臣ハ同日大島公使ニ電令ヲ與ヘテ、該政府ハ在日本公使館撤回ノ意思アルヤヲ問ハシメ、正ニ國際問題起ラントス。朝鮮政府ハ後チ辨理公使金恩轍ヲ歸任セシメ、兪公使ノ輕妄事ヲ誤リシト云フ廉ヲ以テ減下（職務上不都合ノ廉アルトキ國王ニ奏上シテ免スルヲ云フ）ノ處分アリ、以テ謝罪ノ意ヲ表セシニ付我外務大臣ハ彼通告書ヲ返還シテ兪公使離歸國ノ件ハ局ヲ了ス。

警官ハ朴泳孝及親隣義塾生數名ニ對シ私擅監禁犯罪者ト認メ、李逸植等ハ謀殺未遂及謀殺教唆ノ犯罪者ト認メ、東京地方裁判所ニ告發セシモ、各々證據不十分ヲ以テ免訴放免セラレ、李逸植、權兄弟金泰元ノ如キハ國外放逐ヲ命ジ、茲ニ十月初旬ヲ以テ結局セリ。

絶東問題ト露國ノ輿論

「ノウオエ、ウレミヤ」ハ六月十七日ノ紙上ニ論ジテ曰ク「タイムス」記者ハ清國外債ノ募集ニ關シ、露國ハ其政策上ニ於テ一大進歩ヲ爲セシコトヲ祝スルト同時ニ、佛獨兩國ハ絶東ニ於テ露國ニ助力ヲ與ヘタルモ、自カラ何等ノ利益ヲモ博取スルコト能ハザリシモノヽ如ク叙述シ、兩國ニ頂門一針ヲ加ヘタリ。然レドモ佛國政府ハ既ニ前週間來、巴里市内ニ斯ク迄囂々タリシ此種ノ詰問ニ對シ頗ル明晰ニシテ且ツ賢明ナル答辨ヲ與ヘタリ。我國諸新聞ハ今回露國ノ處置ニ對シ不平ヲ唱ヘザルモ、先キニ「ヘリゴランド」及阿非利加領土ノ分割ニ關スル英佛交渉事件ノ完結後、如何ナル怒濤ガ全獨國ノ新聞上ニ犯奔シタルカハ吾輩能ク之ヲ知ル。英國ハ價値ナキ一島ヲ抛棄シテ、阿非利加ノ獨領中錚々ノ名アリ、且ツ同洲東岸ノ好碇泊場ナル「ザンジバル」ヲ「カプリウヰ」宰相ノ手中ヨリ脱却シタリ。今回獨國ガ露佛ニ左祖シタルモ畢竟如此キ前例アルガ爲ニシテ、若シ英國ト提携セバ再ビ前述ノ如キ不利益ノ地位ニ陷ルノ虞アルヲ以テ、寧ロ露佛ト連合シ、貿易上ニ於テ英國ト競爭シ勝利ヲ博セント企圖シタルモノニシテ、現ニ三國ノ新同盟ハ遽カニ成立シ、英國ハ殆ンド孤獨ノ地位ヲ占メタルヲ以テ、獨國ハ其貿易ヲ充分ニ發達セシムルノ自由ヲ得タリ。好シ絶東ニ於ケル獨國ノ利益ハ、幾分カ露國ノ利益ト反對スルモノナシトセザルモ、英國ガ陽ニ親睦ノ意ヲ表シテ「パミール」ニ於ケル讓歩ヲ要求シ、陰ニ東歐地方ニ於テ露國ニ反對ノ示威運動ヲ教唆スルノ時ニ際シ、獨國ガ自カラ來テ同盟者タラント提議セシモノナレバ、露國ハ勿論之ヲ拒絶スルノ理由ヲ有セザルナリ。

前述ノ事情ハ如何ナリトスルモ「タイムス」記者ハ「日清戰爭ニ由リ發生シタル錯雜ナル政略上ノ變戯ニ於テ、巨利ヲ博シタルハ獨リ露國ノミ」ト稱スレドモ、其利益ハ果シテ如何ナルモノナルカ、今日ニ於テ未ダ之ヲ知ルノ途ナシ。又同記者ハ「朝鮮「レザレフ」港及清國領「パミール」ノ讓與、竝ニ滿洲經由「シベリヤ」鐵道線ノ延長等ニ關スル風説ハ未ダ信ヲ措クニ足ラズ、只ダ露國斡旋ノ報酬ハ必ラズ大ナルベシト雖モ、是レ今日ニアラズ、將來ニ至リ始メテ之ヲ知リ得ベシ。兎ニ角露國ハ今回清國ニ對スル權威ヲ强フシ、新均勢ヲ擔保シタルガ故ニ、自己ノ密志ヲ達スルニ便利ナル運動ヲ爲シ得ベク、之ト同時ニ「シベリヤ」鐵道築造工事ヲ督促シ、且ツ海軍ヲ盛大ナラシムルコトニ勉ムベシ」ト説ケリ。

實際「タイムス」記者ノ説ノ如ク、露國ガ日本清國ノ近海ニ强盛ナル艦隊ヲ有スルハ目下ノ急務ニシテ、東「シベリヤ」ニ充分ナル陸兵ヲ駐屯セシムルコトモ亦タ頗ル必要ナルベシ。日本ノ通信ニ由レバ、露國ニ對スル日本ノ敵愾心ハ全國民ヲ鼓舞振起セシメタリ」ト、夫レ或ハ然ラン。日本